
真・恋姫†三国伝 Brave Battle Story

kkk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†三国伝 Brave Battle Story

【Nコード】

N4995U

【作者名】

kkk

【あらすじ】

かつて光り輝く4人のガンダムと4人の女神と4匹の獣が天から降り立った地、三璃紗。神話の『四神』と『四神姫』と『四聖獣』と呼ばれる彼らは協力して世界を平定すると・・・太陽と月と海と大地となつて世界を安定していた。やがて、時は二世紀も末のころ・・・、一人の乙女と一人の侠が乱世に平和を取り戻すために世直しの旅に出ていた。kkkスタジオmhttp://blogs.yahoo.co.jp/kazu010202003

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』A（前書き）

今回からアニメ版の恋姫無双を元にした小説がスタートします。これからもよろしく願います。

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』A

かつて光り輝く4人のガンダムと4人の女神と4匹の獣が天から降り立った地、三璃紗。神話の『四神』と『四神姫』と『四聖獣』と呼ばれる彼らは協力して世界を平定すると・・太陽と月と海と大地となつて世界を安定していたやがて、時は二世紀も末のころ・・・・一人の乙女と一人の侠が乱世に平和を取り戻すために世直しの旅に出ていた

桃の花が咲き乱れる桃園の中を二人が歩いていた

???

「桃の花か・・・・」

???

「そろそろ出てきたらどうだ？」

二人が言つと同時に山賊が現れた

アニキ

「へへへ・・・・ここは俺達の縄張りだな。通してほしければ金目の物を置いていきな!!」

???

「まったく・世も末だな・・・・」

???

「その通りですな・・・・」

賊の頭の言葉に対し、二人の旅人は被っていたマントのフードを降ろす。一人は、美しい黒髪を頭の左側に束ねた少女の顔が。もう一人は、鬼の意匠が入った面を着け立派な黒髭を生やした侠の顔がそれぞれあらわになる

チビ

「ん？…アニキ、こいつら、もしかしたら噂の黒髪と鬼髭の山賊狩りかもしれないぜ」

アニキ

「ああ？なんだそりゃ？」

チビ

「知らないんですかい？襲ってきた山賊を次から次へと薙ぎ払う美しい黒髪を生やした武者と、そいつに負けないくらいの腕を持つ鬼の面と髭が目立つ侠がいるってことを」

アニキ

「ハッ、上出来だ！その黒髪と髭を頭ごと切り落として、兜の飾りにしてやるよ！」

調子にのってほざく賊の頭に構うことなく、二人組はマントを外した。美しい黒髪とたわわな胸（ここ重要）を持ち、その手にした青龍偃月刀を構える少女。鬼の面を頭上にあげ素顔を現し、同じく手にした鬼牙龍月刀を構える侠。二人は賊に向かい、威風堂々と叫ぶ

関羽（真名・愛紗）

「我らは関羽！！！！ 乱世にはびこり、無力な人々を苦しめんとする賊どもよ！！！」

関羽ガンダム

「己の罪を恥じ、地獄へ向かう気があるというならば!!」

愛紗、関羽ガンダム

「かかってこい!!!」

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』

旅を続ける愛紗と関羽ガンダムは、ふと道端に詰まれた岩に目が止まる。良く見ると岩の前には花が添えられている……おそろくは誰かの墓標だろうと、二人は察した

お婆さん

「最近はこのあたりまで賊が出るようになってよ。身ぐるみをはがされて殺されるものも何人もおつてな……花はせめてものたむけさ。ひどい世の中になったよ……役人がしっかりしてくれればいいんだけどねえ……」

愛紗

「そうだったのですか……」

通りすがりの老婆の言葉から確信を得た二人は、墓標に礼をする。
今もまだ世の中に賊がはびこるのかと、胸が痛む二人だった……

やがて二人は、佛土村と呼ばれる村に足を運んだ

愛紗

「こんな村の近くまで賊が出てくるとは……」

関羽ガンダム

「いたい・・・この国はどうなっているのだ？」

すると・・・

村人

「で・・・出た！！！！？」

愛紗

「賊か！！？きゃあああああ！！！！」

関羽ガンダム

「うおおおおおおおお！！！！」

二人の前に鶏が現れ、思わず驚いてしまう。そこへ・・・

張飛（真名・鈴々）

「にやつはー！！『鈴々・張飛山賊団』のお通りなのだー！！」

張飛ガンダム

「おらおらどけどけー！！邪魔するとブタにはねられるぞー！！」

赤いショートヘアに虎バッジをつけ、鈴々・張飛と書かれた旗を掲げながらブタにまたがる少女、張飛こと鈴々。少女の髪に負けないくらい赤い鎧を身につけ、たくさんの野菜を抱えながら少女の後を追う俠、張飛ガンダム。その二人の後を、子供たちが声を上げながら追いかける

関羽ガンダム

「子供・・・」

愛紗

「あいつらは一体何なのだ？」

鶏

「コケー！！」

関羽ガンダム

「うおおおおおおおお！！！！？」

愛紗

「きゃあああああ！！」

突然、鶏が二人の前を飛んだので、驚いて、尻もちをついてしまった。『鈴々・張飛山賊団』はそれにお構いなく、そのまま進んでいったのであった。そんな『鈴々・張飛山賊団』を見た愛紗と関羽ガンダムは呆然としていた

愛紗

「なんなんだ？」

関羽ガンダム

「いつたい……」

場所は変わって、村の食事処で昼食をとった関羽ガンダムと愛紗は店の主人である鴻夫人に話した

鴻夫人

「あっはっはっは。そりゃあ災難だったねえ」

関羽ガンダム

「笑いごとではありませんぞ…全く、いくらなんでも悪ふざけが過ぎます!!」

愛紗

「一体なんなのだ？あの悪ガキどもは・・・『鈴々・張飛山賊団』とか名乗っていたが」

鴻夫人

「名前の通り鈴々って女の子と張飛って侠が率いる山賊団さ。赤い髪の子と赤い鎧の侠がいただろう？その二人が村の子供たちを率いて、作物やゆで卵を取ったり、畑を荒らしたり、牛にいたずらしたり、ニワトリを追いかけまわしたりとちよつとした悪さを働いてるんだ。そうそう！この間は庄屋様の屋敷の堀に庄屋様の似顔絵を落書きしてただけど、あれは傑作だったねえ」

鴻夫人の言葉にあきれる愛紗と関羽ガンダムであった

関羽ガンダム

「まったく親は何をやっているのだ!!？山賊気取りの悪ガキ達をほっておくとは・・・」

愛紗

「そんな親の顔が見てみたいわ!!」

鴻夫人

「あの子・・・鈴々には親がないのよ・・・」

鴻夫人の言葉にふたりは驚いた

鴻夫人

「この村に来るに住んでいた村は賊に襲われ、その際にあの子の両親は殺されてしまい、その後は佛土村の近くの山奥に暮らす母方の祖父の下に預けられたとのこと。しかしその祖父も病で亡くなっており、現在は後からやってきた張飛と一緒に暮らしているらしいのよ」

愛紗

「そうだったのですか……」

鴻夫人

「それに張飛は以前住んでいた村では名の知れた武芸者だったが、偉大な侠になると言って光の都・洛陽へ向かっている間に村が賊に襲われてしまい、駆けつけた時には村が滅ぼされてしまったのよ。

それがトラウマとなり「偉大な侠になる」という夢を諦め、流浪していた際に佛土村を訪れ、鈴々と気があい村に留まっているそうよ。」

関羽ガンダム

「それで二人があつたのですか……」

鴻夫人

「あの二人だつて、根はいい子達なんだよ。今はちよつとハメを外してるだけ…子供たちのいい遊び相手になってるから、その親達も大目に見てあげてるんだよ」

しばらく黙って聞いている、愛紗と関羽ガンダムは口を開いた

愛紗

「ところで……鴻夫人殿……」

関羽ガンダム

「折り入って頼みたいことが……」

鴻夫人

「頼み？」

それから時は流れて、すっかり辺りが暗くなった佛土村。愛紗と関羽は何をしていたかというところ……先ほどの飯屋の裏にあるワラ小屋にいた。手持ちの路銀が少なくなったため、働く代わりに一晩泊めて欲しいと鴻夫人に頼んだところ、快く聞き入れてくれたようだ。とはいえその仕事内容は結構大変だったようで、ワラに腰掛けた愛紗はため息をつく

愛紗

「鴻夫人殿は見かけによらず人使いが荒いな……」

関羽ガンダム

「はは、確かに……しかし、野宿に比べれば天国なのだから良しとしましょう」

愛紗

「……それもそうですね」

苦笑いする関羽ガンダムに応える愛紗。その後二人はワラの上に横になり、女将から聞いた鈴々と張飛の過去を思い返していた

愛紗

「……………賊に両親を、か……………」

関羽ガンダム

「…………守れなかった…………か……」

二人は思い出したのであった。あの悲しい過去を…………

……………
……………
……………

この頃、愛紗と長生（後の関羽ガンダム）のいる村に賊が攻めてきたことを知らされた。

・ 長生は鎧を着て準備をしていた。それを見ていた愛人の楼蘭は…………

楼蘭

「長生、行かないで！！殺されてしまうわ！！」

長生

「俺と愛閃が行かなければ村人が殺される。行くしかあるまい！！」

楼蘭

「でも…………」

長生

「案ずるな楼蘭。俺は負けん！！」

楼蘭

「長生…………せめてこのはい玉をお持ちください。我が家に伝わるお守りです」

そのころ、当時、十歳の愛紗は兄の愛閃を止めようとしていた

愛紗

「兄様、行かないでください!!」

愛閃

「だがこのままでは村人が殺されてしまう。心配するな、愛紗。長生殿と僕は負けないから・・・」

愛紗

「兄様・・・」

愛閃

「だが念のため、蔵の中に入っているんだぞ!!」

愛紗

「はい・・・」

そして、長生と愛閃は闘うが、大勢の賊にかなわず、倒されてしまった。その際に賊達は殺戮を始めてしまった。しばらくして・・・

長生

「う・・・うっ!!」

長生は目を覚ました。そして胸の鎧からはい玉をとりだした

長生

「楼蘭のはい玉。これのおかげで助かったのか・・・!!!!!!」

長生は最初に見た光景に驚いていた。それはあい廃墟となった村と村人の死体であった

愛紗も兄を失った悲しみに耐えきれず、悲鳴を上げたのであった

・・・・・・・・・・・・・・・・

愛紗、関羽ガンダム

「ハッ！！？」

冷や汗をかきながら目を覚ます二人。それは、お互いに悲しい過去を思い出した証拠だった

関羽ガンダム

「すみませぬ。昔の夢を見ていたようです」

愛紗

「いや、私もです…気になさらないで下さい」

だが、二人は決して弱みを見せなかった。その心の傷が、二人を強くするのだから…。

愛紗

「兄様……」

関羽ガンダム

「………楼蘭」

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』A（後書き）

Bパートへ続く

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』 B（前書き）

B
パートです

「急いでだよ」

頼みごとだけして、鴻夫人はさっさと自分の持ち場へといってしまった。あまりに多くの要求をされては、さすがの山賊狩りと言えども涙目になるのであった……

数分後、刈ってきた芝を背負いながら二人が村に戻ると……庄屋の屋敷が騒がしくなっていた。

庄屋

「いいですか、相手は子供と言えど手のつけられないとんだ暴れん坊です！油断は禁物ですよ！」

数人の兵士に対して声を荒げる庄屋。何があったのか、二人は村人に聞いてみることにした。

愛紗

「何かあったのですか？」

村人

「なんでも鈴々と張飛を、今から役人に捕まえさせるつもりなんです」

関羽ガンダム

「役人に、ですと？相手は子供だというのに……」

村人

「どうやらこの間の壁の落書きの件が相当頭に來たようで、庄屋様の堪忍袋の緒が切れたようなのよ」

「本物の山賊には手を出さないクセに」と皮肉る者や、捕まった子供たちがどうなるのか不安になる者の声を聞き…愛紗と関羽ガンダムは庄屋たちの前に出た。

愛紗

「庄屋殿。お話の途中で申し訳ないが……」

庄屋

「ん？なんだお前ら」

関羽ガンダム

「我々は旅の武芸者で、名は関羽と申します。聞けば鈴々・張飛なる二人組は、大人でも手をつけられぬ暴れ者だとか」

愛紗

「そのような者たちに傷つけられては、役人殿としてもつまらぬでしょう。所詮相手は子供…ここは一つ我々が庄屋殿に謝罪するよう、説得に向かうというのはどうだろう？」

庄屋

「あんたらが？確かに物騒な物を持っているが……本当に大丈夫なのか？」

関羽ガンダム

「これはちよつと……もちろん腕には自信を持っていますぞ」

愛紗

「いくら暴れ者とはいえ所詮は子供、本物の山賊に比べれば……」

やや胡散臭そうな顔をする庄屋の横で、役人がハツと思い出す

役人

「あつ！もしかして貴様らは…かの有名な黒髪と鬼髭の山賊狩りなのか！？」

庄屋

「え！？アンタらが！？」

愛紗

「ま、まあ…自分からそう名乗ったことはないが…／／／」

関羽ガンダム

「良く、そういうことは言われますな…／／／」

少々照れくさそうに反応する愛紗と関羽ガンダムだったが……

役人

「鬼髭の方は結構目立つ侠と聞いていたから良しとして…黒髪の方は黒髪のきれいな『絶世の美女』だと聞いていたが…」

庄屋

「噂はあてにならんもんだなあ」

愛紗

「えーと、それはどういことですかな……（怒）？」

関羽ガンダム

「……………」

庄屋と役人たちの愛紗に対する反応がどこか残念に見え、二人はやや複雑になるのだった。ともあれ、鈴々と張飛の説得は愛紗と関羽が引き受けることになったのだが・・・山賊団の一員の少年が、それを盗み聞きして即座に山奥へ向かったことに気付く者はいなかった

愛紗と関羽ガンダムは一本杉の目立つわかれ道へと差し掛かった

愛紗

「これが一本杉か・・・」

関羽ガンダム

「左に入れば後は道なりと聞きましたからな・・・」

二人は言われたとおりに左に進むと・・・

ヒュッ！！

愛紗

「くっ・・・」

関羽ガンダム

「何奴！？」

突然頭上から石が飛んできたのだ。咄嗟に青龍偃月刀で防ぐ愛紗と

関羽が見たのは、先ほど盗み聞きしていた山賊団の一員の少年だった

少年

「ここから先は『鈴々・張飛山賊団』の縄張りだ！！役人の手先は帰れ！！」

関羽ガンダム

「止めんか！危ないではないか！」

少女

「このこのこの！！おやびんたちは絶対役人に捕まえさせるもんか！！」

愛紗

「えええい！！面倒くさい！！ハアツ！！」

次の瞬間、愛紗は前に飛び出し…………少年が乗っている樹を一太刀で斬ったのであった

少年

「えっ！？わっ！？うわあああああ！！！！！！！！」

勢いよく倒れる樹、そのせいでバランスを崩して落ちそうになった少年は関羽ガンダムが鬼牙龍月刀を差し出して服の襟を捉えたことで落下しないですんだ

少年

「た、助かった…」

愛紗

「それは……………」

関羽ガンダム

「……………どうかな？」

少年は振り向くと黒い顔になっている愛紗と関羽ガンダムの姿が見

えたのであった。

少年

「！！！！！！？」

少年はお仕置きをされたのであった。

先へ進む二人の後を、こそこそと付いてくる少年。どこまでついてくるのかと、二人が呆れていると……

少女？

「やーい！ブースー！」

少女？

「寸詰まりー！」

少女？

「親父ー！年増ー！」

少女？

「としまー！」

仲間の少女たちが現れ、二人に暴言を連発しはじめた

愛紗

「んなつ！！誰が年増だ誰が……！！！」

関羽ガンダム

「拙者も親父と寸詰まりっっていわれる年では……！！！」

愛紗、関羽ガンダム

「「ん！？」」

愛紗と関羽ガンダムは少女達の暴言に頭にきて向かおうとするが、足元に気付いて、止まる。そこには葉がたくさん載せられていたのであった

関羽ガンダム

「どうやら、頭に血が昇って前進すると考え落とし穴を仕掛けたのでしょう…」

愛紗

「なるほど、……子供にしては良くできたと褒めてやりたいところだが…」

直後、二人は無駄にカッコよく回転ジャンプして葉が詰まれたところを飛び越える！！

愛紗

「そのような手に引つ掛かる関雲長ではないわ！！」

そして葉の積まれていないところへ華麗に二人同時着地（無駄にキメポーズありで）！

関羽ガンダム

「さあ、観念してもらおうか！」

しかし……子供たちの顔はにやけた

ズボッ！！

愛紗、関羽ガンダム

「「え!?!」」

ドッシーン!!!

二人が着陸したところに穴があき、愛紗と関羽ガンダムは穴の中に落ちてしまった

少女?

「落ちた落ちたー!!」

少女?

「かつこわりー!」

少女?

「ひっかかってやんのー!」

少女?

「やんのー!」

愛紗

「ぐぬう…関雲長、一生の不覚……!」

関羽ガンダム

「ま、まんまとしてやられましたな……」

見事はまってしまった落とし穴の中で、二人はひっかかった己を恥じていた(ちなみに関羽ガンダムの上に愛紗が落ちてきた状態である)

少女？

「どーする？」

少女？

「埋めちゃおうか」

少女？

「その前におしっこかけよー！」

少女？

「かけるー！」

あまりに調子にのる子供たちに…二人の関羽は吹っ切れた！！

愛紗、関羽ガンダム

「「こらー！！！！！！！」」

少女達

「きゃあああああああ！！！！！」

愛紗と関羽ガンダムは子供達にお仕置きを始めたのであった

お仕置きを受けた子供たちはすっかり（？）大人しくなったが、それでも鈴々と張飛ガンダムを連れていかせまいと目は真剣だった

少年

「おやびんたちはお前らなんかに負けないからなっ！」

愛紗

「わかったわかった…鈴々と張飛は悪いようにしないから、お前たちは村に帰れ」

少女？

「…本当か？」

少女？

「村に帰ったら、おやびんたちを役人に渡したりしない？」

少女？

「しない…？」

関羽ガンダム

「ああ、もちろん。約束しよう」

少女？

「帰ろう…」

少女？

「うん…」

続く関羽ガンダムの言葉を聞き、子供たちは家に帰ることにしたが。

子供たち

「…ブース・デーブ・年増ー！！お前らなんかおやびんたちにやられちゃえー！！」「」「」

少女？

「ちゃえー！」

愛紗、関羽ガンダム

「「あつ……………」」

子供たちと別れてから数分後、二人は先に進んでいた

愛紗

「全く…あいつらに比べたら年上かもしれんが…（怒）」

関羽ガンダム

「まったくですぞ…………それよりも見えてきましたぞ」

未だ「年増」と「親父」呼ばわりされたことを根に持つてる愛紗と関羽ガンダムは目的地に近いのを察する。この近くに鈴々と張飛がいると…“氣”で感じているのであろう。そして二人は………ついに辿り着いた。岩山の上に建てられた山小屋の前に、その二人はいた蛇矛を携えた赤い髪の少女、鈴々と、雷蛇と呼ばれる矛を携えた赤い鎧の侠、張飛ガンダム

愛紗

「お主たちが鈴々と張飛だな」

鈴々

「…鈴々は『真名』なのだ！『真名』は親しい同志が呼び合う名前だから、お前らに呼ばれる筋合いはないのだ……！」

張飛ガンダム

「そうだ気安く呼ぶんじゃねえ……！」

この三璃紗では武將たちには「名」と「字」以外に“真名”と呼ば

れるもう一つの名前が存在していた。『真名』を呼ぶ事が出来るのはその者と親しき間柄にある者のみであり、逆にそうでない者が『真名』を口にした時は切り捨てられても同然と言われるほど重要な名前なのだ

関羽ガンダム

「なるほど…では改めて聞こう。お主たち、名はなんと申す！」

鈴々

「我こそは“張飛”！字は“翼徳”！寝た子も泣きだす『鈴々・張飛山賊団』のおやびなのだ！」

張飛ガンダム

「同じく、双ぶ者無き戦の刃！“張飛”様とは俺のことだ！」

二人の名乗りから愛紗と関羽ガンダムは察する……この二人もまた自分たちと同じように【同じ名を持つ武将】なのだ

愛紗

「お主たちの手下は、皆村に追い返したぞ」

鈴々・張飛ガンダム

「「！！？」」

愛紗の言葉を聞き、鈴々と張飛ガンダムは咄嗟に岩山を降りて愛紗と関羽ガンダムに刃を向ける。

鈴々

「鈴々達の友達に何をしたのだ！！？」

愛紗

「なに、ちょっとお仕置きをただけだ」

張飛ガンダム

「んにやるー…！！仲間の仇…十倍返しにしてやらあ…！！」

そう叫んだ直後、張飛ガンダムの背中が雷蛇に装着され…大雷蛇に変化した

関羽ガンダム

「どうやら口で言っても聞き入れてくれそうもないな…愛紗殿、ここは一つ…」

愛紗

「ああ、身体で分かせてやろう…来い！」

鈴々・張飛ガンダム

「「うりゃあああああああ！！！！！」」

愛紗・関羽ガンダム

「「はああああっ！！！！！」」

愛紗と関羽ガンダムが偃月刀を構えて誘った直後、鈴々と張飛ガンダムが斬りかかる！

愛紗

「重い……」

関羽ガンダム

「力押しでは不利か……」

そう思った二人は攻撃を始めた。夕暮れ時になっても四人戦いは激しさを増していた。

愛紗

「中々しぶといな…！」

鈴々

「そっちこそなのだ！でも…鈴々の本気はまだまだこんなもんじゃないのだ！てやあああ…！」

愛紗

「たあああつ…！」

張飛ガンダム

「聞け…！！雷の雄たけびを…！！…！」

関羽ガンダム

「見よ…！！鬼の牙の高ぶりを…！！…！」

鈴々

「うりゃあああああああ…！！…！！…！」

愛紗

「はあああああああ…！！…！！…！」

張飛ガンダム

「爆裂大雷蛇…！！…！」

関羽ガンダム

「鬼牙百列撃！！！！」

それぞれの攻撃がぶつかり合ったのであった

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』 B（後書き）

Cパートへ続く

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』C（前書き）

C
パートです

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』C

戦いは日が暮れても治まることはなかったが……鈴々と張飛ガンダムが岩をも斬った一撃を放ち、それを愛紗と関羽ガンダムが防いだところで一旦治まった

関羽ガンダム

「……惜しいな」

鈴々

「え……？何がなのだ？」

愛紗

「これだけの腕を持ちながら、やっていることと言えば……山賊じつことはな」

張飛ガンダム

「っ……余計なお世話だっつーの！」

ふと立ち上がり、愛紗と関羽ガンダムは鈴々と張飛ガンダムに語り始める

愛紗

「張飛よ……お主は幼い頃に親を殺されたそうだな」

関羽ガンダム

「侠の張飛……お主は過去に住んでいた村を守れなくて、偉大な侠になる夢を諦めたと聞く」

鈴々

「そ、それがどうしたのだ!？」

愛紗

「私も幼い頃、家族を失った」

鈴々・張飛ガンダム

「「えっ……」」

愛紗

「村が戦に巻き込まれ……父も母も……そして兄様も……」

「

関羽ガンダム

「拙者も旅路を共にしていた恋人をその時に……」

偃月刀を握る愛紗と関羽ガンダムの手が震えている姿が、鈴々と張飛ガンダムの目に留まる

関羽ガンダム

「やがて我らは誓った……こんな悲しみは繰り返したくない……二度とこのようなことが起きない世の中を目指そうと……」

張飛ガンダム

「……それが俺様達となんの関係があるってんだよ!」

愛紗

「お主達は変えたいと思わぬのか!戦に巻き込まれ、賊に襲われ、無力な人々が虐げられていくこの世の中を!」

二人の言葉に鈴々と張飛ガンダムは己の得物で愛紗と関羽ガンダムを叩きつけた

鈴々

「そんなのっ！！そんなのわかんないのだ！！ただ、ただ！！鈴々はずっと、ずっとさびしくて！！でも、どうしていいかわかんなくて！！それで、それでええええ！！」

張飛ガンダム

「テムエらにつ！！テムエらに何がわかるってんだ！！俺は、俺はずっと悔しくて虚しくてたまらなくて！！こんな俺に！！出来ることなんか！！出来ることなんかああ！！」

何回も叩きつけられ、得物を手放してしまつ愛紗と関羽ガンダム。やられる！と思ひ身構えるが……鈴々と張飛ガンダムは武器を叩きつけるどころか……………

鈴々、張飛ガンダム

「「うっうっ………うわああああああん！！！」」

なんと、二人して突然泣き出したのだ！これには流石の愛紗と関羽ガンダムも驚いたのは言うまでもない

愛紗

「ど、どうした！？何故泣くんのだ！？おい！！」

関羽ガンダム

「こ、こら！？大の侠が泣くんじゃない！」

それでも泣きじゃくる鈴々と張飛ガンダム。あまりにも予想外な展

開に、愛紗と関羽ガンダムも困った表情で顔を見合わせるしかなかった

その後、泣きやんだ鈴々と張飛ガンダムが「途中で泣いたからさっきの戦いは自分たちの負け。だから自分たちを好きにしろ」と言ってきたのだ。もちろん愛紗と関羽ガンダムには最初からそんなつもりはなく、ただ今までの悪行を反省して、ちゃんと庄屋や村の人たちに謝罪してくれればそれでいいと告げると、鈴々と張飛ガンダムは承諾してくれた。そこまでは問題なかったのだが……自分達も付き添うから明朝に一本杉の下で待ち合わせしようと言って、二人の関羽が帰ろうとしたその時だった。泊って行けと二人の張飛が突然こんな誘いを持ちかけてきたのだ。共に旅を続けた時間が長いため、最初は平気だと断ったのだが……さびしそうな二人の背中を見て「気が変わった」ということで、一晩厄介になることに決めたのである

その後、愛紗は風呂に入っていた

愛紗

「まったく……妙なことになったもんだ……」

外で薪を入れていた関羽ガンダムも同じことを考えているのだろうか
かと愛紗がぼんやりしていると

鈴々

「湯加減はどうなのだ？」

愛紗

「ちよつどいいくらいだ」

鈴々

「だったら鈴々も入るのだ！」

愛紗

「え！？」

いきなりの発言に愛紗が驚いたのもつかの間、鈴々は扉を開け・・・

鈴々

「突撃い～～～っ！！」

バsshャーーン！！

勢いよく湯船に飛び込んだのであった

愛紗

「こおらーっ！！飛び込むんじゃないっ！！！！」

鈴々

「はにやつ！？」

愛紗

「全く、風呂の入り方も……ん？」

いきなり飛び込んできた鈴々を叱る愛紗だったが……ふと、鈴々が自分をみつめてることに気付く

愛紗

「なんだ？どうかしたのか？」

鈴々

「…おっぱい大きいのだ…」

愛紗

「わわっ！／＼／」

叱るのに夢中で胸元を隠してなかったのに気付き、愛紗は赤くなりながら慌てて隠して湯船に潜る。外で薪を入れていた関羽ガンダムが、鈴々の発言で思わず吹いて顔を赤くしていたのはここだけの話である

鈴々

「どうしたら、そんなにバインバインになるのだ？」

愛紗

「どうしたらって…そ、そうだ！志だ！胸に大志を抱けばその分だけ大きくなる…ハズ…」

いきなり胸の話題をされ、戸惑いながらも説明する愛紗。何とも言えない苦し紛れの言い逃れにも聞こえる説明だが、鈴々は愛紗の言葉素直に信じていた

鈴々

「ホントに！？ホントにそれで大きくなるのだな！？」

愛紗

「まあ、そういう説も…あつたりなかったり…」

鈴々

「よぉ～し！だったら、鈴々も大志を抱くのだ！」

浴槽の中で立ち上がり、堂々と宣言する鈴々。そんな鈴々を見て、愛紗も自然と頷くのだった

愛紗

「そうだな…大志を抱くのは、悪いことじゃないからな」

そのころ、外で薪を入れていた関羽ガンダム先ほどの愛紗と鈴々の会話を聞いて苦笑いを浮かべていた

関羽ガンダム

「愛紗殿…いくらなんでもその説明は無理がありますぞ…／＼／」

やや突っ込みたい気持ちでいっぱいだったが、乙女の会話に俠が介入するのは良くないし、何より鈴々の夢を壊すのはいかなものかとも考えていたので黙っていることにした

寢床を準備していた鈴々と張飛ガンダムの下に、二人から借りた寝巻に着替えた愛紗と関羽ガンダムが現れる

張飛ガンダム

「枕は使っていいぜ」

関羽ガンダム

「すまぬな…」

鈴々

「はにゃ？やっぱり鈴々のじゃ、小さかったのだ」

愛紗

「いや十分だ。すまぬな。寢床まで貸してもらって」

鈴々

「いいのだ！勝負に負けたのだから一晩一緒に寝るくらいしようがないのだ！」

関羽ガンダム

「…なんか誤解を招きそうな表現だな…」

張飛ガンダム

「気にすんなって！ホントのことなんだしょ」

鈴々

「それに、こうして張飛だけじゃない誰かと寝るのって久しぶりで…全然…全然嫌じゃなくって…その…母様や父様と一緒にみたいで…」

「母様と父様」発言に、思わず起きあがってしまう愛紗と関羽ガンダム

愛紗

「ばっバカ言え！！私はお主達のような娘や息子がいるような年ではない！せいぜい姉といったところだ！」

関羽ガンダム

「そ、そうだぞ！！拙者も…無理があるとは思うが、どちらかと言えば兄であろう！」

鈴々「……姉と？」

張飛ガンダム「…兄？」

愛紗

「それ以前に、私は子供が出来るようなことは…まだ一度も…／／」

細々と呟く愛紗とやや頭を抱える関羽に、今度は張飛が問いかけた

張飛ガンダム

「なあなあ！姉と兄だったら…姉ちゃんと兄貴ならいってことだよな！？」

関羽ガンダム

「ん？ま、まあそうなるが…」

鈴々

「だったら、関羽達は今日から鈴々達のお姉ちゃんとお兄ちゃんなのだ！！」

愛紗・関羽ガンダム

「「はあっ！！？」」

いきなりの発言に驚く愛紗と関羽ガンダム

愛紗

「いや、待て待て！姉とか兄ならいいというのは、そういう意味ではなく…」

鈴々

「…ダメ…なのか？（ウルウル）」

張飛ガンダム

「…やっぱ…ダメか？（ウルウル）」

愛紗・関羽ガンダム

「う………」

目をウルウルさせながら問いかける鈴々と張飛ガンダムに、愛紗と関羽ガンダムもたじたじである

関羽ガンダム

「だ、ダメ……ではないが……；」

その関羽ガンダムの言葉を聞いた直後…

鈴々

「わー！っ！！鈴々にお姉ちゃんとお兄ちゃんが出来たのだー！！！！」

張飛ガンダム

「ヤッホー！！俺様にもいい姉貴分と兄貴分が出来たぜー！！」

関羽ガンダム

「こ、こら！？」

愛紗

「わ、私たちはまだ認めたわけでは……！！？」

大喜びで鈴々と張飛ガンダムが愛紗に抱きつくすっかりその気になっている鈴々と張飛ガンダムに戸惑う愛紗と関羽ガンダムだったが…

鈴々

「これで、もう夜になっても…ずっと、さびしくないのだ…」

張飛ガンダム

「もう終わるんだなあ…二人だけの、さびしい時間も…」

鈴々と張飛ガンダムのその言葉を聞き、愛紗と関羽ガンダムも決意を固め口を開く

関羽ガンダム

「……わかった。では、拙者たちがお主たちの姉と兄になってやる」

鈴々

「うん！ずっと一緒なのだ！」

愛紗

「…ならば、私達と共に世の中を変えるための旅に出てくれるか？」

張飛ガンダム

「世の中を変えるため…」

愛紗

「もっとも実際には、どうすれば世の中を変えることが出来るかを探す旅…といったところか」

関羽ガンダム

「どうだ？共に来てくれるか？」

鈴々

「当然なのだ！」

張飛ガンダム

「もちろんだぜ！」

こうしてこの時を持って、4人の義兄妹が誕生したのだった

そして翌日：愛紗と関羽ガンダムの付き添いの下、鈴々と張飛ガンダムは庄屋に謝罪し、佛土村を旅だった。

関羽ガンダム

「よかったな、二人とも。庄屋殿も村人も快く見送ってくれて」

愛紗

「これもお前達がきっちりと謝ったからなのだぞ。」

鈴々

「う・・・うん・・・」

張飛ガンダム

「ああ・・・」

愛紗

「一本杉を右に行くぞ。それとも一度小屋に戻るか？」

鈴々

「ううん・・・いいのだ」

それでも浮かない顔をする鈴々と張飛に関羽が問いかける

関羽ガンダム

「どうした？もう村が恋しくなったのか？」

鈴々

「…そうじゃないのだ…ただ…山賊団の皆が、見送りに来てくれなかったから…」

愛紗・関羽ガンダム

「……………」

張飛ガンダム

「…きつと俺達がいいおやびんじゃなかったから…だから皆…」

愛想を尽かされたんだ…と、張飛が言い終わる寸前

愛紗

「そうでもないみたいだぞ。ほら、見てみる」

愛紗の言葉に、鈴々と張飛ガンダムが顔を上げると

少年

「おーやびいーん！！」

少女？

「武者修行して強くなってねー！！」

少女？

「皆おやびん達が帰ってくるの、待ってるからー！！」

少女？「おやびいーん！！」

鈴々と張飛が住んでいた山小屋の屋根の上で、『鈴々・張飛山賊団』の子供たちが、二人の“おやびん”に激励をかけていた。昨日と同じくらい目に涙を浮かべる張飛ガンダムに、二人愛紗と関羽ガンダムが声をかける

愛紗

「泣くな。旅立ちに涙は不吉だぞ」

鈴々

「っ…泣いてなんかいないのだ！」

張飛

「だ、誰が泣くかってんだよ！」

愛紗

「人は次に会う時まで、別れ際の顔を覚えておくものだ。立派なおやびんなら、そんな情けない顔を覚えてもらいたくはないだろう」

関羽ガンダム

「その通りだ……さあ、笑顔で手を振ってやれ」

鈴々と張飛ガンダムは涙を拭きながら、山賊団の子供たちに手を振った

鈴々

「みんなーっ！！行ってくるのだーっ！！」

張飛ガンダム

「お前らも元気でなーーーーっ!!」

紀元二世紀も末の頃…この世は乱れに乱れておった。そんな中、力を蓄え密かに野心を研ぎ澄ます者…己の力を試さんと文武に励む者…守るべきもののために闘おうとする者…様々な想いを胸に抱く者達があやなす運命の糸が絡み、結ばれる…

愛紗

「そろそろマントもいらんな」

鈴々

「もう春なのだ!」

関羽ガンダム

「花も随分咲いているな」

張飛ガンダム

「幸先も良さそうだ!」

世紀末に舞う無数の姫達と侠達の物語を……とくにご覧あれ。

第1話『関羽、愛紗。張飛と鈴々と兄妹の契りを結ぶのこと』C（後書き）

次回予告

愛紗

「いいか張飛、私達の妹と弟になったからにはちゃんということを聞いてもらうからな」

鈴々

「わかったのだ！！これからはスカートブリーツは乱さないように白いセーラーカラーは乱さないようにゆっくりと歩くのだ」

関羽ガンダム

「いや・・・そういうことではないが・・・」

張飛ガンダム

「次回 第二席『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くのことの』」

愛紗

「へえー、次回は私達が死地に向かうのか・・・ってええええええ！！！！？」

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』A（前書き）

今回はあの人が出ます。

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くのことの』A

鈴々と張飛ガンダムと兄妹の契りを結んで旅に出てから数日。むす
つとした表情をする二人に、愛紗と関羽ガンダムが問いかける

愛紗

「どうした？二人して難しい顔をして……………」

関羽ガンダム

「腹でも痛くなったか？」

鈴々

「…………おかしいのだ……………」

愛紗

「はあ？何がおかしいんだ、張飛？」

と、鈴々と張飛ガンダムはいきなり愛紗と関羽ガンダムの顔を指差す

鈴々・張飛ガンダム

「「そこ（なの）だ！！」」

愛紗

「はあ??」

関羽ガンダム

「そこ??」

鈴々

「関羽達は鈴々達と兄妹の契りを結んだのに、どうして鈴々のことを「鈴々」って『真名』で呼んでくれないのだ？」

張飛ガンダム

「鈴々の言つとおりだぜ。親しい同志は『真名』で呼び合うのは当然なのに、おかしいだろ？」

どうやら二人して『真名』のことでむっつりしていたらしい。「ああそういうことか」と、愛紗も関羽ガンダムも一瞬顔を見合わせる

関羽ガンダム

「確かにそうだが…我々はまだ知り合って間もないだろう？」

しかし、鈴々と張飛ガンダムはどこか寂しそうな顔になる

鈴々

「鈴々もお姉ちゃんの関羽のこと、ちゃんと“真名”で呼びたいのに教えてくれないし…」

張飛ガンダム

「同じ名前だからってよお・・・ヒゲだけズルイぜ」

いつの間にか張飛ガンダムは関羽ガンダムを「ヒゲ」呼ばわりしているが、当の関羽ガンダムは特に突っ込まない。まあ正確に言えば、ここに来るまで何回か「ヒゲではない」と叱ったにも関わらず呼び続けるので、諦めているようなものだが

愛紗

「わかった、わかった。オホン…私の名は“関羽”、字は“雲長”…“真名”を“愛紗”という。お主達にはこれから、私のことを『

真名』で呼んでもらいたい…これで良いだろう？ 鈴々、張飛」

関羽ガンダム

「うむ…これで鈴々も張飛も、他に言うことはないだろう？」

鈴々

「うん！」

張飛ガンダム

「おう！」

愛紗と関羽ガンダムの言葉に、笑顔で答える鈴々と張飛ガンダム。こうして四兄妹は、改めて『真名』を預け合ったのだった

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くことの』

しばらく歩いて関所を抜けようとした時、

門番

「ちょっと待て!!」

愛紗

「何か？」

門番の一人が愛紗と関羽ガンダムを呼びとめる

門番

「あの…もし違ったらすまぬが、もしかしてお主達は、あの【黒髪】と【鬼髭】の山賊狩りではないか？」

愛紗

「え？…あ、まあ…自分から名乗ってるわけではありませんが…／／」

関羽ガンダム

「周りからはよく、そう呼ばれます…／／／」

再び照れそうになる愛紗と関羽ガンダム……だったが

門番

「良かった、近くの村に現れたと聞いて、それらしき者に声をかけていたのですが…【黒髪のきれいな『絶世の』美女】と【鬼の面と黒髭が目立つ侠】の二人組と聞いていたので、見逃すところでした。そうと決まれば我が主に知らせねば。しばらくお待ちを……」

つまり自分は美女ではないと言ってるような門番の言葉に固まる愛紗（関羽ガンダムは平静を装っていたが、内心は結構焦っていた）。そして、門番は主を呼んでくると言ってその場を離れ……鈴々と張飛ガンダムは率直な感想を述べた

鈴々

「愛紗と関羽は有名なのだ！」

張飛ガンダム

「だよな！キレイだしヒゲだし！」

愛紗

「あ、ああ…黒髪『だけ』はな…（怒）」

関羽ガンダム

「ヒゲ『だし』とはなんだ、ヒゲ『だし』とは…」

正直、二人とも複雑な気持ちでいっぱいだったそうな

数分後：館に招かれた四兄妹が、草庵で館の主人を待っていると。
濃い目の赤毛の女性と白い鎧の侠が、水色の髪の少女と、白と青の鎧が際立つ侠を連れてやってきた。愛紗と関羽ガンダムが礼をしようとして立ち上がると、

赤毛の女性

「そのまま結構」

白い鎧の侠

「座っていいぞ」

と抑え、椅子に腰掛ける。女性と白い鎧の侠同時に、水色の髪の少女と白と青の鎧の侠も腰掛けた

公孫賛（真名・白蓮）

「待たせてすまない。我が名は“公孫賛”、字は“白珪”」

公孫賛イージエイト

「俺も彼女と同じ公孫賛だ。ここの太守としてこの辺りを治めている。こちらの二人は、お前達と同じ旅の武者で…」

白蓮と公孫賛イージエイトの紹介に応じ、少女と侠も名乗る

趙雲（真名・星）

「我が名は“趙雲”、字は“子龍”。お初にお目にかかる」

趙雲ガンダム

「私も、彼女と同じく“趙雲”と申します」

公孫賛イージエイト

「趙雲殿達には客将として、俺達の下に留まってもらっている」

その言葉に、愛紗も紹介で返す

愛紗

「お招きに預かり、光栄です。我らは関羽、字は雲長。それでこちらの二人は…」

鈴々

「鈴々なのだー!!」

張飛ガンダム

「張飛だぜーい!!」

関羽ガンダム

「こ、こら!!ちゃんと挨拶せんか!それに『真名』ではなく、ちゃんと自分の名前をだな…!」

いきなり軽々しく挨拶する鈴々と張飛を、慌てて叱る関羽ガンダム。すると……

星

「関羽殿……お互いの年が大分離れている割には、随分と大きな子供を二人もお持ちですな」

愛紗・関羽ガンダム

「「はあ！！！！？」」

予想しなかった発言に、大慌てで否定する愛紗と関羽ガンダム

愛紗

「ち、違います！！鈴々と張飛は子供ではなく、私たちと兄妹の契りを交わした仲でして……！！」

趙雲ガンダム

「ほお、兄妹の契りを……」

星

「ではどちらが『攻め』でどちらが『受け』ですか？」

愛紗・関羽ガンダム

「／／／／／！！！！！！……」

張飛ガンダム

「す、すげえこと聞いてくるなオイ……／／／／／」

星から更にとんでもないことを聞かれ、愛紗も関羽ガンダムも顔が赤くなる。張飛ガンダムでもそれが何を意味するかは分かっているようで、ちよつと顔が赤い

鈴々

「うーん……どっちかっていうと、鈴々が『セメ』なのだ」

愛紗

「こら……！？よく意味もわかってないのに、適当な返事をするな！！」

鈴々

「じゃあどういう意味なのだ？」

愛紗

「それはだな・・・」

適当に答える鈴々を叱るも、逆に聞かれて上手く説明できず、愛紗も黙ってしまう。

白蓮

「それはまた次の話で、実はお主達に折り入って頼みがあるのだが・・・」

関羽ガンダム

「拙者達に？」

公孫贇イージエイト

「辺境の小領主とはいえ、俺達は乱れに乱れた世の中を変える気持ちは一、二倍強いつもりだ」

白蓮

「漢王朝の威光は既にない今…冀州の二人の袁紹や、江東の侠の孫堅と二人の孫策…都で頭角を現してきた二人の曹操もまた、同じ志を持つ者達の仕官を望んでおり、自分もかの者たちに負けないくらい強くならねばならないから。お主達の力を私達に・・・」

趙雲ガンダム

「公孫贇殿。お話の途中で申し訳ありませんが…それはいささか早計ではないかと思えます」

公孫贊イージエイト

「と、言うത്？」

趙雲ガンダム

「【黒髪】と【鬼髭】、二人の山賊狩りのことは私も旅の途中、風の噂で聞いたことがあります。だが、噂というのは得てして尾ひれがつきがちなものでしょう」

愛紗

「……た、確かに……」

その趙雲ガンダムの言葉に、ちょっと心当たりがあるのか愛紗は微妙な顔をする

星

「私も彼と同意見です。故に、関羽殿達の実力を見極めてから召抱えになってもよろしいかと」

白蓮

「なるほど……」

星

「差し支えなければ、私達がその役を引き受けますが？」

公孫贊イージエイト

「おお！どうするのだ？趙雲達と一手、手合わせ願えぬか？」

関羽ガンダム

「い、いや。しかし拙者達は……」

やや戸惑い気味に返事を返す関羽ガンダム。確かに、急に手合わせを申し出られたら反応に困るのも仕方ないのだが…

星

「臆されましたかな？」

彼女の一言に、一瞬表情がこわばる愛紗と関羽ガンダム……………と

鈴々・張飛ガンダム

「「そんなわけないのだ！！（あるか！！）」」

愛紗

「な！？」

関羽ガンダム

「こ、こら！鈴々、張飛！」

突然、鈴々と張飛ガンダムが立ちあがって反論し始めたのだ

鈴々

「愛紗と関羽はお前らなんかよりずうーっ！と強いのだ！！だから、お前らなんかにぜえーっ！たい負けるわけがないのだ！！」

張飛ガンダム

「つーか愛紗とヒゲが出るまでもねーよ！！テメエらなんか俺様達がチョチョイのプーであつという間に倒してやらあ！！」

勝手なことを叫ぶ鈴々と張飛ガンダムの横で、頭を抱える愛紗と関羽ガンダム。と、そんな鈴々と張飛ガンダムの言葉に星と趙雲ガン

ダムも食いつく

趙雲ガンダム

「ほお…随分な自信をお持ちですね」

星

「では、その自信の程を見せてもらおうか」

鈴々・張飛ガンダム

「望むところなのだ！！（だぜ！！）」

庭に移動した一同。そこで、鈴々と張飛ガンダムと星と趙雲ガンダムはお互いの得物を手に対峙していた。しばし睨みあう両者……そして……

公孫賛イージエイト

「始め」

その一言で鈴々と張飛ガンダムが勢いよく飛びかかる！！

鈴々・張飛ガンダム

「ううりゃあああああつ！！」

最初の一撃を防ぎ、鈴々と張飛ガンダムの力に感心する星と趙雲ガンダム。直後に鈴々と張飛ガンダムは勢いよくそれぞれの蛇矛を振り回すが…星と趙雲ガンダムは動じることなく、すれすれのところで回避する

愛紗・関羽ガンダム

「……！！！！」

ほんの一瞬だが、その一瞬は愛紗と関羽ガンダムも見逃さなかった。その後も鈴々と張飛ガンダムの猛攻は続くが、やはり星と趙雲ガンダムは難なくかわしていく

鈴々

「~~~~っ！！ヒラヒラ逃げてばかりなのだ！！」

星

「どうした？もう終わりか？」

張飛ガンダム

「うるっせえ！！まだまだあーーーー！！」

散々振り回して少し疲れてきた鈴々と張飛ガンダムに、星がやや挑発してみた言葉をかける。それにあっさり乗って、張飛ガンダムが雷蛇を勢いよく振り上げたその時

愛紗

「鈴々、張飛、そこまでだ！！」

鈴々・張飛ガンダム

「！！？」

突然、愛紗が待ったをかけたのだ。急に手合わせを止められて納得がいかない鈴々と張飛ガンダム

鈴々

「なんで止めるのだ！鈴々達はまだやれるのだ！」

愛紗

「分かっている。ただ、私が立ち会ってみたくなったのだ」

関羽ガンダム

「うむ。拙者も愛紗殿と同意見だ」

鈴々・張飛ガンダム

「「??」」

その後は鈴々と張飛ガンダムに代わって、愛紗と関羽ガンダムが星と趙雲ガンダムと対峙する。愛紗と関羽ガンダムから発せられる、静かだが強い“気”…………それは星と趙雲ガンダムからも見て取れるほど強いものだった。そして愛紗と関羽ガンダムが偃月刀を構えると…………星と趙雲ガンダムは構えを解いた

趙雲ガンダム

「…本当に強い相手なら、わざわざ打ち合わなくてもわかります」

星

「公孫賛殿。関羽殿たちの実力、しかと見届けました」

白蓮と公孫賛イージエイトも星と趙雲ガンダムの言葉に頷き、愛紗と関羽ガンダムも構えを解く。ただ、鈴々と張飛ガンダムには何が何だかさっぱりわからないのであった

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』A（後書き）

Bパートへ続く

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』 B（前書き）

B
パートです

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』B

再び舞台は草庵に移る。未だにふくれっ面をする鈴々と張飛ガンダムに、関羽ガンダムが声をかける

関羽ガンダム

「どうしたのだ二人とも。そんなふくれっ面をして」

鈴々

「さっきのだと、なんだか鈴々達があんまり強くないように見えるのだ」

張飛ガンダム

「ああ。たく、俺様達を無視して勝手に話を進めやがって…」

関羽ガンダム

「いや、それは…」

どうやら先ほどの手合わせで、突っ込んでいった自分達は弱いんだと思われていると捉えたようだ

星

「張飛、お主達は強い…ただ、今はその強さを上手く使いこなせていないがな」

鈴々・張飛ガンダム

「……」

星の言葉を聞き、若干訝しがる二人の張飛。ふと、趙雲ガンダムが

白蓮と公孫贇イージエイトに問いかける

趙雲ガンダム

「ところで公孫贇殿。この間お話した例の件ですが…」

白蓮

「ああ、赤銅山のことが」

愛紗

「赤銅山のこととは？」

当然ではあるが事情を知らない四兄妹に、公孫贇イージエイトは浮かない顔をしながら答える

公孫贇イージエイト

「いやあ、実は恥ずかしながら山賊退治に手間取っているな。彼奴らの出没する範囲から見て、賊の隠れ家が赤銅山山中にあることは間違いないのだが…それらしき砦が見当たらず、討伐隊を出すことも出来なくて…」

趙雲ガンダム

「それを聞いて先日、私達が一計を案じました」

関羽ガンダム

「ほお…して、その策は？」

趙雲ガンダム

「偽の商人を用いて荷物の中に潜み、それをわざと賊に盗ませ隠れ家に運ばせる…つまり、賊自らが道案内をしてくれるというわけです」

愛紗

「なるほど…それは面白い」

趙雲ガンダムの提示した策に興味を抱く愛紗。関羽ガンダムも同じように頷くが、白蓮と公孫賛イージエイトはやや不安を抱いていた

白蓮

「し、しかしいくらなんでも…賊の隠れ家に単身乗り込むなど…」

星

「虎穴に入らずんば虎児を得ず……目的を達成するためには、多少の危険もやむをえまい。どうだ？関羽殿お二人も、私たちと共に賊の隠れ家を訪ねてみないか？」

真剣な瞳で誘う星に、愛紗も関羽ガンダムも引き受けた……と

鈴々

「鈴々も行くのだ！」

張飛ガンダム

「俺様も行くぜえ！」

星

「お主達には無理だ。（キッパリ）」

当然のようについていくと宣言する鈴々と張飛ガンダムの言葉を、スッパリと切る星

鈴々

「なんでなのだ？」

星

「良いか？荷物の中に潜み、賊の隠れ家に向かうまでの間は、ずっと息をひそめなくてはならんだぞ。お主達のように根が騒がしく出来ている人間には無理だ。きつと一時も我慢できないぞ」

「根が騒がしい」と言われ、鈴々と張飛ガンダムの頭に血がのぼるのはかなり速かった

鈴々

「そんなことないのだー（怒）！！鈴々達はやればできる子なのだー（怒）！！」

張飛ガンダム

「そうだそうだー（怒）！！俺様達をバカにすんなー（怒）！！」

星

「ほお？では今ここでやってみるか？」

鈴々

「お安い御用なのだ！」

張飛ガンダム

「こうやってじっとしてりゃいいんだから簡単じゃねーか！」

星の言葉にあっさり乗り、そのまま胡坐をかいて我慢する鈴々と張飛ガンダム

そのまま一分…

五分…

十分…と、時間がたつに連れ、徐々に二人の我慢は限界に達し……

チュドーン！！

鈴々・張飛ガンダム

「はにやあ~~~~~！！！！」

見事に爆発したのであった

関羽ガンダム

「鈴々っ！！張飛っ！！大丈夫か！？しっかりしろあ~~~~！！」

愛紗

「す、すごい熱だ！！公孫贄殿、医者、早く医者をお~~~~！！」

撃沈した二人の張飛に慌てる愛紗と関羽ガンダム、そして苦笑いを浮かべる白蓮と公孫贄イージエイト。その横で星は、何事もなかったかのように茶をすすっていた

趙雲ガンダム

「星、あそこまでからかわなくても良かったんじゃ……」

星

「良いではないか。ああいう手の者はすぐに乗るから面白いのだから」

趙雲ガンダム

「そついうものなのか……？」

そんな星の態度に、趙雲ガンダムも微妙な心境になるのだった

数分後、愛紗は用意された箱（既に荷車に積まれている）を開ける。大きさはそこそこだが、人間二人と狭二人が入るにはやや狭そうである

関羽ガンダム

「ここに隠れるのだな？」

趙雲ガンダム

「はい。少々狭いですが…大きすぎず小さすぎず、怪しまれない程度の箱と考えると、これが最適かと」

愛紗

「この中に四人で入るとなると、相当身体をくつつけないと…」

星

「心配するな。私は“その気”がなくもないので、むしろ大歓迎だ」

愛紗

「なるほど、それなら…」

と、ここで愛紗と関羽が星の“その気”という言葉にハッとする

愛紗

「え、って、あの…“その気”って…!?!」

関羽ガンダム

「あ、いや、えと、一体…!?!」

素知らぬ顔をする星に、趙雲ガンダムも「やれやれ」と呆れ気味な顔をする。どうやら星の冗談はすっかり聞きなれているらしい（とはいえ、やはり下ネタ関係には戸惑うようだ）

ここは赤銅山山中。

公孫贄達が用意した偽の商人たちが、賊をおびき出すための積荷を運んでいた。その中に、愛紗達が潜んでいる箱もあったのだが…

愛紗

（ちよ、趙雲殿…！！／／／）

星

（あまり声を出すな。賊に気付かれてしまつては元も子もないぞ？）

愛紗

（そ、それは分かっているのだが…ひ、ヒザが…！！）

星

（ふふ…私の膝がどうかしたか？／／／）

趙雲ガンダム

（からかつてる場合じゃないだろう…／／／とりあえず…無闇にぶつけないでほしいんだが…／／／）

関羽ガンダム

（あ、愛紗殿、押さないで下され…！！／／／せ、拙者の…！！／／／）

星

（おっと。そちらの関羽殿の尻に手が当たってるみたいだが？／／／）

関羽ガンダム

（んな！？／／何を、うあっ…！／／／）

愛紗

（す、すみませぬ関羽殿…！／／ですが、こっちも、あ…！／／）

趙雲ガンダム

（お…お取り込み中すみませんが、その…兜の角が尻に当たってますよ／／／）

関羽ガンダム

（う、す、すまぬ…！／／だ、だが…今動くと…手が…！／／／）

星

（どうした？…どこに手が当たるといふのだ？／／／）

趙雲ガンダム

（ま、また星、君という人は…／／／）

愛紗

（ひゃっ！？／／／そ、そこは、ああっ、あっ…／／／）

関羽ガンダム

（うっ！？／／／い、いけませぬ、う、あっ…／／／）

………傍から見ると男女入り乱れでしからんことをやってるように聞こえて仕方ない。

荷車を引いてる囀の商人もかなり恥ずかしいようで、心の中でやめ

てよ…と呟いていた。

箱の中でえらいことが起きているとはつゆ知らず、賊は陰から商人を襲う機会をうかがっていた……

そのころ、白蓮が政務をやっていると、公孫賛イージエイトがやってきた

公孫賛イージエイト

「白蓮」

白蓮

「どうした、公孫賛」

公孫賛イージエイト

「先ほど、囃の商人が賊に襲われた報告があつた」

白蓮

「で守備は・・・？」

公孫賛イージエイト

「商人達には怪我もなく、荷物のほうは賊どもの手に取られたと聞いた」

そのころ、赤銅山の中にある賊の隠れ家。賊達はその中の倉庫へ、先ほど奪っていった荷物を運んでいた。最後に運んできた箱には愛紗と関羽ガンダムと星と趙雲ガンダムが潜んでいる。それを置いた瞬間

愛紗

「ヒヤア！！！！？」

突然、箱から愛紗の声がしたのであった

アニキ

「ん？」

チビ

「どうしやした？」

アニキ

「…今、女の声がしなかったか？」

デブ

「はあ？何言ってるんすかアニキ。女に飢えて幻聴でも聞こえたんじゃないすか？」

アニキ

「そうかもな。よし！また村の娘に酌でもさせるか！」

その声に気付くことなく、賊達はその場を後にした。数分後……

星

「……………いなくなったか」

趙雲ガンダム

「そのようだな……………よつと」

星

「ふう……」

愛紗・関羽ガンダム

「はうう…／＼／」

誰もいなくなったのを確認し、趙雲ガンダムが箱のふたを開ける。同時に星と愛紗と関羽ガンダムも立ち上がるが……心なしか愛紗が若干着崩れてたり、関羽ガンダムの鬼面が微妙に傾いてたり、何より二人ともちよつと顔が赤くなつてるのは気のせいである

趙雲ガンダム

（そりゃ箱の中であんなことやこんなことになつてればこうなるだろうなあ…）

へなへなになつている二人を見ながら趙雲ガンダムがそんなことを考えていると。

星

「ふむ…どうやらここは地下のようだな」

愛紗・関羽・趙雲ガンダム

「地下？」「」

星の言葉に三人も扉の向こう側を見てみると……坑道が広がっていた

星

「おそらく、ここは昔、鉾山だったのであろう」

関羽ガンダム

「なるほど…鉾山として使われていた洞窟を隠れ家に使っていたというわけか。これなら探しても見つからない訳だ」

しばらくの間、四人は坑道を道なりに進んでいった。だがここに来るまでの間、外へ繋がる出口は見当たらない

趙雲ガンダム

「かなり入り組んでいますね…これは出るのに時間がかかりそうです」

確かにここから出ることは容易ではないと、趙雲ガンダムの言葉に関羽も頷く。と、愛紗が懷から短剣を取り出した…箱の大きさ故に、偃月刀や槍を持ち運べない代わりの武器である。

愛紗

「しかし、敵中にあるというのに得物がこれとは…心細いな」

星

「仕方あるまい。お主の乳が大きすぎて、それ以外持ち運ぶことが出来なかったのだから」

愛紗

「んなつ！？べ、別に胸が原因なのは私だけではないだろう！？」

星

「ふむ。ではお主の場合は尻も原因か」

愛紗

「なあっ…！？」

ちょっとした言い争いを始める乙女たちをみて、つい苦笑してしまふ関羽ガンダムと趙雲ガンダム。そもそも侠にとって、人間の女性の胸というものは、種族が違うのもあってかやや理解しがたい点も

多いのだ。少なくとも不用意に掴んだりするものではないことは分かっているが…それでも中々理解に苦しむものである

関羽ガンダム

「ハハハ…」

趙雲ガンダム

「全く…あちらの関羽殿、すっかり星にいじられてますね」

星

「静かに…」

すると、先へ進んでいくと…大きく開けた場所へと辿り着いた。ここでは賊たちが宴を開いており、飲めや歌えやの大騒ぎになっていた。更によく見てみると、賊の頭が村娘に手を出していた

村娘

「いやっ…止めて下さい、お願いします…!」

アニキ

「へへへへ、そんなに脅えるなよ…もつといいことしてやるからな」

村娘

「あっ、いやっ…!」

嫌がるのも構わず、賊の頭は村娘の身体を乱暴に触る。そんな光景を見ては、愛紗も関羽も黙っていられなかった

愛紗

「なんと無体な……!!成敗してくれる……!!」

趙雲ガンダム

「待って下さい二人とも!どうするつもりですか!?!」

関羽ガンダム

「もちろん、助けるに決まってるだろう!」

星

「だが、相手はあの人数だ。そもそも我らの目的は、賊の隠れ家の場所を……」

だが星と趙雲ガンダムが止めるのも聞かず、愛紗と関羽ガンダムは勢いよく飛び出した!そして宴をしている賊達の前に飛び降りると……

愛紗

「下郎っ!!!」

関羽ガンダム

「そこまでだ!!!」

アニキ

「あ?」

(ドゴシヤアアッ)

アニキ

「ぐおおおおっ!!!?」

二人同時に賊の頭に回し蹴りを喰らわせた!!

愛紗

「大丈夫か？」

関羽ガンダム

「ケガはありませぬか？」

村娘

「え、あ、はい……」

チビ

「なんだあてめえらは！？」

驚く村娘の安否を確認する愛紗と関羽ガンダムの前に、賊たちが立ちはだかる。

愛紗

「我らは関羽！！字は雲長！！地下に巢食う姑息な賊どもよ、貴様らの悪行もここまでだ！！」

関羽ガンダム

「貴様ら、まとめて、我らの偃月刀のサビにして……」

しかし……

愛紗・関羽ガンダム

「……つて、あら……！！？」

威風堂々と名乗ったはいが、二人の関羽は肝心なことを忘れていた。そう……元々潜入するのが目的だったため、今回は二人とも偃月

刀を装備していないのだ！！

チビ

「何のサビにしてくれるだつてえ？」

デブ

「ぐふふ…」

星

「あのバカ…」

趙雲ガンダム

「まったく……」

明らかに不利な状況…だが愛紗と関羽ガンダムは臆することなく短剣を抜く

関羽ガンダム

「ふん！貴様らごとき、これで十分だ！！」

愛紗

「命が惜しければかってこい！！」

チビ

「その言葉、お前らに返してやるよ…ひやはははははは！！」

と、賊が粋がつていたその時…星と趙雲ガンダムが松明に石を当てて倒し、辺りを闇に染めた！！急に周りが暗くなって賊たちが混乱していた隙に、星と趙雲ガンダムに案内され愛紗と関羽ガンダムと村娘はその場から逃げだした！！

しばらく走り、追手が来ないかを伺う星。ここまで来ていないのを確認すると、安心したのか村娘はその場にしゃがむ

星

「全く…猪武者なのは妹分と弟分だけかと思っただが、お主たちも相当だな」

趙雲ガンダム

「ホントですよ。一時はどうなるかと…」

関羽ガンダム

「す、すまぬな……」

星と趙雲に的確に突っ込まれ、返す言葉もない愛紗と関羽ガンダムと…村娘が顔を上げていた。

村娘

「あの…危ないところを、ありがとうございます」

愛紗

「なに、当然のことをしたまでだ」

そして村娘は語り始める、何故自分が賊に囚われていたのかを…

村娘

「私はこの山のふもとに住んでいる者です。村の子供たちと一緒に山菜を取りに山へ登ったら、偶然ここを見つけてしまった…」

愛紗

「なるほど…それで捕まっていたのか」

村娘

「…実は地下牢には、村の子供たちが閉じ込められているんです。私が逃げたと知れたら、あいつらに何をされるか…」

顔をうずめて泣きだした村娘を見て、趙雲ガンダムは関羽ガンダムに問う

趙雲ガンダム

「どうするんですか？」

関羽ガンダム

「決まってるだろう。助けに行かねば」

星

「だろうなあ」

あるいみ分かっていた答えに星もため息をつき、趙雲ガンダムも苦笑いを浮かべていた。

一方こちらは公孫賛の屋敷。来るべき出陣に備え、白蓮と公孫賛イージエイトが武装していると。

公孫賛イージエイト

「なに？張飛達か？」

文官

「はい…関羽殿たちの帰りが遅いので、賊の隠れ家まで迎えに行く」と仰りまして」

白蓮

「しかし……その賊の隠れ家分からないからこそ今回の策を講じたのだぞ？」

文官

「私もそうは仰ったのですが：適当に探せば見つかるから赤銅山の場所を教えて欲しいと」

公孫賛イーヅエイト

「……で、教えたのか？」

文官

「はい。すると風のように飛び出してしまいました」

どうやら鈴々と張飛ガンダムは、義姉と義兄がどうしてるかが気かりで仕方なかったようだ

そして赤銅山にて、関羽達を探しに行った鈴々と張飛ガンダムはと
いうと...

鈴々・張飛ガンダム

「迷子になった（のだ）——！！！！！」

「……」

「……………」

見事に道に迷っておりまして

張飛ガンダム

「おいおいどうするんだよ、このままじゃ愛紗とヒゲを迎えに行け

ねえぞ？」

鈴々

「ん……そうなのだ！山で迷った時は切り株を見ればいいってじっちゃんと言ってたのだ！！」

というわけで、早速手ごろなきりかぶを見てみる二人

鈴々

「年輪の間が広がっている方が南だから……こっちなのだ！！」

張飛ガンダム

「おーし！行ってみるか！！」

そして鈴々と張飛ガンダムは南へと進んでいくのだった

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』B（後書き）

Cパートへ続く

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』C（前書き）

C
パートです

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』C

隠れ家の地下牢。

賊1

「まったくなんで俺達だけ・・・」

賊2

「とんだ貧乏クジだぜ」

脅えている子供たちの見張りを任された賊二人がと愚痴をこぼしている

賊1

「ん？なんだあれ？」

賊2

「は？」

一人が見つけた何かにもう一人も視線をやると……白いニーソ（でいいのか？）を垂らした腕がちらり。ニーソが落ちたと思うと……
…美しいおみ足が出現。更にその手は「こつちに来て〜ん」と誘うような動き。当然食いつかない訳もなく、賊二人はまんまとその方向へ足を運んだのだが…

ドガバキグシャツ！！！！！！

星

「鍵だ」

……と、星と趙雲ガンダムの手荒い拳を喰らったのであった。

無事に子供たちを牢屋から出し、出口へと足を急がせる一同（星と趙雲ガンダムは先ほどの賊二人が持っていた槍を装備している）

星

「娘、出口の検討はつかないのか？」

村娘

「すみません……」

村娘にも出口の場所は分からず、とにかく走っていたが…運悪く賊に見つかってしまった

チビ

「いたぞー！こっちだー！」

慌てて進路を変え、走り続ける一同。やがて光が見え……

愛紗

「出口だー！」

と確信した……そこまでは良かった。いざ出てみると、そこは断崖絶壁……しかも反対側への岸まではかなり遠く、ここまでかと思っただけ……その時

鈴々

「愛紗ー！！関羽ー！！やっと見つけたのだー！！」

聞きなれた声に顔を上げると、なんと鈴々と張飛ガンダムがいるではないか！！

愛紗

「鈴々、張飛！？」

張飛ガンダム

「そんなとこで何やってんだー？愛紗ー！ヒゲー！」

ちなみに二人は「南に行ったって意味ないよな…」と落ち込んでいた時に二人を見つけたという…偶然にも程がある展開だった。と…
関羽ガンダムが張飛ガンダムの傍にあつた大木に気付き、閃いた

関羽ガンダム

「鈴々！張飛！その大木を、こちらに向かって切り倒してくれ！！」

張飛ガンダム

「へ？なんでだよ？」

関羽ガンダム

「いいから早くっ！！」

鈴々

「わかったのだー！！」

関羽ガンダムが何をしたいのか理解できなかったが、とにかく張飛ガンダムは大木を斬る！そのまま大木は倒れ……見事に橋が出来た！

愛紗

「さあ！これを登って向こうに渡るんだ！」

村娘

「…さあ皆」

子供たち

「うん！」

愛紗に促され、子供たちは橋を渡っていく。その間にも賊が迫り、出口にまで出てきそうな賊を星と趙雲ガンダムが薙ぎ払って行く。やがて村娘と子供たちが渡り終えたのを確認し、愛紗と関羽ガンダムが橋に乗ろうとした…次の瞬間！！

バキッ！！！！

愛紗・関羽ガンダム

「「！！！！！！！！？」」

星、趙雲ガンダム

「「関羽（殿）！！！！」」

鈴々

「愛紗あつ！！！！」

張飛

「ヒゲえっ！！！！！！」

元々大木は古くなって傷んでいたのだろう。橋となった衝撃も相まって、これ以上耐え切れなくなり谷底へ落下していった。愛紗と関

羽ガンダムはというと………間一髪、星と趙雲ガンダムに掴まれ無事であった。そのまま星と趙雲ガンダムに引っ張られ、愛紗と関羽ガンダムも地上に上がる

星

「危ないところだったな」

愛紗

「だが、橋が…」

星

「…万事休すと言ったところか」

前には断崖絶壁、後ろからは次々と迫りくる賊たち……逃げ場がないとは正にこのことである

趙雲ガンダム

「こうなったら、覚悟を決めるしかありません」

関羽ガンダム

「うむ…やるしかあるまい」

腹をくくり、愛紗と関羽ガンダムは賊が落とした剣を手取る

愛紗

「ナマクラだが、ないよりはマシか…行くか、趙雲」

星

「“星”だ」

愛紗・関羽ガンダム

「「え？」」

突然何を言い出したのかと二人は思ったが、その疑問はすぐに解決した

星

「共に死地へと赴く仲だ。お主達には、私のことを“真名”で呼んでもらいたい」

そう…星は、これから死地に赴く同志となった二人に己の“真名”を預けようと決めたのである。彼女の心意気に、愛紗も決意した

愛紗

「分かった、星。では二人も、私のことを“愛紗”と呼んでくれ」

星

「無論だ」

そして関羽ガンダムもまた、一つの決意を固めていた。

関羽ガンダム

「趙雲、我らも固いやり取りはナシで行こう」

少し前とは打って変わって対等に話す関羽ガンダム…即ち、それは趙雲ガンダムを同志として…共に戦う仲間として認めること。それは趙雲ガンダムにもすぐに理解できた

趙雲ガンダム

「ああ…それが良いな、“関羽”」

関羽ガンダムも軽く頷いた後、一同は改めて賊が迫りくる洞窟へと見やる

星

「では愛紗、関羽、趙雲：行くとするか!!」

愛紗

「ああ!!」

関羽ガンダム

「招致!!」

趙雲ガンダム

「参ろう!!」

四人は勢いよく洞窟の中へと飛び込み、賊を次々と蹴散らしていく!

アニキ

「ええい!相手はたったの四人だ!大勢で回りこめ!」

完全に囲まれたにも関わらず、四人は背中合わせで構える。

趙雲ガンダム

「不思議だな。関羽と愛紗殿：それに星が背にいただけで負ける気がしない!」

関羽ガンダム

「拙者も同じだ：趙雲、星殿、愛紗殿：後ろは任せた!」

愛紗・関羽ガンダム・星・趙雲ガンダム

「「「「はあああああつ!!!!!!!!!!」」」」

二組の乙女と侠は、一気に賊たちに突っ込んでいった……

すっかり辺りは暗くなった中、白蓮と公孫賛イージエイトは出陣に備えて素振りをしていた…すると。

文官

「公孫賛様。関羽殿たちと趙雲殿たちが戻ってまいりました」

公孫賛イージエイト

「守備はどうなっているんだ？」

文官

「はい、見事に賊の隠れ家を見つけられたのですが…」

白蓮

「が？」

そこまで言いかけた後、文官はやや申し訳なさそうに口を開く。

文官

「…そのまま四人だけで、全ての賊を退治なされたそうです」

白蓮

「四人だけで……って！それじゃあ私達の出番は！？」

文官

「残念ながら…」

白蓮

「カッコよく白馬にまたがって、『白馬將軍公孫賛、ただいま参上ー！』とかは！？」

文官

「それありません」

白蓮

「あ、あははは……そうなんだあ……」

公孫賛 イー ジ エ イ ト

「まったく……」

やる気満々だったのに出番を取られ苦笑する白蓮に、公孫賛 イー ジ エ イ ト と相棒の白馬もあきれるしかなかったそうなの

翌日。

公孫賛の屋敷を発った四兄妹に、星と趙雲ガンダムもついていった。そう、二人の趙雲は（悪く言えば）公孫賛達を見限り、四兄妹と共に旅することに決めたのである

愛紗

「しかし良かったのか？我々はまだ仕官するつもりがなかったから良いとして、星と趙雲殿はあのまま公孫賛殿達の下にいれば将として名をあげたかもしれないかったのだぞ？」

星

「人間の公孫賛殿は決して悪い方ではないが、ただそれだけだ。この乱世を鎮める器ではないし……陰も薄い」

関羽ガンダム

「な、何気に結構キツイことを仰いますな……」

事実ではあるがストレートに発言する星の横で、趙雲ガンダムは空を見上げながら答える

趙雲ガンダム

「…この広い空の下に、我々が真に仕えるべき相手がいるかもしれない。そんなお方を探してみたいんです」

星

「うむ。そして何より……お主たちと一緒にいた方が面白そうだ」

趙雲ガンダム

「まあ、つまりはそういうことですね」

そんな二人の趙雲の言葉を聞き、四兄妹も笑顔になるのだった

第2話『関羽、愛紗、趙雲、星と死地に赴くこと』C（後書き）

次回予告

白蓮

「やあー、諸君、白馬將軍の公孫賛だ。いやあー、うちの白馬は立派なもので・・・」

公孫賛イージエイト

「白蓮、人間の友達はいないのか・・・？」

白蓮

「うつ・・・」

趙雲ガンダム

「次回、第3席『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つこと』」

白蓮

「よし、次回こそは活躍するぞ!!」

星

「ふん、かわいそうに・・・」

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つこと』A（前書き）

関係ない話ですけど電源の元を切ってしまったのでアイドルマスタ
Iの最新話を見れませんでした…（泣）

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つこと』A

ここは冀州の町、業の都にある大きな屋敷。

すっかり昼時となった頃、一人の女性と一人の侠が大浴場から出ていった。女中が身体にタオルを巻き終えた後：女性の頭に巻かれたタオルが外れ、見事な金髪縦ロールの長髪が姿を見せる。侠の方は侠の方で、赤い身体に巻かれたタオルの白さが映えていた。この二人こそ冀州を治める名門・袁家の当主たる二人の袁紹こと、麗羽（女性）と袁紹バウ（侠）である。

入浴後の果物・飲み物を用意した女中に囲まれ二人がくつろいでいると、彼らの家臣である四枚看板：二人の文醜こと猪々子（女性）と文醜ガズエル（侠）、そして二人の顔良こと斗詩（女性）と顔良ガズアル（侠）がやってきた。

袁紹（真名・麗羽）

「猪々子、斗詩、文醜に顔良も、四人してどうなさいましたの？」

文醜（真名・猪々子）

「麗羽様、袁紹様。曹操達がお目通りをしたいと出向いておりますが」

袁紹バウ

「ふん！！風呂からあがってようやく目が覚めたというのに、朝からあんないけ好かん小娘と侠の顔を見なければならんとはな」

文醜ガズエル

「って、もうお昼ですよ袁紹様…」

麗羽

「睡眠不足はお肌に大敵なのよ。私達女性はもちろん、侠にとっても」

袁紹バウ

「そういうことじゃ」

文醜ガズエルのツツコミに対しあっさりとその一言で片づける麗羽と袁紹バウに、四枚看板は顔を見合わせて苦笑する

斗詩

「とにかく、我が領内に逃げ込んだ賊を討伐するためにわざわざ都から出向いて参られたのですから、あいさつをしないわけには……」

麗羽

「分かってますわよ！服を着替えたらずぐに向かうから、少し待たせておきなさい！！」

軽く怒りながら立ち上がった麗羽のタオルがハラリと落ちたが、当の本人は気にしていないようだった（それたいして袁紹バウは飲み物を噴き出し、文醜ガズエルと顔良ガズアルが慌てて自分の目を隠したのはここだけの話である）

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つのこと』

数分後、ここは屋敷内の謁見の間。

四枚看板を自分たちの両端に控えさせた麗羽と袁紹バウの前には、ドクロの髪飾りとドリルツインテールの金髪が目立つ少女：華琳と、紅蓮の炎のように赤い鎧とマントを身に纏った侠：曹操ガンダムが立っていた

袁紹バウ

「都からわざわざ賊退治に来るとは…ご苦勞なことだな曹操」

曹操（真名・華琳）

「ええ。本来なら私たちが出向くまでもないのだけれど…賊どもが貴方達の領内に逃げ込んだとなれば話は別。放っておけば、みすみす見逃してしまいそうですものね」

麗羽

「ちよつと…何が言いたいの!？」

曹操ガンダム

「袁紹…お前達が賊一人退治できない無能な領主だと言っているのだ」

麗羽・袁紹バウ

「「なつ……!!」」

その華琳の言葉にカチンと来る麗羽と袁紹バウ。更に曹操ガンダムにもはつきり言われ、怒りが頂点に達しそうになる麗羽と袁紹バウ…と……

・

猪々子

「曹操!!袁紹様達に向かって無礼であろう!いくらホントのことだからって!」

斗詩、顔良ガズアル

「あつ!？」

文醜ガズエル

「そつだそつだ！…いくらホントのことでも面と向かって言っていないことと悪いことが…」

袁紹バウ

「こらお前ら！…今のは一体どういつことじゃ！…」

猪々子

「え、あ、いやその…！…」

文醜ガズエル

「咄嗟のことで…つ、つい本音が…」

麗羽・袁紹バウ

「何（ですってえ／じゃとお）（怒）！！！！？」

猪々子・文醜ガズエル

「い、いや、あの、ああ…」

猪々子と文醜ガズエルが割り込んできたがフォローになつておらず、麗羽と袁紹バウの怒りを買ってしまいヘナヘナと変な動きをしてしまつた。その一連を見て、華琳と曹操ガンダムは呆れたような笑みを浮かべる

華琳

「無能な領主に間抜けな家臣…見事な取り合わせね」

曹操ガンダム

「全くだ。恐れ入った」

猪々子・文醜ガズエル

「「へっへーん参ったか!!」」

顔良ガズアル

「おいコラ、今俺達バカにされてるんだぞ!!」

猪々子

「え??」

文醜

「そうなの??」

斗詩・顔良ガズアル

「「あゝ ああゝゝ…」」

華琳と曹操ガンダムの皮肉に対しやたら自慢する猪々子と文醜ガズアルに顔良ガズアルが突っ込むも、全く分かってなかったため斗詩と顔良ガズアルもヘナヘナと変な動きをするしかなかった。一連を見て笑いをこらえる華琳と呆れる曹操ガンダム……麗羽と袁紹バウにとっては恥ずかしいことこの上なかった

華琳と曹操ガンダムが屋敷から離れた後、六人は謁見の間を去っていった

麗羽

「全く…貴方達のせいで飛んだ大恥かいたじゃありませんの!!」

袁紹バウ

「まったくじゃ!!」

斗詩

「貴方達って、私達は何も…」

こっそり呟く斗詩の横で、今度は猪々子が質問する

猪々子

「でもいいんですか？いくら曹操達が来たからって、賊のこと全部任せちゃって…」

その猪々子の質問に対し、麗羽と袁紹バウは気にしないように応える

袁紹バウ

「構わん。賊退治などという汚れ仕事、あの二人に任せておけば良からう」

麗羽

「ところで…武闘大会の準備はどうなっていますの？」

舞台は二人の袁紹が治める街へと移る。

二人の曹操は自分達の家臣である二人の夏侯惇こと、黒髪の女性・春蘭と眼帯が目立つ侠・夏侯惇ギロスと共に、馬にまたがって街の入り口へと向かっていた

夏侯惇（真名・春蘭）

「華琳様、曹操様。袁紹殿達はいかがでしたか？」

華琳

「相変わらずよ。名門の出であることを鼻にかけて胡坐を打ってばかりで、自分たちの無能さに気付いていない…あんな奴らが領主の座に居座っているなんて、虫唾が走るわ」

曹操ガンダム

「ふむ…ところで夏侯惇。守備はどうなっている？」

夏侯惇ギロス

「ああ、兵達は既に街の入り口に待機させてある。合流でき次第すぐに出陣できるぞ」

曹操ガンダム

「そうか…」

と、曹操ガンダムと夏侯惇ギロスが今後の守備について話し合っている

鈴々

「わーっ！！あの人の頭すっごいクルクルなのだー！！」

張飛ガンダム

「おおー！！あっちの侠はすげえ真っ赤だぜ！！」

関羽ガンダム

「こ、こら！！二人ともやめんか！！」

愛紗

「あーいや失礼した、この者たちはそなた達の髪型と鎧のことを言ってるだけであって、別に頭の中がどうかではなくて…」

華琳と曹操ガンダムの容姿を指差す鈴々と張飛ガンダムの口を、慌てて抑える愛紗と関羽ガンダム。四兄妹と星と趙雲ガンダムを見て…曹操ガンダムは目を閉じる

曹操

「…構わぬ。所詮は子供の世迷言、咎めたりはせん」

張飛ガンダム

「こ、子供って……」

関羽ガンダム

「こら、今は黙ってる!」

子供扱いされてむくれる張飛を叱る関羽ガンダム……と、華琳は愛紗の方を見る

華琳

「髪と言えば…貴方も相当美しいものを持っているようね」

愛紗

「あ、いや…これは、人に褒められる程のものじゃ…」

華琳

「“下”の方も、さぞかし立派なものでしょうね」

愛紗・関羽ガンダム

「「なっ!!? / / /」」

予想外の発言に顔が赤くなる愛紗と関羽ガンダムの横で、鈴々が更に付け加えた

鈴々

「そつなのだ! 愛紗は“下”の方もシットリツヤツヤなのだ!」

関羽ガンダム

「こ、こらっ！！／＼／」

華琳

「ふふ…是非とも拝んでみたいものだわ」

愛紗

「は、いや、あの、ああ…！！／＼／」

加えての華琳の発言に戸惑う愛紗。

華琳

「でも、今は野暮用があるから残念ね…我が名は曹操。縁があつたらまたいづれ」

曹操ガンダム

「余も同じく曹操だ…彼女の言葉、あまり鵜呑みにしない方がいいと思うぞ」

そのまま、華琳と曹操ガンダムと春蘭と夏侯惇ギロスが去っていった

愛紗

「な…なんだっただ…？？」

星

（あれが最近噂の二人の曹操か…侮れぬ奴）

啞然とする愛紗の横で、星は華琳と曹操ガンダムを見て何かただならぬ気配を感じていた

愛紗・鈴々・星

「「「おかえりなさいませご主人様（なのだ!）」」」

関羽ガンダム・張飛ガンダム・趙雲ガンダム

「「「おかえりなさいませお嬢様」」」

さて、舞台はガラツと変わってこちらは町の中にあるメイド・執事喫茶的なお店。

手持ちの路銀が本日の宿代に満たないため、四兄妹と星と趙雲ガンダムはそれぞれメイド服と執事服に着替え、この店でお金を稼ぐことになったのである。とはいえ、こういうのに慣れていない愛紗と関羽ガンダムは若干orzな状態である。

愛紗

「ぬう…どうして私達がこんなことを…!」

星

「今日の宿代にも事欠くありさまなのだから、やむをえまい」

趙雲ガンダム

「探した中ではこの仕事が一番給金が良かったです」

関羽ガンダム

「しかし、主でもない相手にご主人様やお嬢様などと言わねばならぬとは…」

と、ここで新たに客がやってきたので星と趙雲ガンダムが仕事に戻る

星

「おかえりなさいませご主人様」

趙雲ガンダム

「さあ、お嬢様もこちらへ」

やたらノリノリで仕事をこなす（星に至っては演技もかなり入っている）星と趙雲ガンダムを、訝しがるように見ている愛紗と関羽ガンダム

関羽ガンダム

「星殿、趙雲：お主たち少し上手くやりすぎではないのか？」

星

「腹が減っては戦は出来ぬ：先立つものがなければ、旅もままならん」

趙雲ガンダム

「要するに、これも軍略のうちと思えば大したことはないってわけだ」

そう告げた後、星と趙雲ガンダムは再び客を席へと案内する。

愛紗

「む・・・恐るべき趙子龍・・・」

鈴々

「お待たせしましたのだー！」

張飛ガンダム

「こっちもお待たせしましたー！」

一方、鈴々と張飛ガンダムも料理を運んでいたのだが…

客の男性

「あれ？俺、どっちも大盛りを頼んだんだけど…なんか少ない…？」

運ばれてきたチャーハンとホイコーローが妙に少ないと疑問を浮かべ、客が二人の顔を見ると…なんと鈴々と張飛ガンダムの頬に、それぞれご飯粒とソースがついているではないか！

鈴々

「と、当店ではこれが大盛りなのだ！」

張飛ガンダム

「つまみ食いはしてないぜ！！」

客の男性

「つてお前ら…！！」

愛紗

「すみませ〜ん、すぐ代わりをお持ちしますから〜！！」

関羽ガンダム

「失礼致す〜！！」

慌てて愛紗と関羽ガンダムが、しらを切る二人を裏方へと連れ去る。そして説教が始まるのであった。

愛紗

「客に出すものに運ぶ途中で手を出すとは、どういいう見だ！」

張飛ガンダム

「いやあ、だって腹が減ってたからつい……」

関羽ガンダム

「ついじゃない！ちゃんとやらなきゃ駄目だろう！」

張飛ガンダム

「てへへへ……」

鈴々

「ごめんなさいなのだ！次は気をつけるのだ！」

そう言つて現場に戻つたはいいが……二人してお冷をこぼしたり、ラーメンを客にぶちまけたり、皿を割つたりと失敗の連続

愛紗

「もういい！鈴々、張飛、宿に戻って大人しくしてろ！」

関羽ガンダム

「これ以上被害が広まったらこちらも大変なのだぞ！」

とうとう店からも追い出されてしまふのだった。

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つのこと』A（後書き）

Bパートへ続く

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つのこと』B（前書き）

B
パート

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つこと』B

鈴々

「ちょーつと失敗しただけなのに二人ともひどいのだ！」

張飛ガンダム

「よーし…こうなつたらすんげー金を稼いで、愛紗とヒゲをびっくりさせてやろうぜ！」

むくれながら鈴々と張飛ガンダムが歩いていると、ふと街の人々がある看板を見つめているのに気付く。何事かと興味を抱き、近づくものの…

鈴々

「うーん…難しい字がいっぱい読めないのだ…」

張飛ガンダム

「…駄目だ、全く分かんねえ…」

難しい漢字が多く、子供の鈴々とバカの張飛ガンダムには読めなかった。と……

???

「『冀州一武闘会本日開催、飛び入り歓迎！優勝者には賞金と豪華副賞あり！』だつてさ」

いつの間にか二人の隣に立っていた茶髪のポニーテールの少女が、二人の代わりに看板を読む。彼女の隣には、蒼い身体が目立つ若い侠もいた。

張飛

「優勝者には賞金だつて!？」

鈴々

「じゃあこれで優勝すれば、いっぱいお金がもらえるのだな!？」

茶髪の少女

「いや…まあそうなんだけど…」

蒼い身体の侠

「まさかお前ら、本気で優勝するつもりじゃないだろうな？」

鈴々

「もちろん本気なのだ!！」

「賞金」と聞いて俄然やる気が出た鈴々と張飛ガンダム。二人の意気込みを見た茶髪の少女と蒼い身体の侠は、軽く笑う

茶髪の少女

「ふふっ、大した自信だけど…そいつは無理だな」

張飛ガンダム

「はあ!？なんでそんなの分かるんだよ!！」

蒼い身体の侠

「そんなの決まってるだろ？優勝するのは…」

茶髪の少女・蒼い身体の侠

「「このあたし（俺）たちだからな!！」」

自信満々に宣言する茶髪の少女と蒼い身体の侠：二人は彼らがタダものではないと感じていた

そしてここは……冀州一武闘会の舞台となる屋敷前に作られた闘技場

司会進行の女の子

『さあ、始まりました、冀州一武闘会！北は幽州から南は江東まで、全国各地から腕に覚えのある猛者が、最強の座を賭けて競います！ちなみにこの大会では、同じ名前を持つ人間と三璃紗人は二人ひと組の選手で出場し、相手が一人の場合はどちらか片方が、同じ二人ひと組の場合は二人同時に出場する決まりとなっております！それでは、試合開始に先立って本大会の主催者をご紹介します！冀州太守にして超・名門！袁家の当主であられる、二人の袁紹様！』

麗羽と袁紹バウが前に出たと同時に、歓声と拍手が響き渡る。といつても、会場では四枚看板が「声呼歓（歓声あげて）」「掌鼓（拍手して）」と書かれたカンペをあげていたのが実際の理由だが

麗羽

「皆さん、本日は私達、主催の武闘会へようこそ。今日は全国各地より集まった豪傑たちの戦いを、心行くまで楽しんでいって下さいね」

再び（カンペ効果で）歓声が上がる。麗羽のあいさつに続き、袁紹バウが袁家の歴史を語ろうとしたが…

袁紹バウ

「ありがとうありがとう、名族袁家は代々…」

司会進行の女の子

『さあ！皆さん！袁紹様のありがた〜いお言葉を賜ったところで、第一試合の始まりです！！』

あっさりと遮られ、そのまま第一試合が始まるのだった。闘技場に上がってきたのは、巨大な肉体をもつ大柄な侠と鈴々

司会進行の女の子

『優勝候補と称される鉞使いの張燕選手に対するのは、本大会の中でも最小…あーいえ、最年少を誇る張飛選手！！果敢にも飛び入り参加した二人の張飛の片割れである人間側の張飛選手には是非とも頑張ってもらいたいところですが、これは相手が悪いか！？』

対峙する両者…そして開始を告げる銅鑼が鳴った！！

張燕ザクR1

「うおりゃああああああああ！！！！」

それと同時に張燕ザクR1が、勢いよく鉞を振り下ろす！！

司会進行の女の子

『おーっと！鉄竜選手が先手を取った！！早速勝負が決まっ…あー！！！！！！』

「勝負が決まった」と言いそうになった司会進行の女の子が、突然叫ぶ。その理由はもちろん…振り下ろされた鉞を、鈴々が蛇矛で受け止めたのだ！

司会進行の女の子

『受け止めた！！張飛選手、常人では持ち上げることも敵わないあ

の鉞の一撃を、受け止めましたー!!」

張燕ザクR1

「この、ガキい……!!」

そのまま押しつぶそうとするも、鉞は全く動かない……そして!!

鈴々

「この程度で、鈴々は負けないのだあああ!! ううりやあああ
ああああ!!……!!」

勢いよく蛇矛を振り回し、鈴々は張燕ザクR1を場外へと吹っ飛ばした!! あまりの出来事に、観客も司会進行の女の子も啞然としていた……が、その数秒後に歓声上がる

司会進行の女の子

『や、やりました!! 張飛選手、優勝候補の張燕選手を破りましたー!! これは序盤から大盤振る舞いです!!』

張飛ガンダム

「いいぞー鈴々ー!!」

勝利した鈴々に、張飛ガンダムも大喜びするのだった

再び試合を告げる銅鑼になる。立っていたのは、先ほど二人の張飛に自分たちの優勝を宣言した茶髪の少女。彼女の側には蒼い身体の侠も控えていた。

司会進行の女の子

『さぁ続いては第二試合!! 既に開始から一分が経過しています!』

ただいま絶賛武者修行中の馬超選手は、はるか西…西涼からの参加です！一緒に組んでいる三璃紗人の馬超選手とは、息がぴったり合う程の実力との噂です！一方相手は槍の名手、とのことですが…」

相手の少女

「うあああああああつ！！！」

いつまでも耐え切れなくなった相手の少女が、乙女の馬超に襲い掛かる…が、難なくかわしていく！

司会進行の女の子

『おーっと！これはすごい！目にもとまらぬ早業です！馬超選手は防戦一方です！』

どれだけ攻撃されても全く反撃してこない翠。相手の少女が疲れ果て、息切れしていると…

馬超（真名・翠）

「なんだよ、もう終わりか？」

相手の少女

「何い…！？」

翠

「そんじゃ…今度はこっちの番だっ…！」

次の瞬間、翠が容赦ない攻撃を繰り出し…あっという間に相手の少女はノックアウトされてしまったのだった

翠

「安心しな、急所は外した」

馬超ブルーデイスティニー

「見事だったぜ、翠！」

歓声が再び上がる中、馬超ブルーデイスティニーが翠にサムズアップするのだった。その後の試合でも、二人の張飛と二人の馬超は、迫りくる相手をどんなぎ倒していった。やがて………すっかり辺りが夕暮れになりかかった頃………闘技場に立っていたのは鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超だった

司会進行の女の子

『冀州一武闘会も、いよいよ最後の試合です！並みいる強敵を打ち倒して、決勝の場に駒を進めたのはこの二組！まずは驚異の小旋風・二人の張飛！それに対するは西涼の暴れ馬・二人の馬超！今大会最強を決める戦いもついに決着！注目の決勝戦は……この後すぐ……！』

そして、始まりを告げる銅鑼が鳴り響く……！

翠

「まさか、本当に決勝まで来るとはな……！」

馬超ブルーデイスティニー

「こうなったらとことん本気を出してやる……！」

翠、馬超ブルーデイスティニー

「かかってこい……！」

槍を振り回し構える翠と馬超ブルーデイスティニー

張飛ガンダム

「その言葉、そっくりそのまま返してやるぜ！」

鈴々

「お前らを倒して、優勝賞金は鈴々達がもらうのだ！」

同じように蛇矛を構え一呼吸した後……両者は同時に斬りかかった！激しくぶつかり合う両者の得物、そして同時に火花が散る

張飛ガンダム

「なかなかやるじゃねえか！！」

馬超ブルーディステイニー

「そつちもな！！」

司会進行の女の子

『いやーすごい！！これはすごい！！正に決勝戦にふさわしい激闘です！！』

互いに押し合う二組……そんな中、翠と馬超ブルーディステイニーは二人を見ながら考えていた

翠

（なんだこのチビ……ちっこいクセにすごい力がある……！！）

馬超ブルーディステイニー

（この侠の腕前……やっぱりただ者じゃないってことが……！）

翠・馬超ブルーディステイニー

（（でも……一番強いのは……））「あたし（俺）たちだああああ

あああっ！！！！」

距離を置いて、二人が斬りかかるつとした……その時！！！！

ギュルルルル

鈴々・張飛ガンダム

「「あ」」

翠・馬超ブルーデイスティニー

「「へ！！？」」

突然、鈴々と張飛ガンダムの腹が鳴り、思わず手を止めてしまった
翠と馬超ブルーデイスティニー。観客からも笑い声が飛び交った

鈴々・張飛ガンダム

「「えへへへ……」」

馬超ブルーデイスティニー

「えへへじゃないだろ！！真面目にやってくれよ！！」

鈴々

「ごめんなのだ／＼」

張飛ガンダム

「ワリイ、ワリイ／＼／＼」

翠

「全く、勝負の最中に腹が減るなんて、緊張感が足りな……」

ギョウ~~~~~

鈴々・張飛ガンダム

「あーっ!!」

直後に翠と馬超ブルーディスティニーの腹も鳴り、観客も再び笑いだす。顔を真つ赤にしながら二人がうなだれていると…

麗羽

「両者そこまで!!」

袁紹バウ

「この勝負は引き分け、よってこの二組を優勝としよう」

突然の麗羽と袁紹バウの決定に啞然とする一同。四枚看板も同様だったが、慌ててカンペを上げて拍手と歓声を促す。どうやら自分たちの出番を早めに出させるため、勝負を切り上げたのだろう…どちらにせよ相当な目立ちたがり屋である

麗羽

（ようやく私たちの出番ですわ）「それでは皆さん、栄冠の言葉を名族たる私の…な!？」

しかし、その前に闘技場はもぬけの殻となっていたのであった

その日の夜、鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超ブルーディスティニーは麗羽と袁紹バウの下で御馳走をほおばっていた

麗羽

「おほほほ、いい食べっぷりですこと、たくさん召し上がれ。それ

にしても今日の貴方達の戦いぶり、本当に見事でしたわ」

翠

「いやあゝ」

馬超ブルーディスティニー

「それほどでも……」

麗羽の言葉に照れつつも、翠と馬超ブルーディスティニーは食事にがつつく

袁紹バウ

「そこで、お前達に相談なのじゃが……もし良かったら、我が袁家の客将にならないか？」

と、袁紹バウの言葉に手を止める鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超ブルーディスティニー

張飛ガンダム

「客将って……なんなんだ？」

翠

「んー、つまり……お客さんってことじゃないか？」

鈴々

「ふーん……客将になったら、毎日こんな御馳走を食べれるのか？」

麗羽

「おーっほっほっほ、もちろんですわ。朝・昼・晩と、最高の料理人が腕をふるって用意して下さいますわよ」

袁紹バウ

「わはははは、それだけでなく最高のもてなしもしてやるぞ」

鈴々

「だつたらなるのだー！」

張飛ガンダム

「賛成だぜえ！」

馬超ブルーデイスティニー

「少しの間ならいいかな」

その会話を覗き見していたのは…猪々子と文醜ガズエルだつた

ここは斗詩と顔良ガズアルの部屋。鏡の前では斗詩が自分のお腹をつまんでいた

斗詩

「うゝん…ここんところ出陣してないから、ちよつと運動不足かなあ…」

顔良ガズアル

「そうかなあ…あんまり気にすることないと思うけど？」

と、次の瞬間勢いよく扉を開けて猪々子と文醜ガズエルが入ってきた

猪々子・文醜ガズエル

「「斗詩い！！顔良あ！！大変だあ！！」」

斗詩

「!!!? / / 何よ猪々子、文醜も!!! 急に入ってこないでよ!!!」

顔良ガズアル

「どうしたんだ? いったい?」

慌てて上げていた服を下ろす斗詩に構わず、文醜ガズエルが先ほど聞いてきたことを斗詩と顔良ガズアルに告げる。

文醜ガズエル

「麗羽様達、どうやら馬超達と張飛達を召抱えるつもりみたいだぞ
!」

顔良ガズアル

「いいじゃないか。あの四人強いし、きっと戦力の増強に…」

猪々子

「何のんきなこと言ってんだ!!! 今でこそあたいらが麗羽様と袁紹様一の側近だけど、もしあんなバカ強え奴らが来たら…!!!」

顔良ガズアル

「確かにマズイかもな……」

そこまで言われると、斗詩と顔良ガズアルも最悪の展開があるかもしれないと焦り出す。

文醜ガズエル

「ど、どうする!?!」

斗詩

「どうするって言われても…そうだ!!」

と、何かを閃いたのか斗詩が顔良ガズアルと猪々子と文醜ガズエルに耳打ちした…

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つのこと』B（後書き）

C
パートへ続く

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つのこと』C（前書き）

C
パートです

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つこと』C

そして翌日。四枚看板は麗羽と袁紹バウに、ある申し出をしていた。

麗羽

「ええ？張飛たちと馬超たちを召抱えるのはやめろ…ですって？」

斗詩

「いえ、そうは言ってませんけど…」

苦笑いしながら斗詩が答えるが、二人の袁紹は何が不満なのかは分かっているようである。

袁紹バウ

「あの四人の實力は昨日お前達も見ただろう？あれだけの豪傑を配下にすれば、曹操共の鼻を明かしてやれるではないか」

斗詩

「武勇に優れているのは認めます、ですが…」

顔良ガズアル

「あの四人…『強く賢く美しく』を掲げる袁紹軍にふさわしいかどうか…」

麗羽

「ふむ…確かにあまりお上品ではないわね…」

袁紹バウ

「そのようじゃな」

鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超ブルーディステイナーのだらしなさに思うところあるのか麗羽と袁紹バウがぼつりとつぶやく

四枚看板

「……ですよねー!!」「」「」

斗詩

(私たちも罵族出身で人のことは言えないけど…)

顔良ガズアル

「そこで、一つ提案があるんですけど!」

麗羽

「提案?」

顔良ガズアル

「あ、はい!馬超達と張飛達が麗羽様達の配下にふさわしいか、試験するんです!」

袁紹バウ

「なるほど…適性試験というわけか」

顔良ガズアル

「はい!」

麗羽・袁紹バウ

「……いいでしょう(だろう)」「」

目を細めながらも麗羽と袁紹バウが了承したのを見て、四枚看板の

顔が明るくなる

猪々子

（よーし！これであの四人に無理難題を吹っ掛けて、試験に失敗しましたーとか言ってお払い箱にすれば…！）

というのが、四枚看板の企み…だったのだが

袁紹バウ

「では、試験の問題はワシらが出すでしょう」

猪々子・文醜ガズエル・斗詩・顔良ガズアル

「『ええっ！？』『』『』」

袁紹バウ

「それで、あの四人と勝負するのだ」

斗詩

「勝負…ですか？」

袁紹バウの予想外の発言に戸惑い気味の四枚看板に、今度は麗羽が口を開く

麗羽

「…勝って、貴方達があの人より優れていることを見せなさい。それなら今まで通り、貴方達は私達の家臣…ただし、もし負けたりしたら…」

文醜ガズエル

「負けたりしたら…？」

麗羽・袁紹バウ

「「これ（よ／じゃ）これ」」

そう言いながら、トントんと手刀で軽く首を叩く麗羽と袁紹バウ

斗詩

「ええっ!？」

猪々子

「それつてもしかして斬首!!？」

麗羽

「違うわよ。クビよ!お払い箱ってこと!」

文醜ガズエル

「なぁんだよかつ…」

猪々子・文醜ガズエル

「「えゝえーっ!!??クビいーっ!!!？」」

斗詩・顔良ガズアル「「うあゝーんっ!」」

まさかのクビ宣告に涙目になる四枚看板であつた

再び舞台は闘技場へと移る。

司会進行の女の子

『さあて、突発的に始まつた袁紹軍適性試験!張飛・馬超の新参組と、お馴染み文醜・顔良組が強さ・賢さ・美しさを競います!!』

周りから歓声が上がると、玉座に座る袁紹バウが課題を出す

袁紹バウ

「まずは賢さの試験じゃ！！」

闘技場の上にそれぞれ用意されたのは、バナナ果物が吊るされた仕掛けと椅子、そして俗に言うマジックハンド。つまり「この中にある物を使って果物を取れ！」ということだろうが…

顔良ガズアル

「こ、これは…」

文醜ガズエル

「うーん、俺こっぴうの苦手なんだよなあ」

顔良ガズアル

「いや苦手とかどうとかじゃなくて…」

いかにも分かりやすい仕掛けにやや呆れ気味の顔良ガズアルの横で、普通に苦手などと言っちゃう文醜ガズエル。一方で張飛・馬超組はというと…

鈴々

「あれを取るくらい簡単なのだ！こっぴうてー…あれ??」

椅子の上に乗って鈴々が果物を取ろうとするが、届かない

翠

「バカだなあ、こういう時は道具を使うんだよ！ほら……って、ありゃ？？」

今度は翠がマジックハンドを使って取ろうとするが、あと一步というところで届いていない

斗詩

「……あ、あの！これはこうやって……こうすれば届くんじゃないかしら？」

ずっと見ていた斗詩だったが、見るに堪えなくなり行動に移る。椅子に乗った上でマジックハンドを伸ばすと、あっさりと果物を掴んだ

馬超ブルーデイスティニー

「おおっ！！」

張飛ガンダム

「その手があったか！！」

猪々子

「どーだ！知力34を舐めんなあ！あーっはっはっはっは！！」

普通に納得する馬超と張飛に、偉そうに高笑いする猪々子。だが正直な話、斗詩は複雑なことこの上なかった

斗詩

「うう…勝ったけどあんまり嬉しくない…」

というわけで、賢さ対決は文醜・顔良組の勝利に終わった

麗羽

「次は我が軍には不可欠の美しさの勝負ですわ、おほほほ」

両者には様々な衣装が提供されることとなった。控室にはきぐるみから結構露出度が高い服までと色んなものがたくさんあった

張飛ガンダム

「面白い服がいっぱいあるな！」

鈴々

「本当なのだ!!」

翠

「参ったなあ…あたしおしゃれとか苦手なんだよ」

馬超ブルーデイスティニー

「俺もあまりなあ…」

戸惑いながらも衣装を選ぶ翠と馬超ブルーデイスティニー…そして数分後

司会進行の女の子

『さあーて準備が整ったようですよ！それでは、まずは張飛・馬超組からどうぞ！』

鈴々

「がお～がお～なのだ～！」

張飛ガンダム

「うお～～～！ぐお～～～！」

きぐるみを着てノリノリで踊る鈴々と張飛ガンダムに笑っていた観客だったが…次の瞬間はたと笑いが止まる。そこにいたのは……非常にかわいらしい服装の翠と、やたらりりしい格好の馬超だった。二人の格好に、一部の観客から黄色い悲鳴が飛び交う

翠

「そ、そんなにジロジロ見んなよ…ノノノあたし、こういうヒラヒラした格好が似合わないっての、良く分かってるから…」

馬超ブルーデイスティニー

「お、俺だって…普段こういうカッチリした服は着たことないし…
ノノノ」

恥ずかしがる翠と馬超ブルーデイスティニーに、司会進行の女の子もやや戸惑っていた

司会進行の女の子

「えー…二人の馬超選手の衣装が一部の観客の心を掴んだようです…；それでは審査をお願いします！なお、票の確認は「冀州野鳥の会」の皆さんが行います！」

そして審査員が次々と の札を上げ……結果が出た

司会進行の女の子

「さあー集計の結果が出ました！！…87点です！！かなりの高得点をたたき出しました！！果たして文醜・顔良組はこれを超えられるのかー！？」

文醜ガズエル

「ちいい…なかなかやるなあ四人…！」

斗詩

「ねえ…ホントにこの格好で出なくちゃだめなの？」

猪々子

「今さら何言つてんだ！一か八かコイツで勝負だ！」

顔良ガズアル

「でもやっぱり…」

しかしもはや迷ってる暇はないと、四枚看板は一気に飛び出す！！

猪々子・文醜ガズエル

「「乱世に乗じて平和を乱す賊どもよ！！」」

斗詩・顔良ガズアル

「「漢王朝に代わって成敗（よ／＼だ）！！」」

そう叫んで登場した四枚看板…だが、その【某美少女戦士＋猫】と【某カード使い＋ぬいぐるみ】という、大人がやるには痛々しいその格好は…観客だけでなく麗羽と袁紹バウにもどん引きであった

司会進行の女の子

『えー…それでは審査をお願いしまーす…あー思ったより少ないですねえ…』

結果として、87VS13で張飛・馬超組の圧勝となるのであった

斗詩

の戦い…張飛・馬超組の登場が待たれます…ん？ふんふん…えっ
！？」

と、ここで関係者が司会進行の女の子に伝達する。そして……

司会進行の女の子

『えー、ここで残念なお知らせです！先ほど入った情報によりま
す、張飛・馬超組が最終試合を棄権することです！』

猪々子・文醜ガズエル・斗詩・顔良ガズアル

「「「ええっ！？」」」

そう、張飛・馬超組は最終試合を辞退したのだ

翠

「いや〜いくらなんでもあれは勘弁してほしいよな」

馬超ブルーデイスティニー

「そうだな・・・」

張飛ガンダム

「さすがの俺様もあれはちょっときついぜ」

鈴々

「そつなのだ」

麗羽

「この程度で逃げ出すなんて…華麗で優雅で壮麗な我が袁家の家臣
にはふさわしくありませんわね」

袁紹バウ

「よって2VS1で、文醜・顔良組の勝利でしょう!!」

麗羽と袁紹バウの宣言に、会場が拍手を送った

斗詩

「うわ~~~~!!勝った!!私達勝ったのね~~~~(泣)!!」

猪々子

「ああ...あたい達は勝ったんだ(泣)!!」

顔良ガズアル

「何か色々と大事な物を失ったような気がしたけど、俺達勝ったんだなあ~~~~(泣)!!」

文醜ガズエル

「もちろんだーー(泣)!!」

猪々子・文醜ガズエル・斗詩・顔良ガズアル

「~~~~うわああああん!!~~~~」

勝利を確信した四枚看板は、泣きながら抱き合っただとさ。

ここは街の中にある宿屋。義姉と義兄が寝泊まりしている部屋へ戻ってきた二人の張飛を待っていたのは...

鈴々・張飛ガンダム

「ただいま(なのだ)!!!!」

愛紗・関羽ガンダム

「「こおおおらあああああああ（怒）！！！！！！！！」」

当然ながら、義姉と義兄の怒号であった

愛紗

「今まで一体どこに行っていたんだ！！宿で大人しくしてろって言
ってたのに！！」

関羽ガンダム

「ふらふらいなくなつた上に、一晩帰つてこないなんて！！全く、
どれほど心配したか…」

それまで叱っていた愛紗と関羽ガンダムだったが…翠と馬超ブルー
ディステイニーに気付く

愛紗

「ん？お主たちは？」

翠

「ど、どうも…あたし、馬超っていいいます…」

馬超ブルーディステイニー

「お、俺も馬超です…」

鈴々

「馬超たちはね…鈴々たちの新しい友達なのだ！」

さて、この二人の馬超との出会いが何をもたらすのだろうか…次を
楽しみに

第3話『張飛、鈴々・馬超、翠と合討つのこと』C（後書き）

次回予告

猪々子

「おおお．．．．．」

斗詩

「あああ．．．」

顔良ガズアル

「うおおおおお．．．」

文醜ガズエル

「ああああ．．．．」

麗羽

「ちよつと貴方達、こんなところで何やっていますの？」

顔良ガズアル

「何って．．．．相撲ですけど．．．」

袁紹バウ

「何？相撲じゃと．．．ワシらはてつきり．．」

文醜ガズエル

「てつきりなんですか？」

袁紹バウ

「うつ．．．次回第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとする』」

のこと『!』!』

猪々子

「あつー!!?」ごまかした!!」

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』A（前書き）

最新話です。連続投稿しました。

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』A

この世界の西に位置する西涼：そこでは若い女性と若い侠と一人の小さな少女と小さな蒼い少年が棒を構え、武術の訓練をしていた。少女の名は馬超、字は孟起、真名は翠。蒼い少年の名もまた“馬超ブルーデイスティニー”といった。そして若い女性の名は馬騰、真名は董：翠の母親である。若い侠も馬騰ブルーデイスティニー・・・馬超ブルーデイスティニーの父親である・・・ふと：翠の構えが若干震え始めたのに気付き、董が問いかける。

馬騰（真名・董）

「：翠、アンタ、何か隠し事をしているわね」

翠

「な、何言っただよ！あたし、今朝はオネショなんかしてな・・・あつ！！！！」

馬超ブルーデイスティニー

「あっちゃー・・・」

馬騰ブルーデイスティニー

「ははははは：そうかそうか、隠し事はオネショか」

董

「だったら・・・特訓は下着、変えてからにしな」

ごまかすつもりが墓穴を掘ってしまい、顔が赤くなる翠。一緒に隠していたのか、思わず馬超も「あちゃー」といった顔をしてしまう

翠

「け、けど、なんで分かったんだよ！？あたしが隠し事してるって…」

董

「武術というのは正直なものよ。心にやましいところがあれば、それが気の濁りとなって表れる」

翠

「…それじゃあ…」

馬騰ブルーデイスティニー

「ああ。翠、お前の構えには、心気の曇りが感じられた」

指摘され、翠の顔が暗くなる。話を聞いていた馬超も、どこか落ち込んでいた

董

「どうした二人とも？オネシヨぐらいで気に病むことはないでしょう？」

翠

「そんなんじゃないよ…母ちゃんはあたしの構えを見てあたしの気持ちに分かったのに、あたしは母ちゃんの気持ちが分かんなかったのが悔しくて…」

馬超ブルーデイスティニー

「うん…親父も、訓練の時に同じこと言ってたよな。その時も、オレもその気持ちが分かんなくて悔しかったなあって…」

馬騰ブルーデイスティニー

「馬超……」

落ち込む翠と馬超ブルーデイスティニーに、董と馬騰ブルーデイスティニーは励ますように声をかける

馬騰ブルーデイスティニー

「なんだそんなことか…大丈夫。お前達もちゃんと鍛錬すれば、すぐに“気”が読めるようになる」

董

「だからがんばりなさい!!」

翠・馬超ブルーデイスティニー

「ホントに!?!」

馬騰ブルーデイスティニー、董

「もちろん!!」

その時の馬騰ブルーデイスティニーと董の顔は、とてもいい笑顔だった

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』

翠

「親父……母ちゃん…あたし達、いっぱい練習して……頑張るから…だから…」

馬超ブルーデイスティニー

「うーん…親父……母ちゃん……」

翠と馬超ブルーディスティニーが目を覚ますと…そこは宿の中だった。向かい側の布団では、四兄弟がぐっすり眠っていた

翠

「あれ……夢、か……」

星

「やっと起きたか、二人とも」

と…いつの間にか布団の間の床で寝ていた星と趙雲ガンダムが起きあがる

馬超ブルーディスティニー

「って、なんでそんなところで寝てるんだ？」

趙雲ガンダム

「好きで寝てるわけじゃないさ。君達が寝返りを打った時に私達を突き飛ばしたんだ」

馬超ブルーディスティニー

「げっ、マジで！？／／／」

翠

「ご、ゴメン！！／／／あたしたち寝相悪いから…／／／」

無意識とは言え突き飛ばしたことを詫びる翠と馬超ブルーディスティニーに、星は…

星

「気にすることはない。お返しに私もお主達を……いや。見たところ生娘と賊に言う青二才のようだから、何をしたのかは言わないでおこう」

と、翠と馬超ブルーディスティニーをじっくり見ながら、やたら意味深な言葉を返すのだった。

翠

「……って、あたしたちになんかしたのかオイ!？」

馬超ブルーディスティニー

「こ、答える!!俺達に何をしたんだ!!?」

趙雲ガンダム

(一応知らない方が身のため…なのか?)

翠と馬超ブルーディスティニーが慌てながら星を問いただしているのを見ながら、何をしたのか知っている趙雲ガンダムは反応に困るのであった

全員が起床した後、一同は朝食を取り始める

翠

「いやー、相部屋させてもらった上にメシまでおごってもらって悪いなー!」

鈴々

「気にすることないのだ!【旅は道連れ、世は】……【世は情けない】っていうしー!」

関羽ガンダム

「それを言うなら【世は情け】だろう」

箸を進めながら関羽ガンダムが鈴々の間違いを注意する横で、愛紗はやや複雑な表情を浮かべる

愛紗

「まあ……二人部屋に無理言つて八人泊めてもらつてゐるわけだから、情けないと言へば情けないか……」

張飛ガンダム

「武闘大会の賞金、ちゃんと貰ってくれば良かったかなあ？」

馬超ブルーディスティニー

「そうだよなー。でも今さら取りに行くのもなんか悪いよなあ」

と……ここで星が口を開く。

星

「お主たち、こんな話を知っているか？」

愛紗・関羽ガンダム・鈴々・張飛ガンダム・翠・馬超ブルーデイス
ティニー

「？」

星

「昔：越こっせんという国の王・勾踐は、敵国に囚われた時の恨みを忘れぬよう、寢室の天井に苦い肝を吊るし、それを舐めては復讐の気持ちを新たにしたという」

翠

「…へえ、そうなんだ。で、今の話と何か関係あるのか？」

その翠の質問に対し、答えは……

趙雲ガンダム

「いや。特に関係ないと思う……」

という趙雲ガンダムの一言であっさり片付いたのだった

麗羽と袁紹バウが治める街の付近に、華琳と曹操ガンダムの陣が敷かれていた。中央の天幕では、曹操軍の軍師である荀？こと桂花と姜維ガンダムF91、そして筆頭軍師の司馬懿サザビーが地図を眺めていた。と…武器が置かれる音が聞こえて三人が顔を上げると、自分達の主が帰ってきた

荀？（真名・桂花）

「華琳様！」

姜維ガンダムF91

「曹操様も……」

司馬懿サザビー

「お二人ともご苦労様です。戦況はどうでしたか？」

曹操ガンダム

「フン、我が軍の勢いは順調だ…華琳と余が出るまでもなかった」

と、椅子に戻る華琳と曹操ガンダムが汗を掻いていることに姜維ガンダムF91が気付く

姜維ガンダムF91

「随分汗を掻いてますね…今すぐお拭きします」

桂花

「あ、ちよつと…！華琳様の分は私が！」

手ぬぐいを取りに行く姜維ガンダムF91に続く桂花の手を…華琳が止める

華琳

「ええ…ただし、私の汗は手ぬぐいではなく桂花…貴方の舌でね」

桂花

「えっ…／／／」

突然の華琳の発言に、顔を赤らめる桂花。姜維ガンダムF91も思わず顔が赤くなるが、曹操ガンダムと司馬懿サザビーはあまり動かない

桂花

「華琳様…で、でも…／／／」

華琳

「どうしたの？もしかして…イヤ？／／／」

桂花

「……………っ／／／（フルフル）」

華琳

「それじゃあ…」

一言呟くと、華琳は左腕の脇を上げる。顔を赤らめながらも、桂花はじつくりと華琳に近づき…華琳の脇汗を舐め取る。身体を舐められている側の華琳も、若干顔が赤くなっている

姜維ガンダムF91

「え、ええつと…／／／」

曹操ガンダム

「どうした姜維。拭く物を取ってくるのではなかったのか？」

姜維ガンダムF91

「あ、は、はい！？すみません…！！／／／あ、えと…；／／／」

司馬懿サザビー

「…私なら問題ない。早く行ってきた方が良いだろう」

姜維ガンダムF91

「し、失礼しました！！？／／／」

しばらく顔が真っ赤になりながらその光景を見ていた姜維ガンダムF91だったが、曹操ガンダムと司馬懿サザビーに促され慌てて手ぬぐいを取りに戻る。華琳が周りを気にせず“こういうこと”をやるのは、曹操軍の間ではある意味お約束になっているのだが…どういうわけか現時点で慣れているのは曹操ガンダムと、彼に長いこと仕えている司馬懿サザビーのみ。華琳の女性好きは今に始まった訳ではないので“そういう行為”は否定しないが、苟？からすれば恥ずかしいことこの上ないのだ

しばらくして、姜維ガンダムF91が天幕から出てきた。そこへ春蘭と夏侯惇ギロスがやってきた

春蘭

「どうしたのだ？ 姜維？」

姜維ガンダムF91

「”取り込み中”だから出直した方がいい」

夏侯惇ギロス

「何だ？」

華琳

「あつ…うん…そう…いいわ…ふふ、そうよ…また、上手くなったわね…」

春蘭

「華琳様。あ……」

夏侯惇ギロス

「おい曹操……なっ！！？／／……俺は外で待っているからな……」

天幕に入ってきた春蘭と夏侯惇ギロスが、中を見て驚く。夏侯惇ギロスは慌てて、外へ出る。何故なら靴を脱いだ華琳の足を桂花が一生懸命に舐めており、その横では何事もないように曹操ガンダムが手ぬぐいで汗をぬぐっていたのだから。更に曹操ガンダムの脇では、同じく動じない司馬懿サザビーが控えていた。ふと、春蘭が来たのに気付いたのか桂花が一旦舐めるのを止める

華琳

「いいわよ桂花。続けて」

桂花

「はい：／／／」

曹操ガンダム

「…春蘭。何か報告があったんじゃないのか？」

華琳に命じられ、舐めるのを再開する桂花。一方で春蘭に問いかける曹操ガンダムに対し、報告する。

春蘭

「は、はい。敵主力はほぼ全滅：首謀者も捕らえ、現在は夏侯淵達の部隊が残兵の掃討に当たっています…」

華琳

「そう：御苦労さま。下がっていいわよ」

春蘭

「はっ！！」

華琳に告げられ、春蘭はそのまま天幕を後にした。

数分後、街の中を捕虜達が投獄された檻を乗せた馬車が行脚する。馬車を率いるのは華琳と曹操ガンダムと春蘭と夏侯惇ギロス、そして春蘭と夏侯惇ギロスの妹・弟である二人の夏侯淵こと秋蘭と夏侯淵ダラス。と、未だ顔をしかめている春蘭に華琳が声をかける

華琳

「どうしたの春蘭、まだすねてるの？」

春蘭

「別にすねてはおりません…」

華琳

「そんなにむくれないで。今夜は桂花ではなく、貴方を寢屋に呼んであげるから」

春蘭

「な、何を言つて…私はそんな…」

秋蘭

「ふふふ……」

春蘭

「なんだ、秋蘭！！？何がおかしい！！？」

先ほどの行為が気に入らないと見たのか、華琳は春蘭を“今夜の相手”にと誘う。戸惑う春蘭の横で微かに笑う秋蘭…その光景を横眼に見ながら、曹操ガンダムも夏侯惇ギロスに声をかける

曹操ガンダム

「夏侯惇、お前もさつきから何を怒っている？」

夏侯惇ギロス

「別に怒ってねえけどよ…」

曹操ガンダム

「フツ…“アレ”をまともに見れないようでは、お前もまだまだだ

な」

夏侯惇ギロス

「おっ…お前が無駄に慣れてるのがおかしいんだろうが！！なあ淵
！！」

夏侯淵ダラス

「ははははは………」

にやけながら先ほどの華琳と桂花の行為を“アレ”と称して、軽く
夏侯惇ギロスをからかう曹操ガンダム。咄嗟に食いかかる夏侯惇ギ
ロスを見ながら、夏侯淵ダラスも苦笑を浮かべる。と……

鈴々

「荷物運びのお仕事、思ったよりお金がもらえて良かったのだ！！」

翠

「ま、なんといってもあたしの働きの良かったからな」

馬超ブルーデイスティニー

「うんうん、俺も結構働いたし」

張飛ガンダム

「ってそれだけじゃねえだろ！！俺様だって頑張ったぞ！！」

鈴々

「そうなのだ！！」

路銀稼ぎの仕事から帰ってきた鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超ブル
ーデイスティニーも、人だかりに気付いて中に入る。そして行列の

先頭を歩く華琳と曹操ガンダムに気付いた

鈴々

「あ！曹操たちなのだ！」

翠

「え…！？」

馬超ブルーディスティニー

「曹操…！？」

張飛ガンダム

「おいーっす…！」

声をかけながら近づいてきた鈴々と張飛ガンダムに、華琳と曹操ガンダムも行進を止める

華琳

「お前達はこの前の…今日はあの黒髪の者と鬼面の者は一緒ではないのか？」

張飛ガンダム

「ああ、愛紗とヒゲは別の仕事してるぜ！」

曹操ガンダム

「ほお…ヒゲはともかく、女の方は愛紗というのか」

鈴々

「愛紗は“真名”で、名前は二人とも関羽なのだ！」

四人で愛紗と関羽ガンダムのお話をしていた…次の瞬間

翠・馬超ブルーディスティニー

「曹操………覚悟おっ！！！！！！！！！！」

突然、翠と馬超ブルーディスティニーが衛兵から槍を奪い、華琳と曹操ガンダムに飛びかかってきたのだ！！寸前のところで春蘭と夏侯惇ギロスが攻撃を防ぎ、秋蘭と夏侯淵ダラスが咄嗟に二人を庇う

春蘭・夏侯惇ギロス

「何奴！！？」

春蘭と夏侯惇ギロスの問いに応じ、翠と馬超ブルーディスティニーが名乗る

翠

「西涼の馬騰が一族…馬超推参！！」

馬超ブルーディスティニー

「父と母の仇…とらせてもらうぞ！！」

一同が戸惑う中、翠と馬超ブルーディスティニーは再び斬りかかる
うとするが…鈴々と張飛ガンダムが咄嗟に飛びつく

鈴々

「よすのだ！喧嘩は止めるのだあー！！」

張飛ガンダム

「どうしたんだよお前らあっ！！」

翠・馬超ブルーデイスティニー

「放せっ！！邪魔するなっ！！」

秋蘭

「何をしている！ひっ捕えろ！」

鈴々と張飛ガンダムが抑え込んでいる間に、翠と馬超ブルーデイスティニーはまんまと衛兵たちに囲まれてしまうのだった…

愛紗・関羽ガンダム・星・趙雲ガンダム

「「「おかえりなさいま…え？」」」

舞台は愛紗と関羽ガンダムと星と趙雲ガンダムが務めているメイド・執事喫茶的なお店。いつものように来客を出迎えた四人の前に現れたのは……目を回している鈴々と張飛ガンダムを抱えた秋蘭と夏侯淵ダラス（ちなみに秋蘭が鈴々を、夏侯淵ダラスが張飛を抱えている）だった

夏侯淵ダラス

「俺たちは夏侯淵だ。ここに関羽という御仁がいると聞いたのだが」

愛紗・関羽ガンダム

「「え…？？」」

鈴々

「こいつらヒドイのだ！馬超たちが斬りかかったら、怒って馬超たちを捕まえちゃったのだ！」

張飛ガンダム

「そうだそうだ！お前から何もなんか言っただけだ！」

状況が飲み込めない愛紗と関羽ガンダムに、鈴々と張飛ガンダムが説明する。

星

「…お主たちの説明だと、相手が悪いように聞こえないが？」

倉庫に場所を移した一同は、改めて秋蘭と夏侯淵ダラスから事情を聞いた

愛紗

「なるほど、そうでしたか…分かりました。馬超達は私たちの妹分と弟分の友…見過ごすわけにはいきません。とりあえず、会って話をしてみましょう」

関羽ガンダム

「鈴々、張飛。拙者と愛紗殿はこれから曹操殿達の元へ出向いて、馬超たちに会ってくる。二人は星殿や趙雲と一緒に宿へ戻っていてくれ」

鈴々

「どうしてなのだ！鈴々たちも行つて、馬超たちを取り戻すのだ！」

張飛ガンダム

「その通りだぜ！黙って待ってるなんて出来るか！」

関羽ガンダムが言い聞かせるが、やはり一緒に行くと言い張る鈴々と張飛ガンダム。と、ここで星と趙雲ガンダムが口をはさむ

星

「短気なお主たちが行けば、まとまる話もまとまらなくなるだろう
…」

趙雲ガンダム

「ここは、愛紗殿と関羽に任せましょう」

鈴々・張飛ガンダム

「でも…！」

愛紗

「二人とも、私達を信じろ…心配するな、馬超達は必ず連れ戻す」

反論しようとした鈴々と張飛ガンダムだったが、愛紗に促され渋々
頷いた

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』A（後書き）

Bパートへ続く

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』B（前書き）

Bパートです。

お色気有りなのでご注意を

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』B

その頃…愛紗と関羽ガンダムより先に、華琳と曹操ガンダムの元を訪れた者たちがいた。

丸肩の鎧に深紅のマントが生える侠・張？ブリトヴァと、やや小柄な若い侠・賈？アシュタロン。どちらもこの場より遠い宛から、華琳と曹操ガンダムに兵糧を送るために来訪してきたのである。

華琳

「ここまでわざわざ出向いてくるなんて…貴方も結構な変わり者ね、張？」

張？ブリトヴァ

「お二方の都での評判は、我が宛にも届いております。故に、今後のお二方の覇業にせめてもの御助力をさせていただきたく、本日は兵糧を届けに参りました」

華琳

「そう…御苦労さま」

張？ブリトヴァの言葉にそっけなく返す華琳。そして今度は賈？アシュタロン賈？が口を開く

賈？アシュタロン

「ところで…さっき僕らがここに来た時に、女の子と侠が投獄されてましたけど。アレはなんなんですかね？」

曹操ガンダム

「大したことはない。余と華琳を「父の仇」と称して襲ってきた、

ただの二人組だ」

張？ブリトヴァ

「なるほど…やはり強い者は狙われやすいというわけですか」

曹操ガンダム

「……………」

一瞬だけ張？ブリトヴァと賈？アシュタロンがニヤリとほくそ笑んだかに見えたが…気のせいかと曹操ガンダムは黙っていた

張？ブリトヴァ

「では、我らはそろそろ宛に戻ります。今後のお二人の覇業に幸あらんことを…」

賈？アシュタロン

「頑張つて下さいね〜ノシ」

華琳

「ええ、機会があればまた会いましょう」

そのまま天幕を後にする張？ブリトヴァと賈？アシュタロン……………
…彼らの横を、愛紗と関羽ガンダムがすれ違った瞬間。

賈？アシュタロン

（……………ま、アンタたちがやらなければならない話だけど）

関羽ガンダム

「！！？」

微かに聞こえた言葉に立ち止まり、去っていく張？ブリトヴァと賈？アシュタロンの方に振り向く関羽

愛紗

「……？関羽殿、如何なされた？」

関羽ガンダム

「あ、いえ……なんでもありません。さあ行きましょう」

愛紗に声をかけられ、再び天幕へと足を運ぶ関羽ガンダム。一方、自分たちが運んできた積荷を通りかかった張？ブリトヴァもまた……

張？ブリトヴァ

（……………後は上手くやれ）

と、こっそり呟いたことに気付いた者はいなかった

ここは、翠と馬超ブルーディスティニーが投獄された檻がある天幕。檻の中で座り込んでいると……秋蘭と夏侯淵ダラスに付き添われ、愛紗と関羽ガンダムがやってきた

愛紗

「馬超」

翠

「！関羽……」

関羽ガンダム

「話は聞きましたぞ」

翠

「へへ…あたしたちとしたことが、頭に血が昇って…とんだドジ踏んじまった」

馬超ブルーディスティニー

「まさかこんな所で会うなんて思わなかったし…張飛たちも邪魔しやがってさ」

自分たちの失態を嘲笑う翠と馬超ブルーディスティニー…ここで愛紗は改めて聞いてみた

愛紗

「…お主たち、何故…曹操殿たちを殺そうとした？」

その質問に…翠と馬超ブルーディスティニーは険しい表情で答える

翠

「曹操たちは、我が母を…あたしの母ちゃんを殺したんだ!!」

馬超ブルーディスティニー

「俺の親父もだ!!!!…それも、卑劣極まりないやり方で!!」

愛紗・関羽ガンダム

「……!!」

やがて愛紗と関羽ガンダムは、華琳と曹操ガンダムの元へ向かう。

秋蘭

「華琳様、曹操様。関羽殿達が参られました」

曹操

「通せ」

その一言で、愛紗と関羽ガンダムは前に出た

愛紗

「曹操殿…」

華琳

「意外だったわ。まさかこんな形で、貴女たちと再会するなんて」

愛紗

「単刀直入にお聞きするが…馬超たちをどうなさるおつもりです？」

真剣な愛紗の質問に対し、華琳と曹操ガンダムは冷たく言い放つ

華琳・曹操ガンダム

「もちろん斬る（わ）」「」

愛紗・関羽ガンダム

「「そんな…！」」

絶句する愛紗と関羽ガンダムを見ながら、華琳と曹操ガンダムは淡々と言葉を紡ぐ

曹操ガンダム

「理由はどうあれ、この曹操の命を狙ったのだ。それなりの報いは受けなければならぬ」

愛紗

「い、いや…だが…」

華琳

「官軍の將の命を狙ったのよ？無罪放免というわけにもいかないでしょう？」

関羽ガンダム

「それは…そうですが…」

的確なことを言われ、返す言葉がない愛紗と関羽ガンダムだったが…決して諦めなかった

愛紗

「曹操殿！馬超たちの命…なんとか救っていただく訳には参らぬか…！？」

関羽ガンダム

「拙者からも…どうかお願い致します…！！」

愛紗と関羽ガンダムの、特に愛紗の視線を見て…華琳が口を開く

華琳

「…そちら（人間）の関羽。そんなに馬超たちを助けたいのなら、私と取引しない？」

愛紗

「取引…？」

華琳

「ええ…今夜一晩、私と寢屋を共にするの。そしたら、馬超たちの命…助けてあげてもいいわ」

関羽ガンダム

「なっ…！！？／／／」

愛紗

「何をバカな…！！／／／」

その言葉に、愛紗と関羽ガンダムも思わず顔を赤らめてしまう。無理もないだろう、寝屋を共にする…即ち「女同士で一緒に寝る」と言っているのだから。しかし華琳は二人の反応を気にすることなく、愛紗を見つめながら話を続ける

華琳

「始めてみた時から、貴女のその艶やかな黒髪…手に入れたかったの。そして私は…欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れる」

関羽ガンダム

「ひ、人の命がかかっているのに、そのようなたわごとを…！」

曹操ガンダム

「そうだ。貴様らの気持ち一つで、人の命が救われる」

愛紗・関羽ガンダム

「…っ！」

たわごとと称して華琳の言葉を否定しようとした関羽ガンダムだったが、続く曹操ガンダムの一言で返す言葉がなくなる

曹操ガンダム

「この取引は悪くないと思うぞ。貴様ら二人が承諾さえすれば、馬

超たちは助かるのだ。一晚寢屋を共にするだけで救われる命など、滅多にない…余は、華琳に全てを任せる。後は貴様ら次第だ」

堂々と言いのけた曹操ガンダムに、完全に圧倒される愛紗と関羽ガンダム
やがて……

愛紗

「……ほ、本当に一晚寢屋を共にすれば、馬超たちを助けてくれるのだな…!？」

華琳

「ええ…約束するわ」

愛紗と関羽ガンダムは戸惑いながらも、華琳の取引を受け入れるのだった

愛紗はずっと、天井を見つめていた。布団に横になっていれば、それは当然なのだが……全裸になっている今の愛紗には、そうでもしなければ落ち着かなかった。今から何をされるのだろう……その不安ばかりが、愛紗の中で駆り立てていく。と……華琳の影が見え、愛紗は今一度華琳に聞いてみる

愛紗

「そ、曹操殿……本当に、これで馬超達を……? / / /」

華琳

「約束は守ると言ったでしょう」

そう言いながら寝巻を脱ぎ……同じく全裸になった華琳も布団の中

に入る。思わず身体を背ける愛紗…だが華琳は構うことなく、愛紗に近づく

愛紗

「っ…………！／／／」

華琳

「もしかして初めて…？」

愛紗

「…………（コクコク）／／／」

華琳

「ふふ…ますます気に入ったわ…」

やがて愛紗の背にピッタリとくっついた華琳は、愛紗の身体を徐々に触り…遂にその手が“下”へと伸びる

愛紗

「っ…………ああ…………！／／／」

華琳

「ふうん…本当にシットリツヤツヤなのね…」

愛紗が華琳に身体を触られている頃、天幕の外では…

関羽ガンダム

「ああああああ……………愛紗殿…ほ、本当に大丈夫なのだろうか……………」

曹操ガンダム

「念のために言っておくが、寢屋から【色っぽい声】が聞こえても入るのは止めておけ。一度その声を聞いて「何事か」と入った部隊兵が、半殺しにされたことがある」

関羽ガンダム

「えー!?!」

曹操ガンダム

「まあ、余と貴様には関係のない話だがな。女の関羽が心配なのはわかるが…華琳に任せておけ」

関羽ガンダム

「そ、そんなあ………!?!あ、愛紗殿お………!?!」

曹操ガンダム

（…しかし思ったよりいじりやすいな、この侠…）

愛紗の安否が気になって気になってしょうがない関羽ガンダムの不安を、曹操ガンダムが（わざと）煽りまくっていた。

そして舞台は寢屋の中に戻る。華琳は愛紗の上に覆いかぶさるように身体を動かしていた

愛紗

「あ……… / / /」

華琳

「…怖がらなくてもいいのよ…」

そう言いながら愛紗の目を見つめる華琳。愛紗も震えながら、華琳の目を見た……次の瞬間

ドンッ！！

華琳

「きゃあっ！？」

ドッ！！！！

突然中から華琳の悲鳴と、何かが落ちてきた音が聞こえ、関羽ガンダムが真っ先に飛び込む！

関羽ガンダム

「どうなされた！？……ってのわっ！！！！／／し、失礼！！！！／／／」

しかし二人が裸だったのを思い出し、慌てて鬼面を下ろす（ある意味正しい使い方かもしれない）。続いて曹操ガンダムが中に入ってきたものは……

愛紗

「ぐううう……！」

黒装束の女

「ちいっ……！」

どこから入ってきたのか、黒装束の女が短刀を構えていた手首を、愛紗が必死になって抑え込んでいた。その状態を見て、天井に潜んでいた賊が飛び降り、愛紗が咄嗟に華琳を突き飛ばして守ったのだ

と曹操ガンダムは推測した

曹操ガンダム

「曲者だ！！であえ、であえーっ！！」

黒装束の女

「！！（ヒュッ）」

春蘭

「華琳様！！」

夏侯惇ギロス

「曹操！！どわっ！？」

咄嗟に部下を呼ぶ曹操ガンダム、それに感づいたのか賊は煙玉を投げる。春蘭と夏侯惇ギロスが駆け寄ったと同時に煙幕が広がり、賊はそのまま脱走した。

夏侯惇ギロス

「くっ…お前ら大丈夫か！？」

曹操ガンダム

「案ずるな、余も華琳も無事だ」

華琳

「それよりも、今すぐ賊を追え！！」

春蘭・夏侯惇ギロス

「はっ！！」

華琳に命じられ、外へ向かう春蘭と夏侯惇ギロス。その一部始終を……愛紗と関羽ガンダムはしっかりと見つめていた

数分後：関羽ガンダムと曹操ガンダム、そして寝巻を纏った愛紗と華琳が天幕で待っていると……春蘭と夏侯惇ギロスが戻ってきた

春蘭

「華琳様」

夏侯惇ギロス

「曹操」

曹操ガンダム

「賊はどうした？」

春蘭

「申し訳ありません、捕らえた時には既に……ただ、念のため身元を確認してみたところ……装束に張？軍の印が刻まれていました」

夏侯惇ギロス

「調べたら案の定、さつき張？たちが持ってきた積荷の一つがもぬけの殻になっていた。奴らは最初から狙ってたんだろうぜ」

華琳

「そう……」

曹操ガンダム

「ふむ……」

報告を聞いて複雑な顔をする華琳と曹操ガンダム……ふと、愛紗が質

問する

愛紗

「曹操殿：先ほどの刺客は一体：？」

華琳

「出る杭は打たれる…都では私達のことを煙たく思っている輩もいるということよ」

曹操ガンダム

「しかし、まさか張？も連中の手先だったとはな…油断した」

華琳

「…邪魔が入って興がそがれたわ。今夜は早く寝た方がよさそうね」

そう言いながら華琳と曹操ガンダムは立ち上がり、天幕を後にしようとする

愛紗

「あの…曹操ど」

華琳

「関羽。賊の手から私を守ってくれたこと、感謝するわ…褒美として、馬超たちの命は助けて取らす」

関羽ガンダム

「！曹操殿：！」

華琳

「ただし…私は貴女のことを諦めた訳ではないわ。その美しい黒髪、

必ず手に入れてみせる……だから、その時を楽しみにしてて頂戴」

曹操ガンダム

「そういうことだ……春蘭、夏侯惇。関羽たちに馬超たちを引き渡せ」

春蘭

「かしこまりました」

後のことを春蘭と夏侯惇ギロスにまかせ、華琳と曹操ガンダムは寢屋へ向かった。

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』B（後書き）

Cパートへ続く

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』C（前書き）

C
パートです

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』C

春蘭と夏侯惇ギロスに率いられ、愛紗と関羽ガンダムは翠とブルーデイスティニーが囚われている天幕へと向かっていた。と、ここで関羽ガンダムが口を開く

関羽ガンダム

「夏侯惇殿…一つ、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

夏侯惇ギロス

「俺たちに答えられることなら、なんでもいいぞ」

関羽ガンダム

「その…曹操殿たちが馬超達の母と父を手に架けたというのは、本当なのですか…？」

おそらく聞かれるだろうと分かっていたのか、春蘭と夏侯惇ギロスは一旦足を止める

春蘭

「関羽殿……今から私たちは独り言を言う」

愛紗・関羽ガンダム

「え…？」

春蘭

「あれは、数年ほど前…都で、何進大將軍の屋敷に招かれた時のことだった…」

そして、春蘭と夏侯惇ギロスは「独り言」という形で当時のことを語り始めた…

・・・・・・・・・・・・・・・・

何進は、現皇帝である霊帝ガンダムが治める後漢王朝の大將軍を務める、銀髪のグラマーな美女。ただし短気で過激な上に優柔不断で、華琳と曹操ガンダムからはあまり快く思われてはいない。そんな何進がある日、華琳と曹操ガンダムを招いて宴会を開いていたのだが…

何進

「曹操」

華琳

「なんででしょう?」

何進

「妾はお主たちを智謀の師と思っていたが、聞けば剣の腕も中々とか」

華琳

「恐れ入ります」

何進

「どうじゃ?この中の誰かと立ち会って、その腕前を見せてはくれまいか?」

曹操ガンダム

「大將軍の仰せとあらば…」

立ち上がる華琳と曹操ガンダム…しかし周りの人々は二人の強さを知っているが故、誰も名乗りを上げようとしなかった。と、何進の目に酒を飲んで大分酔っている董と馬騰ブルーディスティニーが止まる

何進

「馬騰殿、いかがかな？」

馬騰ブルーディスティニー

「ほ？…お望みとあらば…」

董

「相手にしてもいいですよ……」

そう言いながら立ち上がろうとする董と馬騰ブルーディスティニーだったが、華琳と曹操ガンダムが待ったをかける

華琳

「お待ちください。…馬騰殿達は見たところ、かなり酔っておられる様子…」

曹操ガンダム

「座興とはいえ、剣を交えるのはとても…」

馬騰ブルーディスティニー

「なあに、こんなのは寄った内には入らぬ、つとと…あああつ」

董

「そうよ……なめないで……つととあああつ」

二人の曹操の待ったも気にせず立ち上がった馬騰だったが、そのま
まよろけて尻もちをついてしまった

何進

「ん、見たところ曹操たちの言うように馬騰殿達は酔っていると
見られる…無理をせんでも良いのだぞ？」

回りがクスクスと笑う上に何進からもそのように言われ、恥をかい
たと思った董と馬騰ブルーデスティニーはその後も浴びるように
酒を飲んだ。そして宴会が終わり、董と馬騰ブルーデスティニー
はお伴も着けず帰ろうとしたのだが…酔いすぎたのも相まって、
そのまま落馬してしまったのだ。たまたまその辺りを警備していた
春蘭と夏侯惇ギロスの部隊が見つけたものの、頭を強く打ったため、
既に虫の息だったという…そして董と馬騰ブルーデスティニー
は、春蘭と夏侯惇ギロスに告げたのだった。

馬騰ブルーデスティニー

「…酔って馬から落ちて死んだなど、愚問の恥……」

董

「このことは、どうか内密に……」

.....

夏侯惇ギロス

「その場にいた連中には固く口止めたんだが…どこかで見ていた
奴がいたのか、しばらくすると妙な噂が広まったんだ」

愛紗

「妙な噂…？」

夏侯惇ギロス

「ああ。俺たちの主が恥をかかされた腹いせに、馬騰殿達を襲わせ
た…てな」

愛紗

「！どうして、そんな…」

驚く愛紗と関羽ガンダムに、春蘭も浮かない顔で答える

春蘭

「我らが主は…少々誤解されやすいところがあつて、こうした出来
事があると、すぐに口沙汰ない者があらぬ噂を立てるのだ。おそら
く、馬超たちもそれを鵜呑みにしているのだろう」

関羽ガンダム

「それならば、何故真実を話さないのだ…！」

思わず関羽が反論するが、春蘭は慎重に答えた。

春蘭

「私たちもそう申し上げたのだが、我らが主は…「西涼にその人あ
りと謳われた馬騰ほどの武人が、最後に口にした頼み、聞かぬ訳に
はいかない」と…それに、親の武勇を誇りに思っている子達に、親
の無様な死に際を知らせたくはなかったのかもしれぬ…最も、
これはあくまで私たちの推測だがな」

関羽ガンダム

「しかし、それでは曹操殿たちが…」

夏侯惇ギロス

「そういう女と挟なんだよ、俺たちの主は」

一言呟いて黙りこむ春蘭と夏侯惇ギロスを見て…愛紗と関羽ガンダムは決意し、愛紗が頼み込んだ

愛紗

「夏侯惇殿…今の独り言、馬超達の前でもう一度して頂く訳には参りませぬか？」

ゴスツ！！と、鈍い音が響く。

檻から出してもらった翠と馬超ブルーディスティニーが、先ほどの春蘭と夏侯惇ギロスの独り言を聞いて「信じられない」と言わんばかりに、檻に拳をぶつけたのだ。

翠

「そんな…！！母上が…あたしの母ちゃんが…！！」

馬超ブルーディスティニー

「俺の親父が…酔って馬から落ちて、死んだなんて…！！」

落ち込む翠と馬超ブルーディスティニーに、愛紗と関羽ガンダムが声をかける

関羽ガンダム

「馬超。曹操殿達は馬騰殿達と…お主達のことを思って、黙っておられたのだ。武人としての体面を重んじる、馬騰殿達の気持ち…そ

れを尊重して、自ら悪評を受け入れた曹操殿たちの振る舞い……いずれも、立派なモノだと思う」

愛紗

「だが、そのためにお主達が曹操殿達に恨みを抱き、その命を狙うのであつてはお主たちのためにも良くないと……」

翠

「嘘だ！！曹操どもの手下の言うことなんか信じられるもんか！！」

しかし翠は受け入れようとせず、逆に春蘭と夏侯惇ギロスが嘘をついていると叫ぶ。

春蘭

「ほお……では私たちが偽りを言っているか？」

愛紗

「夏侯惇殿、馬超たちは今取り乱して……馬超、お主たちの気持ちも分かるが、今は落ち着いて……」

馬超ブルーディスティニー

「触るなっ！！大方お前らも曹操に丸めこまれたんだろ！？上手くいったら、召抱えてもらつ約束でもしたか！！」

愛紗がフォローしようとするも、更にありもしない言動を繰り返す馬超ブルーディスティニー……と。

夏侯惇ギロス

「馬超ども、立って武器を取れ！！」

愛紗

「夏侯惇殿!？」

それまで黙っていた夏侯惇ギロスが、突然翠と馬超ブルーデイスティニーに勝負を挑んできたのだ。愛紗と関羽ガンダムが驚くのも構わずに、夏侯惇ギロスは話を続ける。

夏侯惇ギロス

「俺たちだって武人だ！嘘つき呼ばわりされて、黙って引き下がれるか!!」

馬超ブルーデイスティニー

「望むところだ!!」

翠

「仇討ちの景気づけに、貴様らの首を飛ばしてやる!!」

そのまま翠と馬超ブルーデイスティニーと春蘭と夏侯惇ギロスは、己の武器を手に拠点近くの草原へと移動した

関羽ガンダム

「止めぬか四人とも!!こんな無益な争いをして、何になるのだ!？」

春蘭

「止めるな関羽殿!!死なねば治らぬ病気もある!!」

翠・馬超ブルーデイスティニー

「ほざけっ!!」

武器を構え、対峙する四人……二人の関羽には、見守ることしか出来なかった。四人のにらみ合いはしばらくの間続いていたのだが……

翠

（なんだ、こいつら…全然隙がない…）

馬超ブルーディスティニー

（深い林の木立のように静かな構え…それに…）

翠・馬超ブルーディスティニー

「（澄んだ水のような“気”が伝わってくる…）っ！」「

董

「武術というのは正直なものよ。心にやましいところがあれば、それが気の濁りとなって表れる」

翠と馬超ブルーディスティニーの脳裏によぎったのは、幼き日に教わった董の教え。

そして董の教えの通り、春蘭と夏侯惇ギロスからは決して気の濁りが見られなかった

そのことは、春蘭と夏侯惇ギロスが嘘をついていないという確かな証拠だった

翠

「っ……！！それじゃあ……こいつらの言ってることは、本当で…！！母ちゃんは……」

馬超ブルーディスティニー

「親父はっ……！！」

真実を悟った翠と馬超ブルーディスティニーが構えを解き、その場に座り込む。春蘭と夏侯惇ギロスもそれに気付き構えを解くと、愛紗と関羽ガンダムが翠と馬超ブルーディスティニーの元へ近寄る

愛紗

「夏侯惇殿たちの心気に濁りがないのを感じて、貴女がたが嘘をついていないと分かったのでしょうか」

関羽ガンダム

「うむ……そうだな、馬超？」

翠・馬超ブルーディスティニー

「……っ、わあああああああああああ……！！！！！！」
ああああああああああ……！！！！！！」

翠と馬超ブルーディスティニーは泣いた。愛紗と関羽ガンダムに抱きついて、思い切り泣いた。悲しいけれど、それは真実を受け入れたから出来たことだった。翠と馬超ブルーディスティニーの涙を照らすように、夜空に星が光っていた

あれから数日後。

袁紹たちの街を離れた一同は分かれ道に差し掛かり、ここで二人の馬超と別れを告げるようになった。

愛紗

「それでは、ここでお別れだな」

張飛ガンダム

「せつかく仲良くなったのに…残念だぜ」

趙雲ガンダム

「やはり一度、西涼に戻られるのですか？」

翠

「ああ。故郷の連中に本当のことを話しておかなきゃならねえからな」

愛紗

「そうだな…それが良い」

真実を話しておかなければ、再び今回のような騒動が起きてしまうかもしれない。それを防ぐためにも西涼に戻るという翠と馬超ブルーデイスティニーの決断は、正しいものだろう

馬超ブルーデイスティニー

「あの、関羽…アンタたちには本当に世話になったな」

関羽ガンダム

「何、それほどでは…」

馬超ブルーデイスティニー

「それと…」

と、ここで翠と馬超ブルーデイスティニーが照れくさそうに愛紗と関羽ガンダムを引き寄せ、耳元でこっそり呟く。

翠

（あたしたちが泣いちゃったこと、秘密にしといてくれよ）

馬超ブルーデイスティニー
（特に、張飛たちにはな）

その言葉に愛紗と関羽ガンダムが笑顔で返した後、翠と馬超ブルーデイスティニーは一同に背を向け、西涼への道を進んでいった。

翠・馬超ブルーデイスティニー
「あばよー！またなー！！」

鈴々
「バイバイなのだー！」

張飛ガンダム
「元気でなー！」

翠と馬超ブルーデイスティニーを笑顔で見送る鈴々と張飛ガンダムに、ふと星が問いかける。

星
「友との別れだと言うのに、随分ニコニコしているな？」

張飛ガンダム
「へへへ、人は別れ際の顔を覚えてるもんなんだよ」

鈴々
「そうなのだ！鈴々たちは馬超たちに、鈴々たちの一番いい顔を覚えていてもらいたいのだ！」

星

「ほう……」

きつと、またどこかで会える……そう信じて、一同は翠と馬超ブル
ーデイスティニーを見送ったのであった。

第4話『馬超、翠・曹操、華琳を討たんとすること』C（後書き）

次回予告

翠

「関羽、すまない・・・あたし達のせいで迷惑かけて・・・」

愛紗

「もうすんだことだ。気にするな!!」

馬超ブルーデイスティニー

「けど・・・俺達を助けるために曹操に前も後ろもささげったって・

・・・」

関羽ガンダム

「はあっ!!?!?なんのことだ!!?!?」

翠

「いや・・・趙雲がそう言って・・・」

星

「次回、第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとすること』」

鈴々

「前も後ろもささげったってどういう意味なのだ?」

愛紗

「子供は知らなくていい!!?!」

BBS OP・ED 無印編（前書き）

今回はOPとEDのイメージ映像をつくってみました。こんな感じになっています。

BBS OP・ED 無印編

OP Flower of Bravery

銅鏡が輝きだし、関羽ガンダム、愛紗・張飛ガンダム、鈴々、趙雲ガンダム、星・馬超ブルーディスティニー、翠・黄忠ガンダム、紫苑・孔明リ・ガズイ、朱里が現れる

龍、虎、鳳凰が現れ、タイトルが出現する

兄と恋人の墓の前に立つ関羽ガンダム、愛紗。村だったものを見つめる張飛ガンダムと鈴々。

それぞれ新たな決意を固めて、乱世を無くすための旅に出る

旅に出る準備を整えた関羽ガンダム、張飛ガンダム、愛紗、鈴々。月夜をバックに武器を構える趙雲ガンダム、星。川辺で武器を構える馬超ブルーディスティニー、翠。城をバックに武器を構える黄忠ガンダム、紫苑。朱里が羽毛扇を舞う。

それぞれの武勇を繰り広げる関羽ガンダム、愛紗・張飛ガンダム、鈴々、趙雲ガンダム、星・馬超ブルーディスティニー、翠・黄忠ガンダム、紫苑。最後に孔明リ・ガズイが爆鳳扇を投げると火の鳥へと変わり、それぞれの武器を重ね合わせる

曹操ガンダム、夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス、司馬懿サザビー、華

琳、春蘭、秋蘭、桂花、季衣、張遼ゲルゲグ、霞、袁紹バウ、顔良
ガズアル、文醜ガズエル、麗羽、猪々子、斗詩

孫策サイサリス、孫権ガンダム、孫尚香ガーベラ、周瑜ヒヤクシキ、
雪蓮、蓮華、小蓮、冥琳、貂蟬キュベレイ、月、詠、呂布トールギ
ス、恋、謎の影

多くの敵に囲まれる関羽ガンダム、張飛ガンダム、愛紗、鈴々。そ
れぞれの得物で立ち向かおうとする

そこへ趙雲ガンダム、星・馬超ブルーデイスティニー、翠・黄忠ガ
ンダム、紫苑・孔明リ・ガズイ、朱里が駆けつける。そして12人
は走り出し、火の鳥となって羽ばたいていく

ED やっぱり世界はあたし れじえんど!!

様々な料理を眼の前にして釘づけになる愛紗、鈴々、星、朱里、関
羽ガンダム、張飛ガンダム、趙雲ガンダム、孔明リ・ガズイ

食事を始める八人。愛紗、関羽ガンダムは炒飯、鈴々、張飛ガンダ
ムは骨付き肉、星、趙雲ガンダムはメンマ、朱里、孔明リ・ガズイ
はシューマイをそれぞれいただいている。鈴々は途中でのどを詰ま
らせる

そこへ翠、紫苑、璃々、馬超ブルーデイスティニー、黄忠ガンダム
がやってくる。朱里が璃々にシューマイを食べさせる。翠が鈴々の
肉をとろうとしたので喧嘩が始まる。ボロボロになった翠を支える

馬超ブルーデイスティニーであつたが支え切れず共に倒れてしまう

その後に華琳、春蘭、秋蘭、桂花、曹操ガンダム、夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス、司馬懿サザビーがやってくる 華琳が愛紗を闇に連れ出す、驚きを隠せない関羽ガンダム 中で 进行する愛紗と華琳・中で何が起きているか気になる関羽ガンダム・華琳の悪いくせにため息をつく秋蘭と曹操ガンダムと司馬懿サザビー・睨みつける春蘭・涙を流しながらハンカチをかみしめる桂花・顔を赤くする夏侯惇ギロス、夏侯淵ダラス

キスマークだらけの愛紗が戻ってくる そこへ雪蓮、蓮華、小蓮、冥琳、孫策サイサリス、孫権ガンダム、孫尚香ガーベラ、周瑜ヒヤクシキがやってくる 小蓮が鈴々の肉を横取りする とともに肉を食べる小蓮と孫尚香ガーベラ、周りは驚きあきれる

肉がなくなったことを謎に思う鈴々 そこへ麗羽、猪々子、斗詩、袁紹バウ、顔良ガズアル、文醜ガズエル 麗羽達が前に出たので殴り飛ばす愛紗と鈴々 前に倒れる麗羽一行

その後に月、詠、貂蝉キュベレイがやってくる さらに白蓮、藍、季衣、霞、公孫贄イージエイト、華雄ザンネック、高順ヴァイエイト、張遼ゲルググが現れる しかし、一行から冷たい視線を浴びせられる 失礼しましたと退場する

その後に恋と呂布トールギスがやってくる 愛紗が恋に肉まんを与える その愛らしい食べ方に一同はほわわんとなる（あの呂布トール

ルギスも・・・
)

BBS OP・ED 無印編（後書き）

どうでしたか？ピクシブを参考して作りました。

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするの』A（前書き）

最新話です。ブログのほうも連載中なのでそちらも御覧になってください

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするの』A

鈴々

「やゝまゝがあゝるかゝら山なゝのだゝ かゝわがあつてゝも気にしゝないゝ」

とある山中にて、鈴々が妙な歌を歌いながら先頭を歩いていた

関羽ガンダム

「こら、妙な歌を大声で歌うな…恥ずかしいではないか」

鈴々

「何言つてるのだ！山の中を歩く時は熊避けのために歌を歌つた方がいいのだ！じつちゃんがそう言つてたのだ！」

張飛ガンダム

「静かにしてるのもつまんねえし、これはこれで面白いからいいじやねえか」

注意にも構わずニコニコする鈴々と張飛ガンダムに、関羽はあきれ顔になる

星

「そつだ。こんな山奥で愛紗と鉢合わせしたら、熊が驚くだろう」

愛紗

「そつそつ、こんなところで私にバッタリ会つたら熊がかわいそつ…ってなんでだー！」

さりげなく星に釣られて発言した愛紗が、即座にノリツツコミを返す。と…急に星がニヤリと笑みを浮かべた

愛紗

「な、なんだ？私の顔に何かついてるか…？」

星

「いや、公孫賛殿よりもやはりお主の方が面白い。と思ってな（2828）」

趙雲ガンダム

「…あまり気にしない方がいいと思いますよ…」

愛紗

「は、はあ……」

星の返事に趙雲ガンダムが（一応）付け加えるも、微妙な表情になる愛紗。するとその時…

????

「きゃあああああああああああ！……！」

どこからか悲鳴が聞こえたのであった。

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするのこと』

山の中にある人気のない場所…そこでは白い着物の少女が三人組の賊に追い詰められていた。

白い着物の少女

「ひどい……！私を騙したのですね……！」

アニキ

「別に騙しちやいねえさ」

白い着物の少女

「けど……！村への近道を教えてくれると言ったのに、こんな所へ連れてきて……！」

追い詰められながらも、少女は臆することなく賊たちにまっすぐな視線を向けていた。

しかし賊の頭目はニタニタと怪しい笑みを向けながら口を開く

アニキ

「近道ならちゃんと教えてやるぜ？もともと村へのじゃなくて、天国へのだけだな」

白い着物の少女

「天国！？それじゃあ……私を殺すつもりなのですね……！？」

チビ

「そうじゃねえよ。気持ち良くして天にも昇る心地にさせてやるのですよ」

少女の問いかけに賊たちが笑いながら答えた……その直後

愛紗

「お前の連れて行ってくれる天国とやらは、たいそう良いところのようだな？」

アニキ

「そりゃあもちろん最高に……って、なんだおめえら!？」

突然聞こえた声に賊たちが振り向くと、そこには四兄妹と星と趙雲ガンダムがいた!

星

「聞いて驚け!この二人こそ、女性の方は噂と違って『絶世の美女』ではないので気付かぬかもしれんが!！」

愛紗

「おい!！」

関羽ガンダム

「……」

星

「“黒髪”と“鬼髭”の山賊狩りだっ!！」

前に出て、愛紗と関羽ガンダムの紹介を済ませ（愛紗は内容にツッコミを入れていたが）、自身も武器を構える星

鈴々

「弱い者いじめする奴は許さないのだ!！」

張飛ガンダム

「よってたかって大勢で一人を狙いやがって!！」

趙雲ガンダム

「私も、貴様らのように無粋なセリフを吐く輩は嫌いだな!！」

同じように武器を構える趙雲ガンダムと鈴々と張飛ガンダムに続き、
愛紗と関羽ガンダムも勇ましく前へ出る！

関羽ガンダム

「残念ながら天国への道案内はしてやれぬが……!!」

愛紗

「我らの偃月刀で、地獄へ送ってやろう!!」

アニキ

「やれるもんならやってみやがれえ!!」

恐れることなく賊たちは襲い掛かる……が。

バキーツ!!

チビ

「地獄へえ……!!」

ドカーツ!!

アニキ

「行つてえ……!!」

ゴシャーツ!!

デブ

「きまあ……す!!」

あっさりと吹っ飛ばされるのであった

鈴々

「ザマミロなのだ!!」

張飛ガンダム

「おとといきやがれってんだ!!」

賊たちを吹っ飛ばした一行の元へ、少女が駆け寄る

白い着物の少女

「助かりました…ありがとうございます。あんな怖そうな人たちを、あつという間にやつつけちゃうなんて…皆さん、本当にお強いんですね」

愛紗

「い、いや、何…それほどでも…／／／」

関羽ガンダム

「と、当然のことをしたまでです…／／／」

純粋な眼差しを向ける少女に対し、やや照れくさそうに返事をする
愛紗と関羽ガンダム。

白い着物の少女

「あ…申し遅れました。私は…」

ふと、少女は自己紹介をしようとした…のだが、若干考えるようなそぶりをした後…

白い着物の少女

「と…と…トントンと申します…!」

鈴々

「鈴々と似てていい名前なのだ！」

トントン

「そ…そうですね…」

しかし少し無理のある名前を名乗ったが鈴々の受けは良かったようだ。改めて、関羽ガンダムたちも自己紹介を始める

愛紗

「私は関羽」

関羽ガンダム

「拙者も関羽と申します」

鈴々

「鈴々は張飛なのだ！」

張飛ガンダム

「俺様も張飛だぜ！」

トントン

「…貴方様たちは…」

星

「趙雲です」

趙雲ガンダム

「右に同じく」

自己紹介を終えたところで、関羽ガンダムが口を開く

関羽ガンダム

「どうです、トントン殿？村の方へ行かれるのなら、我々と一緒に行きましょう」

トントン

「よろしいのですか？」

鈴々

「気にすることないのだ！『旅は道連れ、世は』…世は……」

『世は情け』が答えなのだが、その先が出てこない鈴々…と、ここで星が一言。

星

「『酔わせて何をするつもりい？（ちょっと色っぽく）』だ」

鈴々

「そうそう、それなのだ！」

愛紗

「ちっがーう！（鼻に軽くデコピン）ていうか、それじゃ意味が分からないだろう！」

星の冗談を普通に聞き入れる鈴々にツツコミを入れる愛紗。その光景を見て、トントンは微笑んでいた。

ここは、とある太守の屋敷。様々な資料を抱え、太守の部屋に訪れる二人の人物の姿があった。

一人は人間で、緑髪のおさげと眼鏡をかけた少女…名は“賈馱”、

字は“文和”、真名は“詠”。

一人は三璃紗の人で、薄い桃色の身体に黒髪と羽衣が映える女性……名は“貂蟬キュベレイ”。

彼女たちはこの屋敷に仕える軍師と武将であり、自分たちの仕える太守の元へ報告と確認を兼ねて資料を運んできたのだが……

賈馱（真名・詠）

「……あれ？月！月！？どこにいるの！？」

貂蟬キュベレイ

「どうした？……これは……？」

肝心の太守は、忽然と姿を消していた。

詠

「あの子だったら……また性懲りもなく抜け出したのね……！……たく、この忙しい時に……！」

貂蟬キュベレイ

「相変わらずというか……本当に危険を顧みないな、月は……」

この会話から察するに、二人が“月”と呼ぶ太守は度々屋敷を抜け出すらしい。

ブンブンと怒ってる詠と「またか」と言わんばかりに頭を抱える貂蟬キュベレイが歩いていると……廊下の突き当たりで、一人の女性と二人の侠とはち合わせる。

灰色の髪的女性と、赤いキツネ目の侠……この二人は同名の武将で、それぞれ名を“華雄（真名・藍）”と“華雄ザンネツ”といった。もう一人、青い（現代で言う）テレビ顔の侠は名を“高順ヴァイエイト”といった。彼ら三人も、詠や貂蟬キュベレイと同じくこの屋

敷の太守に仕える武将である。

詠

「あ、藍將軍に華雄將軍に高順將軍…」

藍

「なんだ、賈馱に貂蟬ではないか。二人して浮かない顔でどうした？」

貂蟬キュベレイ

「月が…いや、董卓様がまたいなくなってしまうわれて…」

藍の問いかけに対する貂蟬キュベレイの返答を聞き、高順ヴァイエイトが口を開く

高順ヴァイエイト

「というところ…例のアレですか？お忍びで下々の暮らしぶりを見て回るといふ…」

貂蟬キュベレイ

「ああ…」

華雄ザンネツク

「やれやれ。仕事もせずにフラフラ出歩くとは…困った太守様だな」

と、華雄ザンネツクの呟きに詠が怒りながら反論する。

詠

「領民と触れ合って直にその声を聞くのは、決して悪いことではない！」

華雄ザンネック

「なら別に良いではないか？」

詠

「そうはいかないわ！こここのところ地方の賊の征伐に人手を取られて、逆にこの辺りの治安は悪くなっているというのに！それに、物の値段が上がって民の間では不満が募っているし…山の方では人食い熊が出るとか何とか！！」

高順ヴァイエイト

「わわわわ…！！お、落ち着いて…！！」

問題が多すぎて、詠は頭をワシヤワシヤと掻きまくる。この状況で太守がいないのだから、焦るのも無理がないと言えるのだが。

藍

「賈馱。そんなに心配ばかりしては早死にするぞ？」

華雄ザンネック

「そうだぞ」

詠

「藍將軍、華雄將軍…貴方達は悩みがない分長生きしそうですね？」

高順ヴァイエイトがなだめる中呟いた藍の一言に対し、ちょっとした嫌味を返す詠。

しかし当の本人たちは…

華雄・華雄ザンネック

「ま、身体は鍛えてるからな!!」

と、ちゃっかり笑顔で返すのだった。これには詠だけじゃなく、貂蟬キュベレイと高順ヴァイエイトも微妙な顔をしたのは言うまでもない

貂蟬キュベレイ

「詠はそういう意味で言ったんじゃないと思うぞ…」

高順ヴァイエイト

「は、ははは…」

村へと向かう一行は、トントンからある噂話を聞いていた。それは……今から向かう村に化け物が出ると言つものである。

愛紗

「ええ？化け物？」

トントン

「はい…ある日、村の庄屋様の門に白羽の矢が打ち込まれ…それについていた矢文に『今宵、村の外れにある御堂に食べ物を備えよ。さもなくば災いが降りかかるであろう』と書かれていたとか…最初はたちの悪いいたずらだと放っておいたらいいのですが、朝になると門前に山から運ばれてきたと思われるとても大きな岩が置かれて…」

星

「ほう……」

トントン

「『これは人間業とは思えない。化け物の仕業だ』と考え、その日の夜に御堂に食べ物を備えたところ、それ以降は大体七日に一回の割合で催促の矢文が打ち込まれるようになったのです。」

趙雲ガンダム

「なんと奇っ怪な…」

トントン

「ですけど、これはあくまで街で聞いた噂…本当かどうか確かめたくて…」

ふと、ここで星がとある疑問を抱く。

星

「しかしトントン殿、何故そのようなことを？…ただの娘が思いつきでやることはとても思えぬが」

トントン

「え！？あ、いや…それは、その…」

確かに、村娘が興味本位でやることは思えない。指摘されてしまい、トントンの慌てていると……鈴々が突然声を上げて何かを指差す。

鈴々

「なんなのだあれは！？」

指が差された先には既に目的の村があったのだが、注目すべきは……庄屋の屋敷の門前にデンと置かれた巨大な岩。近くで見てもかなり大きく、それなりに大きい門をあっさりと越えてしまっている。

トントン

「きつと、これが化け物の運んできた岩ですね…」

愛紗・鈴々

「「（ゾワッ）！！」」

こんな大きい岩を運ぶなど…どう考えても人間業とはないと、一行は改めて実感した。

一行は庄屋の元を訪ね、改めて話を聞くことにした。

トントン

「庄屋様…それでは化け物が出ると言うのは、やはり本当だったのですね？」

庄屋

「はい…困り果ててお役人様にも訴えてみたのですが…『化け物が出たなどといい加減なことを言って御上の手を煩わせるな』と、お叱りを受ける始末…」

トントン

「そんなひどいことを…！！」

思わず立ち上がるトントんにポカンとする一同。我に返ったトントンが座ったのを見て、庄屋は改めて話を続ける

庄屋

「それで、村の力自慢の若者や旅の剣客などに化け物退治をお願いしたのですが…いずれも手に負えず、ホウホウと帰ってきて…」

関羽ガンダム

「そんなに恐ろしい化け物だったのですか？」

庄屋

「…しかと姿を見た者はいないのですが、ある者は身の丈三尺の身体で赤く眼を光らせていたとか、ある者は鋭い角と牙を持っていたとか、全身毛むくじやうで唸り声を上げていたと言う者もいて…一体この村はこの先どうなってしまうのか…」

化け物の容姿について色々な例をあげる庄屋の話を聞いて、愛紗と鈴々は若干怯えている。

星

「こういつ時こそ我々の出番だな」

愛紗・鈴々

「「えええつ！！！！！！？」」

関羽ガンダム・張飛ガンダム

「「うお！！！！？」」

星

「ん？どうした？お主たちから言い出すと思っていたが？」

趙雲ガンダム

「私もてつきりそのつもりかと思ってましたが？」

突然の星の申し出に驚く愛紗と鈴々、そんな二人に思わずビビる関羽ガンダムと張飛ガンダム。星と趙雲ガンダムはというと、逆に驚

く二人を見てキョトンとしていた。更にトントンは星の申し出を受け入れている

トントン

「お願いできますか？」

庄屋

「ですが、相手は正体不明の化け物…

」

トントン

「この方たちは、恐ろしい山賊をあつという間に倒してしまうほどお強くて…ですから、化け物相手でも自信がおりなのでしょう」

庄屋

「おお…ならば是非…」

最初は庄屋も戸惑ったが、トントンの言葉を聞いてもしかしたらと思ひ頼みこもうとする。

しかし愛紗と鈴々は何故か困ったような反応を取る

愛紗

「い、いや、そんな勝手に決められても…！」

鈴々

「そ、そうなのだ！鈴々にも色々都合があるのだ！」

張飛ガンダム

「オメーの都合ってなんだよ？」

関羽ガンダム

「突っ込んでやるな…本音くらいわかるだろうが…」

一方で普通に突っ込む張飛ガンダムに関羽ガンダムが（触れてやるな）と肩に手を置いていた。すると……

トントン

「駄目なのですか……？（ウルウル）」

愛紗

「う……だ、駄目……ではないが………」

トントン

「お願いします…村の方々が困っているんです…（ウルウル）」

愛紗

「っ………」

トントン

「お願いします……（ウルウル）」

ウルウルとした視線を送るトントン

愛紗

「…そ、そういうことなら………」

トントン

「良かったあ…引き受けて下さるのですね!…」

愛紗

「あ、いや、別にそういうわけでは………」

トントン

「ありがとうございます！」

喜びながら手を取るトントんに、愛紗も鈴々もますます断りきれなくなつたと気まずい表情を浮かべていた

星

「……ふふん……」

趙雲ガンダム

（あ、なんかいやらしいこと考えてる……）

そんな二人を見てニヤリと笑みを浮かべる星を見て、趙雲ガンダムも微妙な顔をしていたのはここだけの話。

その日の夜：一同は大量の食べ物と積んだ荷車を引く村人や庄屋と一緒に御堂へと向かつていた。松明を片手に進む山道は薄暗く、辺りを警戒しながら進んでいく。と……ここで張飛が口を開いた。

張飛ガンダム

「二人して何震えてんだよ？もしかして怖いのか？」

愛紗・鈴々

「……（ビクッ）……！！」

鈴々

「こ、怖くなんかないのだ！」

愛紗

「そ、そうだ！この震えはその……武者震いだ！」

関羽ガンダム

「少々無理があるのでは…？」

空気を読んでいるのかいないのか分からない張飛ガンダムの発言に、必死に反論する愛紗と鈴々。「武者震い」と言い切る愛紗に、関羽が苦笑いしながら突っ込んでいると…

星

「むー！（ピタッ）」

愛紗・鈴々

「「ひゃーっ！？」」

張飛ガンダム

「どうした！？何か出たのか！？」

突然星が立ち止まり、愛紗も鈴々も軽くだが悲鳴を上げる。張飛ガンダムが何事かと問いかけるが……

星

「いや……せつかく月がキレイだったのに、雲が出てきたなと思ってな」

愛紗

「な、なんだ…そんなことが…」

大した問題ではなかったようなので、再び先へ進む一同。と…

星

「あ！（ピタッ）」

愛紗・鈴々

「「ひええっ…!？」」

関羽ガンダム

「今度はなんですか!？」

再び立ち止まった星に、今度は関羽ガンダムが問いかけるが…

星

「昨日茶店で団子を食べた時、お主（愛紗）私より一本多く食べた
だろう?」

愛紗

「た…確かにそうだったかもしれないが…今そんなことを話さなくて
も…」

趙雲ガンダム

「星、わざとやっているだろ……」

またどうでもいい話題を引っ張り出し、のうのうと先へ進む星。

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするの』A（後書き）

Bパートへ続く

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするの』 B（前書き）

続きます

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするの』B

やがて御堂に辿り着く一同。積荷を荷車から降ろした後、四兄妹と二人の趙雲に後を任せ、庄屋たちとトントンは先に村へ戻ることになった。

庄屋

「では…頼みましたぞ」

トントン

「化け物退治、頑張って下さいね」

愛紗

「う、うむ！」

鈴々

「ま、任せるのだ！」

庄屋たちが去った後、六人は御堂の中へと入る。ろうそくの明かりがないと真っ暗になりそうなくらいの薄暗さで、いかにも何か出そうな雰囲気だ。とにかく化け物が出るまでは御堂の中で待機することになったのだが…

星

「そう言えば…あれもこんな風に月の出ない夜だったな…」

愛紗・関羽ガンダム・鈴々・張飛ガンダム

「（ゴクッ）…！」

背丈の少女と、ボロ布を被った大柄な三璃紗の侠だった。どちらもその手には、刃が鋭くとがった戟を携えている（少女の方には犬の飾りがついている）。

星

「正体を現したか。言っておくが私はそこで倒れている二人と違って、そんなものには脅されぬぞ」

趙雲ガンダム

「正確には、ここにいる彼女が原因でもあるんだがな」

咄嗟に飛びかかる星と趙雲ガンダム…しかし謎の二人組は臆することなく、その手に携えた戟で星と趙雲ガンダムの一撃を薙ぎ払う

趙雲ガンダム

（な、なんだ…！？この重い一撃は…！？）

あまりの一撃の重さに内心で驚く星と趙雲ガンダム。しかし怯んでいる暇はないと即座に切り結ぶが、謎の二人組の力強さに押され気味になる。

星

（こいつら、強い…！だがっ…！）

星と趙雲ガンダムも負けじと攻撃を繰り出す。だが攻撃を防いだ際に、衝撃で己の得物が飛ばされた隙をつかれ…

ドッ！！！！！！

星・趙雲ガンダム

「ぐあつ……！！！！！」

みぞおちに一発喰らわされ、星と趙雲ガンダムの身体はその場に崩れ落ちる。謎の二人組は、そのまま御堂に置かれた積荷の方へと足を進めた…

翌日の朝、一同は庄屋の屋敷で朝食を取りながら星と趙雲ガンダムの話を聞いていた。無論内容は、昨晚二人の趙雲が戦ったという謎の二人組についてである。

関羽ガンダム

「何？化け物ではないと？」

星

「ああ…まぎれもなくあれは人間だった。しかも二人組で、もう一人は三璃紗の侠だ」

愛紗

「おのれえ…謀りおつて…！だが、そうと分かればもう怖くないぞ！！！」

化け物の正体が人間と分かり憤る愛紗に、ふと趙雲ガンダムがツツコミを入れる。

趙雲ガンダム

「つまりそうと分かるまでは怖かったと？」

愛紗

「あ、いや…そういうわけでは…とにかく、化け物でないのなら次に会った時は必ず成敗してくれる！」

関羽ガンダム

「しかし、ここまで付いてこなくともトントン殿は村で待っていて良かったのでは？」

トントン

「化け物でないのなら、こんなことをするのも何か理由があるはず…もしそうなら、ちゃんと話をして…」

要するに説得を試みようと言い終わる前に、星が声を上げる。

星

「あつた。おそらくこれが…奴らの足跡だ」

鈴々

「行ってみるのだ。」

全員が星の見つけた場所に来てみると…確かに足跡が残っていた。それも二人分：一人は人間の、もう一人は三璃紗の侠のもので間違いない。両者の足跡はどちらも同じ方向へ続いている。足跡をたどった一同がさらに先へ進んでみると…

愛紗

「おい、あれ…」

星

「ふむ。奴らの隠れ家で間違いないな」

見つけたのは、たき火の跡とその傍らの洞穴。もっと詳しく調べようと、先へ進もうとしたその時！！

ガキイインツ!!!!!!!!!!!!!!

気配を感じた愛紗と関羽ガンダムと関羽ガンダムが、咄嗟に背後からの攻撃を防ぐ。仕掛けてきたのは間違いなく、昨晚星と趙雲ガンダムと対峙した謎の二人組だ!!

張飛ガンダム

「危ねえから下がってな!」

トントン

「はい!」

星

「気をつける…昨日の奴らだ!!」

謎の二人組が降り立ったと同時に、張飛に促され非難するトントン。武器を構える一同に対し、二人組も口を開く。

????

「…昨日勝手に気絶した二人」

????2

「ふふふ…感じるぞ、昨日とは明らかに違う貴様らの魂を…!」

愛紗

「さ、昨夜は不覚を取ったがもう油断はせぬぞ!///」

鈴々

「鈴々たちの強さを見せてやるのだ!///」

さりげなく昨晚気絶したことを突っ込まれ、若干顔が赤い愛紗と鈴々

趙雲ガンダム

「貴様ら、化け物でなければ名があろう!」

「名を名乗れ」と告げる趙雲ガンダムに対し…二人組は毛皮とボロ布を脱いだ。現れたのは…虚ろな瞳とアホ毛が目立つ少女と、仮面を付けた鋭い瞳の侠。

呂布（真名・恋）

「呂布…奉先」

呂布トールギス

「俺の名も……呂布!」

名乗った直後、恋と呂布トールギスは即座に斬りかかる!!恋は愛紗たちが相手をするが、ただ者とは思えない強さに圧倒される。呂布トールギスの相手を務める関羽ガンダムたちも、その強さに次々はじき返される

張飛ガンダム

「舐めてんじゃねえぞ!!」

呂布トールギス

「甘いっ!!!!」

張飛ガンダム

「うおおっ!!!」

ズバァッ!!!!!!!!!!

しかも、呂布トールギスが戟を一振りしただけで張飛ガンダムの右肩の鎧が斬られてしまった！

張飛ガンダム

「げええっ！！？俺様の鎧があ！？」

関羽ガンダム

「大丈夫か張飛！？」

尻もちをついた張飛ガンダムに関羽ガンダムが駆けよる横で、恋と呂布トールギスは背中合わせになって一同と対峙していた。

鈴々

「こんなの初めてなのだ…！」

愛紗

「な、なんなんだこいつらは…！？」

趙雲ガンダム

「言ったでしょう…強さは化け物並みだと！」

星

「ふ…やはりただ者ではなさそうだな…！」

改めて強さを実感する星と趙雲ガンダム。一方、背中合わせになっていた恋と呂布トールギスも何かを話しあっていた。

恋

「……奉先、やりすぎ」

呂布トールギス

「ふはははは……!! 恋……お前には分かるまい、この魂の昂りが……!!
! 久々の戦いが、この俺の血を更にたぎらせているのだ……!!」

恋

「……恋には……分からないままでいい……」

呂布トールギス

「うおおおおお!!……!! 魂イイイイ……!! ツ……!!
!……!!……!!……!!」

恋に軽く告げた後、呂布トールギスは激しく絶叫する!! 再びぶつかり合う、恋と呂布トールギスと愛紗たち一行。激戦が続く中、二人の呂布が勢いよく戟を振り回したことで一本の木が斬られる。

子犬

「アンアン!!」

馬

「ヒヒーンツ……!!」

その時、なんとその木が倒れそうな位置に子犬と赤い馬が出てきたではないか!

トントン

「あっ……!!」

恋・呂布トールギス

「……!!……!!……!!」

愛紗・関羽ガンダム・鈴々・張飛ガンダム

トント

それに気付いたトントンが咄嗟に子犬を抱え、馬がトントンを庇おうと飛び出し……！！

恋・呂布トルギス

木が倒れた瞬間を、啞然としながら見ていた恋と呂布トールギス……しかしトントンたちは無事だった。間一髪のところ、愛紗と関羽ガンダムと鈴々と張飛ガンダムが木を押さえてくれたのだ。

「クーン…（ペロペロ）」

トント

馬

トントンの顔を舐める子犬の無事を確認したのか、安心したように馬もいなくなる。やがて木が完全に倒れ、関羽たちが出てきたのを見

た恋と呂布トールギスは武器を下ろす。

恋

「お前たち、いい奴…いい奴とは戦えない」

呂布トールギス

「討伐に来た役人の手先かと思ったが…違うようだな」

たき火の所に腰を落ち着かせた一同。星が恋に犬の飾りを返したところで、トントンが口を開く。

トントン

「村の人たちに食べ物を買がせていたのは、犬と馬の餌のためだったのですね」

恋

「…自分たちで餌代を稼ごうとしたこともあったけど…／＼／」

若干顔を赤らめる恋が言うには…

．．．．．
．．．．．

一度は二人でメイド・執事喫茶的な店で勤めたこともあったらしい。

（接客時、呂布トールギスの場合）

女性客

「あ、あの…」

呂布トールギス

「お…お帰り、なさいませ…お嬢、様…」

（注文時、恋の場合）

男性客1

「俺、チャーハンとギョーザで！」

男性客2

「俺も同じのを…でも、チャーハンは大盛りで」

男性客3

「俺は坦々麺！あと春巻きも！」

男性客4

「俺はホイコーローに白飯、あと卵スープ…」

恋

「…………ラーメン四丁」

男性客たち

「……だああっ！！！！（ズコーッ）」「……」

しかし、上手く接客出来なかったり料理の注文を覚えきれなかったりと上手くいかずじまいだったそうなの。

……………

呂布トールギス

「…まあ、なんだ。俺もこいつと会うまでに、そういった職をやったことがなかったのも悪かったし…な」

先ほどの暴走ぶりとは打って変わって人間くさくなっている呂布トールギス。おそらく「魂イイイイ……ッ!!!!!!!!!!」と叫んだ姿が本性なのだろうが、恋と長い付き合いのためか大分軟化していると思われる。

鈴々

「全然ダメダメなのだ」

張飛ガンダム

「二人して役に立ってねーのな」

愛紗

「お前らが言うな!!」

関羽ガンダム

「まったく……」

星

「しかし、馬はともかく子犬一匹のためにあれだけの食べ物はいらぬだろう」

呂布トールギス

「一匹じゃないんだ、これが…」

星

「え？」

頭を抱える呂布トールギスの横で、恋が指笛を吹くと…洞窟からかなりの数の犬が出てきた。

愛紗

「こ、これは確かに…」

恋

「友達……みんな、捨てられたり、怪我したり………かわいそうでほっとけなかった…」

しょんぼりしている恋…と。

詠

「あ！月！」

貂蟬キュベレイ

「ここにいたか！」

近くに馬を止め、詠と貂蟬キュベレイが駆け寄ってきた。それに気付き、トントンも立ち上がる。

トントン

「あらー。詠ちゃん、貂蟬さん」

詠

「『あらー。詠ちゃん』じゃない！連絡が来るまでボクらがどれだけ心配したか！」

トントン

「ごめんなさい…」

貂蟬キュベレイ

「下々の声を直接聞きたいのは良く分かるが、もし危ない目にあっ

たりしたら…！」

トントン

「それなら大丈夫。今回は…あの方たちが助けて下さいましたから」
二人に対し、トントンは一同を見ながら告げる。

詠

「つて、危ない目にあつたの…!!？」

トントン

「ええ。少しだけ」

詠

「なっ…ぬぬ」

関羽ガンダム

「あの…お取り込み中申し訳ないが、お主たちは一体？」

失礼ながら会話に入ってきた関羽ガンダムに対し、二人は改めて自己紹介した。

詠

「我が名は賈馱、字は文和！」

貂蝉キュベレイ

「私は貂蝉…こちらにおられる太守の董卓様にお仕えしている者だ」

愛紗・関羽ガンダム・鈴々・張飛ガンダム・星・趙雲ガンダム

「『『『『『えええ…!!!!？』『』『』『』『』」

六人が驚くのも無理はない。村娘と思っていたトントンが、まさか太守だなんて思いもしなかったのだから。

貂蟬キュベレイ

「それで、化け物の件はどうなった？」

トントン

「もう解決しちゃった（にっこり）」

詠

「あ…そう…（かっくり）」

笑顔で答えるトントんに、詠もうなだれるのだった。

やがて一同と恋と呂布トールギス、そして庄屋は屋敷に招かれた。しばらくして現れたのは…高貴な衣装を身に纏ったトントン、改め月こと董卓だった。その高貴な中にも清純なたたずまいに、一同も感嘆の表情になる。

庄屋

「なるほど…そういうことでしたか」

董卓（真名・月）

「確かに、呂布さんたちのしたことはよくないことです。でもそれは、傷つき捨てられた犬たちを救うため…決して悪心から出たことではありません。門前の岩もすぐにどけますし、出来る限りの償いもするそうです。そうですね、呂布さん？」

無言で頷く恋と呂布トールギスの横で、事情を把握した庄屋も快く

受け入れる。

庄屋

「わかりました。既に本人たちからも謝ってもらってますし…村人には私の方から話しておきましょう」

月

「そうして頂けると助かります…ところで詠ちゃん、役所では「化け物が出る」という訴えを取り合わなかったとか？」

詠

「う…それは…」

ふと、役所での一件で詠を叱る月。

庄屋

「董卓様、もう済んだことですから…」

月

「いいえ、よくありません。民の声をおろそかにしないことこそ、政事の基本です」

庄屋の言葉も構わず、月は知らないところで起こっていた自分の失態を反省している。見た目はか弱い少女ではあるが、太守としての風格を醸し出している証拠だった。

詠

「かしこまりました…次はこのようにならないように、他の役人にも厳しく言い聞かせておきます」

月

「いいでしょう。それから……あの子たち、私の所で飼ってあげられないかしら？」

と、恋と呂布トールギスが連れてきたたくさんの犬を見ながら質問する月。かなりの数のため、それまで控えていた貂蟬キュベレイも思わず困ってしまう。

貂蟬キュベレイ

「て……あの数を全部か……？」

月

「詠ちゃんも貂蟬さんも、この間から街の治安が悪くなったのは警備の兵士が足りなくなっただけからって言うてたでしょう？ だったら、あの子たちをきちんとしつけて街の警備の手伝いをさせたいの。どう？ いい考えだと思わない？」

貂蟬キュベレイ

「た、確かに……ちゃんとしつければ泥棒よけにはなるでしょうが……」

月

「それなら大丈夫。呂布さんたち、お願いできますか？」

振り向きながら……恋と呂布トールギスに問いかける月。

呂布トールギス

「……俺たちを客将に迎え入れる……そういうことか」

恋

「……（コクコク）」

月の言いたいことを把握した呂布トールギスト、純粹に月の言葉に
頷く恋。

詠

「ま、待つて月！ボクらはまだ飼っていいとは…！」

貂蟬キュベレイ

「そ、そつだぞ！それに見知らぬ二人を迎えるなんて…！」

しかし、詠と貂蟬キュベレイはまだ納得してないと反論する……が。

月

「……ダメ、なの？（ウルウル）」

詠・貂蟬キュベレイ

「う………」

月

「お願い……（ウルウル）」

詠・貂蟬キュベレイ

「いや…それは………」

愛紗にも向けていた何とも言えないウルウルな視線を向けられてしまふ。更に恋と大量の犬たちからも視線が向けられている（呂布トールギスは微妙な顔をしていたが）。断りにくくなってしまう……とうとう折れた。

詠

「…分かった…飼うよお…」

貂蟬キュベレイ

「ああ…全部な…」

月

「（パアッ）…！二人とも、だ〜い好き！！（ガバッ！！）」

貂蟬キュベレイ

「こ、こら月！！／／大好きって…！！／／／」

詠

「あーもおっ！！／／／言つとくけど、こういう無茶なお願いは今回だけだからね…！？／／／ホントに今回だけ…って！？」

月に抱きつかれて困惑していた詠と貂蟬キュベレイに、更に呂布トールギスを引っ張って恋が抱きついてきた。偶然とはいえ、そのせいで呂布トールギスと貂蟬キュベレイがかなり密着している形になつてしまった。

貂蟬キュベレイ

「うおおお…！！！！！！？／／／な、なんだあ…！！？／／／」

呂布トールギス

「す、すまん…／／／俺も遠慮したんだが…／／／／」

恋

「……（スリスリ）」

鈴々

「きつとお礼の気持ちを表しているのだ！」

詠

「だ、だったら口で言えーーーーっ……！！！！／／／ていうかくっつく
なーーーーっ！！！！！！／／／」

なにはともあれ、化け物騒ぎも解決したのでめでたしめでたしであった。

第5話『関羽、愛紗・化け物を退治せんとするの』B（後書き）

次回予告

月

「一番・董卓。人間蠟燭をやります。まずおへそに油をさして、そこに火をつけて……」

詠

「ちよっ！！？月、だめだよ、そんな危ないかくし芸……」

恋

「二番・呂布、三十秒間黙ります」

詠

「それ放送事故になるから……」

呂布トールギス

「三番・呂布、叫びます。魂イイイイーーーーーッ！！！！」

貂蝉キュベレイ

「やかましい！！！！」

華雄ザンネツク、藍

「次回 第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うの』！！！！！！」

高順ヴァイエイト

「って二人とも何勝手に予告をやっているのですか……」

藍

「本当は早死にするから……」

華雄ザンネツク

「予告ぐらいさせる!?!」

詠

「たしかに……」

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うこと』A（前書き）

最新話です。今回で星と趙雲は卒業です（笑）

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合つること』A

この日……四兄妹は何とも言えない気まずさを感じていた。という
のも……先ほどから後ろを歩いている星が、趙雲ガンダムの首を軽く
締めながら無愛想になっていたからである。

愛紗

「なあ、星……まださっきのことを怒っているのか……？」

星

「……別に怒ってなどいない。ひどく不機嫌なだけだ（ギリギリ）」

趙雲ガンダム

「ぐ……ぐるじ……」

声をかける愛紗にもそっけなく返事を返し、星は更に趙雲ガンダム
の首を絞めている。

関羽ガンダム

「やはり怒ってるのでは………」

愛紗

「お、お主たちが厠に行ってる間にメンマを食べたことは謝る……！
この通りだ……！」

星

「……………（ギリギリ）」

趙雲ガンダム

「う、う、う………」

謝罪をしても、依然として星は反応しない。

関羽ガンダム

「い、いやあ……食べずに残っていたから嫌いなのではと思って、つい……な……?」

鈴々・張飛ガンダム

「うん、うん………」

やや言い訳同然に関羽ガンダムが相の手を入れるも、星の反応は変わらず……更にこんなことを呟いた。

星

「そうではない……大好物だからこそ、最後に食べようと思って大事に取っておいたのだ……（ギリギリ）」

趙雲ガンダム

「ぐえええ………」

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うのこと』

それは数時間前に遡る。立ち寄った村の料理屋で、一同がラーメンを食べていた時のことだった。

鈴々

「（スープ飲み終え）っはーっ！！おいしかったのだー！」

愛紗

「（同じく飲み終え）っはーっ！ごちそうさまー！」

その店のラーメンがおいしかったもので、スープもあっという間に飲み干し…ふと張飛ガンダムが気付く。

張飛ガンダム

「あれ？星と趙雲の奴、メンマ残してるぜ？」

関羽ガンダム

「ここのメンマはおいしいと評判なのに、もったいない…」

そう、少し前に「厠へ行く」と言って席を立った二人の趙雲のどんぶりの底に、何故かメンマだけが残されていたのだ。おそらく「二人ともメンマが嫌いなんだ」とここで勘違いしたことが、まずかったのだろう…

鈴々

「だったら鈴々が食べるのだ！（ヒョイ）」

愛紗

「じゃあ私も（ヒョイ）」

張飛ガンダム

「いないんなら貰っちゃってもいいよな！（ヒョイ）」

関羽ガンダム

「残すのも店に失礼だからな（ヒョイ）」

愛紗・関羽ガンダム・鈴々・張飛ガンダム

「「「はっー！！おいしかった！！」「」「」」

そのまま四兄妹が、残っていたメンマを食べてしまったのだ。で、星と趙雲ガンダムが厠から戻ると……

星・趙雲ガンダム

「あ——っ！……！！……？？」

既にどんぶりの中のメンマは空になっていたのである。

趙雲ガンダム

「ガクガクブルブル」

星

「……キッ！」

愛紗・関羽ガンダム・鈴々・張飛ガンダム

「！！！！！！」

この時になって、実は星がメンマ大好きで趙雲ガンダムは自分のメンマを星にあげるつもりだったのだと発覚したのである。趙雲ガンダムいわく「以前何も知らず彼女の分のメンマを食べてひどい目に遭ったことがあり、以来自分のメンマを彼女にあげるようにした」とのこと。

[illegible]

星

「ギリギリ……メンメン……」

趙雲ガンダム

「も、もう…勘弁して……………」

それ故に、さつきから星は怒っている証拠として趙雲ガンダムの首を絞めているのである。なお趙雲ガンダムを助けないのは、星の怒りにこれ以上触れるわけにもいかないたため…趙雲ガンダムからすればとばかりもいいところであるが。

愛紗

「鈴々、お前が食い意地はるからだぞ…！（ヒソヒソ）」

鈴々

「愛紗だって食べてたのだ…！（ヒソヒソ）」

愛紗

「だからあれは…。」

愛紗と鈴々も小声で責任の押し付け合いをするが、先ほどからずっと自分たちを睨んでいる星にビビってしまう。

関羽ガンダム

「そ、そうです…！次の村でまたラーメンを食べましょう…！拙者のメンマもあげますから…！」

張飛ガンダム

「お、おうよ…！俺様の分も食べていいぜ…！」

このままではとっさに関羽ガンダムと張飛ガンダムがフォローに入るが…

星

「人とメンマは一期一会…どうやったところで、もうあの時のメンマは戻ってこない…（ギリギリ）」

趙雲ガンダム

「じ…死ぬう………」

いつまでも過去にこだわり趙雲ガンダムの首を絞め続ける星に、四ただしメンマである兄妹もため息をつくしかなかった。先へ進んでいくうちに、分かれ道に差し掛かった。

愛紗

「分かれ道かあ…どっちへ行つたものかな？」

ややとぼけたように星に声をかけるものの…答えることなく趙雲ガンダムの首を絞め続けている。

鈴々

「こんな時は鈴々におまかせなのだ！」

と、鈴々が前に出て蛇矛を地面に軽く立てる。そして手を離して強く念じると……蛇矛は右の道に倒れた。

鈴々

「こつちなのだ！」

愛紗

「はいはい。ではあちらへ行ってみるか…」

そう言いながら星の顔を見る星だったが……全く態度を変える気配

がない。先へ進んでいく間も、星はずっと趙雲ガンダムの首を締めながら「メンマ……」と呟いていた。

再びため息をつく四兄妹……ふと、だんだん辺りが白くなってきた。

関羽ガンダム

「む…霧が出てきたな」

張飛ガンダム

「ホントだ。どんどん濃くなってきやがった…」

関羽ガンダム

「うーむ、これでは“キリ”がない…なんちゃってー」

さりげなくダジャレを言っただけで、気を引こうとした関羽だったが…未だに星の反応は変わらず、自分が恥ずかしい思いをしただけになってしまい顔が赤くなるのだった。とにかく先へ進んでいくが……進むたびに、霧がどんどん深くなっていく。

愛紗

「まずいな…これだと道を外れてもわからんぞ…」

関羽ガンダム

「二人とも待て！無暗に先に進むな！」

どんどん先へ進む鈴々と張飛ガンダムを一旦止める愛紗と関羽ガンダム……と。

鈴々

「…星たちはどうしたのだ？」

愛紗・関羽ガンダム

「「えっ!?!」」

鈴々の言葉に愛紗と関羽ガンダムが振り向くと…先ほどまで後ろを歩いていた星と趙雲ガンダムがいない!

愛紗

「星、趙雲殿、いるのか?どこだ?どこにいるんだ?星、いつまでも怒っていないで返事をしてくれ!」

まさかと思い愛紗が何回も声をかけるが……返事がない。

関羽ガンダム

「しまった…星殿たちとはぐれたか!」

張飛ガンダム

「早く探そうぜ!」

慌てて来た道を戻り、星と趙雲ガンダムを探す四兄妹。

愛紗

「おーい!星ー!趙雲殿ー!」

鈴々

「どこにいたのだー!?!」

愛紗

「聞こえてるのなら返事をしてくれー!星、どこに……(ズルッ)きやあつ!?!」

と、突然愛紗の悲鳴が聞こえた！

鈴々・張飛ガンダム

「「愛紗！？」「」

関羽ガンダム

「……！二人とも気をつけろ、崖になっている……！」

足元を慎重に見ながら、関羽ガンダムと鈴々と張飛ガンダムは愛紗の元へ駆け寄った。

張飛ガンダム

「しっかりしろ、愛紗！」

愛紗

「大丈夫……うっ！」

立ち上がるうとした愛紗だったが、左足に痛みを感じ止まってしまう。

張飛ガンダム

「ど、どうしたんだよ！？」「

愛紗

「くっ……どうやら足をくじいたようだ……」

鈴々

「ええ！？……ど、どうしよう……」

関羽ガンダム

「とにかくこの霧ではどうにもならない。下手に動かずじっとして
いた方が良さそうだ…」

戸惑う鈴々と張飛ガンダムに言い聞かせた関羽ガンダムの言うように、
四兄妹はその場で待機することにした…

その頃、星と趙雲ガンダムは…？

星

「…メンマ……………ん…あれ？」

趙雲ガンダム

「（解放された）げほっげほっ…え？」

ずっとメンマのことばかり考えていたのと、ずっと首を絞められ続
けていたためか…四兄妹とはぐれたのに気付くのはかなり後になっ
たようである。

やがて、それまで森を覆っていた霧が晴れてきた。

関羽ガンダム

「だいぶ霧が晴れてきたな…」

張飛ガンダム

「…あ！見るよ、あそこに家があるぜ！」

そう叫んだ張飛ガンダムが指差した先には、確かに大きめの屋敷が
あった。

愛紗

「助かった…あそこで少し休ませてもらおう」

鈴々

「鈴々がおぶっていくのだ！」

青龍偃月刀と邪矛を関羽ガンダムと張飛ガンダムに預け、鈴々が愛紗をおぶって屋敷へと向かう。

愛紗

「すまない…」

鈴々

「水臭いことは言いつこなしなのだ！それに、ぶにぶにのおっぱいが当たって気持ちいいのだ！」

愛紗

「のわああ…！？／／／」

鈴々

「わあああ…！！暴れちゃダメなのだ…！！」

自覚のないセクハラ発言に、思わず変な声をあげてしまう愛紗であった。

やがて四兄妹は、屋敷の門前へとたどり着く。

張飛ガンダム

「たあ……のも……！！」

????・????2

「「はい！」」

何故か道場破りのような声をかける張飛ガンダム。そして扉を開けて現れたのは……黄色い短髪の少女と、兜に龍の意匠が入った青い鎧の侠。少女と侠は怪我をした愛紗を見るなり慌てて、屋敷の中で書物を読んでいた人間の女性と三璃紗の老人の下へ駆け込んだ。

黄色い短髪の少女

「はわわわ……！！大変です先生……！！琥珀先生、水鏡先生……！！」

人間の女性

「どうしたのですか二人とも？そんなに慌てて……」

青い鎧の侠

「旅の方が来られたんですが、ひどい怪我をしていて……」

三璃紗の老人

「何？それは大変じゃ！」

数分後、屋敷の中へ招かれた四兄妹。愛紗の足の具合を見ながら、女性と老人は関羽ガンダムたちから詳しい事情を聞いていた。

水鏡（真名・琥珀）

「そうですか……それは災難でしたわね。このあたりは急に濃い霧が出るのがよくあって……」

愛紗

「うつ……」

そう言いながら、琥珀は患部に軟膏のように練り合わせた薬草を塗る。薬草が浸みたのか、愛紗が一瞬顔をしかめた。

琥珀

「これでよし、と。足が治るまでしばらくここでゆっくりしていく
といいわ」

水鏡ガンタンク

「うむ。そのうちはくれた仲間も見つかるじゃろっ」

愛紗

「かたじけない…」

礼を言う愛紗に対し、二人が名乗る。

琥珀

「わたくしは司馬徽、水鏡と号しております」

水鏡ガンタンク

「わしも水鏡。彼女と同じく本名は司馬徽じゃ。で…」

そして水鏡ガンタンクに促され、先ほどの少女と侠も名乗った。

孔明（真名・朱里）

「私は“諸葛亮”、字は“孔明”といいます」

孔明リ・ガズイ

「同じく、私も“諸葛亮孔明”と申します」

琥珀

「朱里、包帯を巻いてあげて」

朱里

「はい、先生」

水鏡に薬草のすり鉢を渡した後、朱里が、愛紗の患部に包帯を巻いていく。

愛紗

「世話をかけるな……」

朱里

「いえ……ふーっ、出来たぁ！」

しばらくして朱里が包帯を巻き終えると、琥珀と水鏡ガンタンクがその巻き具合を見て感心する。

琥珀

「あら、ずいぶん上手く巻けたわね」

朱里

「はい！先生たちみたいに上手になりたくて、いっぱい練習しましたから！」

水鏡ガンタンク

「そうか。よきかなよきかな」

朱里

「えへへ」

琥珀と水鏡ガンタンクに頭をなでられる朱里を、鈴々と張飛ガンダムはじつと見ていた。

それから数分後：愛紗は患部を空中に固定された状態で横になっていた。

関羽ガンダム

「水鏡殿、愛紗殿を手当してくださったのはありがたいのですがこれはちよつと…」

水鏡ガンタンク

「何言つとるんじゃ。骨が折れてなかったのが幸運なくらいだったんじゃぞ？動かさないようにせんと…」

愛紗

「し、しかしこれでは厠にも…／＼／」

鈴々

「大丈夫なのだ！おしっこに行きたくなったら鈴々が厠までおぶつて行つてあげるのだ！」

張飛ガンダム

「日替わりで俺様も手伝つてやるよ！」

自信満々に答える鈴々と張飛ガンダム…だが。

孔明リ・ガズイ

「いえいえ、そんなことをしなくても…ちゃんとこれがありますから」

愛紗

「ええ!？」

そう言つて孔明リ・ガズイが自信満々に取り出したのは…いわゆる「おまる」である。

孔明リ・ガズイ

「もよおしたくなつた時は、いつでも声をかけてくださいね」

愛紗

「い、いや…それはちよつと…／＼／」

照れくさそうに返事を返す愛紗…その一方で、鈴々と張飛ガンダムは朱里と孔明リ・ガズイをちよつとばかり睨んでいた。

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うこと』A（後書き）

Bパートへ続く

水鏡の真名は琥珀に変更しました

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うのこと』B（前書き）

B
パートです

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うこと』B

その日の夕食時。鈴々に支えられ愛紗が席につくと、テーブルの上にはたくさんの料理が並んであった。

愛紗

「おおー！これはうまそうだ！」

琥珀

「今日の夕食は朱里と孔明さんが作ったんです」

関羽ガンダム

「ほお…孔明殿たちは料理も出来るのですか」

朱里

「お口に会つといいのですが…／＼／」

琥珀

「さあ、ではいただきますしょう」

全員

「……………いただきます（なのだ）……………」

早速四兄妹がおかずを一口食べてみると……

愛紗

「うまーい！」

鈴々

「おいしーのだー！」

関羽ガンダム

「うむ、これは…」

張飛ガンダム

「うんめー！」

朱里

「よかった」

かなりの大好評のようで、朱里と孔明リ・ガズイも安心した。

関羽ガンダム

「そのお年でこれだけの料理が出来るとは…お見事ですな」

愛紗

「それに引き換え、鈴々と張飛は食べることばかりで…」

ジト目でにらむ愛紗に対し、大量におかずをほおばってた鈴々と張飛ガンダムが反論する。

鈴々

「り、鈴々だって料理くらい出来るのだ！」

張飛ガンダム

「おうよ！料理出来ねえとか勝手に言ってるじゃねえ！」

愛紗

「ほーう？じゃあどんな料理が出来るんだ？」

鈴々

「う・お、おにぎりとか…お結びとか…」

張飛ガンダム

「あと、その…焼き魚とか…」

張飛ガンダム

「なんでだよ!!」

鈴々

「なんで皆笑うのだ!!?」

しかし実際に何が出来ると言えば、レベルが低めのものばかり。
クスクスと笑う一同に、鈴々と張飛ガンダムは顔が赤くなりながら
おかずをほおぼるのだった。

すっかり辺りが暗くなった時分。

愛紗

「星と趙雲殿、無事だといいのだが？」

布団に横になりながら、愛紗が星と趙雲ガンダムの身を案じている
と……

鈴々

「ふぁー…久しぶりのお風呂気持ちよかったのだ」

なんと風呂上がりの鈴々が下着姿で愛紗の部屋に入り、タオルで頭
を拭いているではないか。

愛紗

「こら！そんな恰好でうろろするんじゃない！風邪をひくぞ！」

鈴々をしかつていると、再び扉が開き朱里がお湯の入った桶を持って入ってきた。足が動かせないため、風呂にも入れない愛紗の体を拭くためである。

朱里

「関羽さん、お体お拭きしますね」

愛紗

「何から何まで世話になって…申し訳ないな」

朱里

「いいんですよ。困った時はお互い様ですから…さあ、服を脱いでください」

お湯で濡らして固く絞ったタオルを手に、愛紗に脱いでもらうよう声をかける朱里…と。

愛紗

「あ、だが…その前に…」

朱里

「？」

愛紗

「なんというか、その…いわゆる一種の生理現象というか…／＼／」

朱里

「ああ…これですね？」

その一言で愛紗がもよおしたと分かったのか、朱里がさつと例の「おまる」を取り出す。

愛紗

「い、いや…お気づかいはありがたいのだが、それはちょっと…；
／／／」

朱里

「あ、もしかして大きいほうですか？」

愛紗

「そういう意味ではなくて……；鈴々！」

鈴々

「おまかせなのだ！」

できれば「おまる」は使いたくないようで、愛紗は寝間着に着換え
た鈴々におぶってもらおうとする。

朱里

「それでしたら……」

と、鈴々が愛紗を起こしたところで朱里が何かを取りに行った。そ
して数分後朱里が持ってきたのは……木造の車いす。

愛紗

「おお！これは……」

朱里

「私と孔明さんが作ったんです。足を怪我した人でも動けるように
つて」

愛紗

「なるほど、これは便利だ」

そのまま朱里に押されて厠へと向かう愛紗……面白くないのか、鈴
々の表情はむつりしたままだった。

同時刻、少しでも世話になった礼をしようと関羽ガンダムは外で薪
を割っていた。

関羽ガンダム

（星殿と趙雲は大丈夫だろうか）

と、夜空を見ながら考えていると…

張飛ガンダム

「おーい！ヒゲも風呂入れよ、あつたけーぞー！」

タオルを首にかけた風呂上がりの張飛ガンダムが、窓からひょっこ
り顔を出す。

関羽ガンダム

「全く…お前も少しは手伝ったらどうなんだ？」

のんきに風呂を進める張飛ガンダムに関羽ガンダムも軽く呆れる。
と、孔明リ・ガズィがタオルを手にも外へ出てきた。

孔明リ・ガズイ

「薪割りご苦労様です、関羽さん」

関羽ガンダム

「なに、世話になってるのだからこれくらいは当然であらう。何より愛紗殿の件、本当に感謝せねば」

孔明リ・ガズイ

「いやあ…そんなことないですよ」

持つてきてくれたタオルで汗を拭きながら、孔明リ・ガズイと談話する関羽ガンダム。

関羽ガンダム

「さて…割った薪はどこに置けばよろしいかな？」

孔明リ・ガズイ

「そうですね…ここからすぐ角を曲がれば台所の裏口がありますから、その傍にお願いします」

関羽ガンダム

「承知した…張飛」

張飛ガンダム

「へいへーい」

関羽ガンダムの言葉に応じ、外へ出る張飛ガンダム。結構な量の薪を割ったので、運ぶのを手伝えということだろう。

孔明リ・ガズイ

「ちよつと待つてください」

と…孔明が何かを取りに戻り…持ってきたのは木製の台車だった。

関羽ガンダム

「ほお…台車ですか」

孔明リ・ガズイ

「多くの薪を手軽に運べるようにって、朱里さんと私で作ったんです」

関羽ガンダム

「確かにこれは便利ですな」

そう言いながら、関羽ガンダムは孔明リ・ガズイと共に薪を運んで行く。張飛ガンダムの視線も、どこか面白くなさげだった。

翌日、朱里と孔明リ・ガズイは草庵で学問にはげんでいた。互いに書物を読みあつたり、暗記できているか互いに確認しあつたり。琥珀と水鏡ガンタンクに足の包帯を換えてもらっている愛紗と、琥珀と水鏡ガンタンクを手伝いに来た関羽ガンダムも、そんな朱里と孔明リ・ガズイの姿を眺めていた。

関羽ガンダム

「水鏡殿、孔明殿たちはいい子ですね。素直で賢くて学問が好きで、ちゃんと手伝いもなさるし…」

水鏡ガンタンク

「ほっほっほ。鈴々ちゃんと張飛殿もいい子ではありませぬか」

関羽ガンダム

「いや、あの二人は全然……」

琥珀

「元気があつて明るくて、私は大好き」

水鏡ガンタンク

「ワシもじゃ。それにとつても母親想いですしな」

と、水鏡ガンタンクの「お母さん」発言に愛紗が反応する。

愛紗

「は！？お母さん！？」

琥珀

「え？違うんですか？？」

愛紗

「ち、違います！！わ、私達と鈴々達は親子じゃなくて兄妹、それも義理の……っていうか、なんでそんな勘違いをお……！？そもそも私は子供が出来るようなことはまだ一度もおお……！！／／／」

水鏡ガンタンク

「ま、まあまあ！分かりましたから落ち着いてくだされ！」

顔を赤くして慌てる愛紗を、水鏡ガンタンクが慌ててなだめる。と……今度は琥珀と水鏡ガンタンクが朱里と孔明リ・ガズイの過去を語り始めた。

琥珀

「あの子…朱里は幼いころに両親を亡くし、姉妹そろって親戚をたらい回しにされていくうちに姉や妹と別れ別れに…その後しばらくは私達の師匠に当たる人の下にいたのですが、結局私たちが預かることになったのです。孔明さんとはその時に初めて出会ったのですが、すぐにお互い打ち解けて“真名”も教える仲になったんです」

水鏡ガンタンク

「三璃紗の孔明…あやつは幼いころから天才と呼ばれるほどの頭脳の持ち主なのじゃが、それ故に周りからも快く思われないことが多いのだ。家族を亡くしてからわしらの下へ来たのも「天才なら一人で生きていけるだろう」と親戚から蔑ろにされ続けたからなんじや」

関羽ガンダム

「そうだったのですか…」

琥珀

「関羽さんたちがおっしゃるように、あの子たちは本当にいい子…とても聞き分けがよくて、私たちのところに来てからもワガママなど一言も言ったことがなくて…」

水鏡ガンタンク

「しかし、わしらにはそれが辛い境遇を耐え抜くうちに身についてしまった悲しい性に見えてのお…」

愛紗

「水鏡殿…」

草庵で学問にはげむ朱里と孔明リ・ガズィを見つめる琥珀と水鏡ガ

ンタンクの瞳が、愛紗と関羽ガンダムにはさびしそうに見えた。

その日の夜。朱里が昨日と同じように愛紗の体を拭き、その傍で孔明リ・ガズイが（もちろん愛紗の裸を見ないように）関羽ガンダムに次の村への地図を見せながら、琥珀と水鏡ガンタンクが作る薬の話をしていた。

愛紗

「ほおー、水鏡殿たちの作る薬はそんなによく効くのか」

孔明リ・ガズイ

「はい。だから時々ふもとの村の人たちに頼まれて、作ったお薬を分けに行ったりするんですよ」

朱里

「私たち、先生たちみたいに将来はみんなの役に立つ人間になりたいんです…でもそのためには、まずいろんなことが出来るようにならないとって思ってた…」

関羽ガンダム

「そうであつたか…孔明殿たちは本当にいい子ですなあ」

愛紗

「全くだ」

感心しながら朱里と孔明リ・ガズイの頭をなでる愛紗と関羽ガンダム…と、ハツと思い出したかのように手を離す。

関羽ガンダム

「あつ！こ、これは失礼！」

愛紗

「水鏡殿たちがやってるのを見ていたから、つい…／＼／」

朱里

「いいんです、私…ナデナデされるの大好きですからw」

孔明リ・ガズイ

「私も…先生たち以外の方からなでられるの初めてなんですw」

笑顔でにつこり答える朱里と孔明リ・ガズイ。一方…扉の隙間から一連を見ていた風呂上がり^の鈴々と張飛ガンダムは、やや表情が陰しかった

四兄妹が屋敷に来てから三日目。しかし愛紗の足の腫れは、未だに引く様子が見えない。

琥珀

「なかなか治らないわね…こういう時、^{サロンバ}紗論破草があればいいのだけれど…」

鈴々

「紗論破草ってなんなのだ？」

水鏡ガンタンク

「こういう腫れによく効く薬草じゃ。白い小さな花を咲かせていての、その葉をすりつぶして使うんじゃよ」

と、ここで朱里と孔明リ・ガズイが申し出てきた。

朱里

「先生！紗論破草なら私たちが取ってきます！」

琥珀

「え？でも…紗論破草が生えているのはずいぶんと山の上の方よ？」

孔明リ・ガズイ

「大丈夫です！何度か先生たちと行ったことがある場所だから覚えていきますし！」

朱里と孔明リ・ガズイの申し出に、少し考える琥珀と水鏡ガンタンク。

琥珀

「そうねえ…本当なら私たちも行けたらいいのだけど、今日は頼まれていたお薬をふもとの村まで届けないといけないし…」

水鏡ガンタンク

「ふむ…それじゃあ頼めるかのお？」

朱里・孔明リ・ガズイ

「（パアアッ）はい！」

数分後、二人の孔明は出かける準備を整えた。朱里は愛用のポシェットを肩にかけ、帽子の位置もちゃんと正して。孔明リ・ガズイはその手に愛用の扇・爆鳳扇を携えて。

朱里

「それじゃあ行ってきます！」

琥珀

「転ばないように気をつけるんですよ」

朱里・孔明リ・ガズイ

「はーい！」

琥珀と水鏡ガンタンクに見送られ、朱里と孔明リ・ガズイは山へと向かうのだった。

さて、紗論破草を取りに向かった二人の孔明の後ろをついていく奴らがいた。大体察しはついていいるだろうが…先日から朱里と孔明リ・ガズイのことを快く思っていない鈴々と張飛ガンダムである。

鈴々

「あいつらにばっかこれ以上良いカツコはさせないのだ！」

張飛ガンダム

「俺様たちが一番の弟分と妹分つてことを思い知らせてやらあ！」

そう、この二日間ほとんど出番を持っていた(?) 朱里と孔明リ・ガズイを見返すためにこっそり屋敷を抜け出したのである。朱里と孔明リ・ガズイの後をつけ、二人が見つけた薬草を横取り…は流石にまずいので、薬草のある場所までついたら二人より先に摘んで持って帰ろうという魂胆だ。先に薬草を届け、愛紗と関羽ガンダムに褒められてるところを想像し二人がニヤけていると…

朱里

「はわわっ…!!!? (ステーン)」

孔明リ・ガズイ

「朱里さん！！大丈夫ですか！？」

朱里

「は、はい…すみません・・・」

突然朱里がすっ転んだ。転んだ朱里を孔明リ・ガズイが起こし、再び先へ進む。それを見ていた鈴々と張飛ガンダムは必死に笑いをこらえていた。

張飛ガンダム

「ダッセー…何もないところで転んでやがる」

鈴々

「二人とも足がトロそうだし、あいつらより後に摘んでも早く帰れそうなのだ」

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うこと』B（後書き）

Cパー氏へ続く

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合っのこと』C（前書き）

Cパートです。次回予告も面白くしております

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うこと』C

その後も二人の孔明が先へ進んでいく内に…かなりの高さがある渓谷のつり橋へとたどり着く。橋から下を見て思わず肩がすくむ朱里と、朱里の肩に手を置く孔明リ・ガズイ。

鈴々

（何ぐずぐずしているのだ？ははーん…きつとあいつら高いところが怖いのだ）

張飛ガンダム

（だからつり橋も怖くて渡れねえってか？情けねえ）

別に孔明リ・ガズイも怖いわけではないが、勝手に解釈してニヤける鈴々と張飛ガンダム。

朱里

「先生たちと来た時は手を引いて貰ってたから怖くなかったけど…；でも、関羽さんのためにも頑張らなくちゃ！」

孔明リ・ガズイ

「そうですよ朱里さん。先生たちほど頼れませんが…私もついてますからね」

改めて手をつなぎ、朱里と孔明リ・ガズイがつり橋を渡る。慎重に縄を手繰りながら、先へ進む二人…途中で穴が空いているところがあったけど、なんとか横切って……

鈴々

(…つり橋渡るだけなのにどれだけかかっているのだ…)

張飛ガンダム

(ホンツト二人してトロくせえなあおい…)

あまりにも慎重に渡っていく朱里と孔明リ・ガズイに、鈴々と張飛ガンダムも呆れ気味になるのだった。

つり橋を渡り終え、更に先へ進んでいく朱里と孔明リ・ガズイ。やがて紗論破草が生えているという場所へたどり着いたようだ。

朱里

「ふー、やっと着いたあ…確かこの辺りのはずだと思っんですけど…」

孔明リ・ガズイ

「ちよつと待ってくださいね…爆凰機！」

と、孔明リ・ガズイが爆凰扇を空高く投げる。すると鳥のような偵察機へと変形し、辺りを飛び始めた。この偵察機もとい爆凰機は孔明リ・ガズイの意識と同調していて、爆凰機が見たものは孔明リ・ガズイにも見えるという優れものなのだ。飛ばしてからしばらくすると、爆凰機は爆凰扇に変形し孔明リ・ガズイの手元に戻る。

孔明リ・ガズイ

「どうやらあそこみたいです」

朱里

「えっと…あつたあ！…でも…」

孔明リ・ガズイの言うとおり、確かに紗論破草はあった。しかし生えていたのは……結構な高さがある崖の上。後をつけていた鈴々と張飛ガンダムも、その場所を見て「勝ったも同然」と言った表情になる

鈴々

（高いところが苦手なあいつらが、あんなとこまで登れっこないのだ）

張飛ガンダム

（あいつらが諦めて帰ったあとで、俺様たちが持って帰ってやる）

そのまま朱里と孔明リ・ガズイが諦めるのを待とうとした鈴々と張飛ガンダム。

しかし鈴々と張飛ガンダムの予想を超えて…朱里が突然登り始めたのだ。

孔明リ・ガズイは背中に爆鳳扇を装着し、空に浮かびながら朱里を支えている…いわゆる落ちないための保険といったところか。とはいえやはり下を見た朱里は、恐怖のあまりバランスを崩しそうになる。

鈴々

「へん、どうせ怖くなって途中で諦めるに決まってるのだ」

張飛ガンダム

「あいつなんか、怖い癖に飛んでやがるぜ」

小馬鹿にする二人の張飛に気づかず朱里は慎重に登り、孔明リ・も朱里を慎重に支える。

ある程度登ったところで、再び下を見てしまった朱里は…

朱里

「ふえええ……!!」

孔明リ・ガズイ

「しゅ、朱里さん……!!」

張飛ガンダム

「あっ!」

鈴々

「危ないのだ!!」

再びバランスを崩しかけた朱里の体を、とっさに支える孔明リ・ガズイ。思わず鈴々と張飛ガンダムも声をあげるが、それでも二人の孔明は上へ上へと登っていく。やがて、あと少しで紗論破草に朱里の手が届く位置までやってきた。足場が悪いため、孔明にすっかり抱えてもらいながら手を伸ばす朱里……そんな二人を見て、鈴々と張飛ガンダムはだんだん複雑な気持ちになってきた。

鈴々

（な……なんであいつ、あんなに頑張ってるのだ……高いところ怖いのに、なんで……）

張飛ガンダム

（それにあいつ、飛べる癖に……一人で飛んで取ってこれるのに、なんで……）

怖いにも関わらず、飛べるにも関わらず……朱里と孔明リ・ガズイは協力しあって紗論破草を取ろうとする。鈴々と張飛ガンダムも、そ

んな朱里と孔明リ・ガズイから目が離せなかった。

朱里

「も、もう少し……あと少し……！」

孔明リ・ガズイ

「が、頑張ってください……！」

必死に紗論破草へ手を伸ばす朱里と、身長差があるにも構わず必死に朱里の体を抱える孔明リ・ガズイ。ついに朱里の手が紗論破草に届いた………次の瞬間……！！

ガラッ……！！！！

朱里・孔明リ・ガズイ

「「あっ……！！？」」

それまで朱里が足場に使っていた岩が崩れ、同時に突然加わった重力に耐えられなくなった孔明の背中から爆凰扇が外れてしまったのだ……！！朱里と孔明リ・ガズイの体がそのまま落ちていく……！！！！

鈴々・張飛ガンダム

「「……………！！！！」」

朱里・孔明リ・ガズイ

「「ああ……………っ……………！！！！！！！！」」

地面に朱里のポシエットと、孔明リ・ガズイの爆凰扇が転がった……

……

朱里・孔明リ・ガズイ

「わわわわわ……え？？」

地面に激突すると慌てていた朱里と孔明リ・ガズイだったが、いつまでもたつても衝撃が来ない。どうしたのかと、ふと下を見ると

……

鈴々・張飛ガンダム

「むむむむ……／／／！」

朱里・孔明リ・ガズイ

「張飛さん！？！」

なんと鈴々と張飛ガンダムが受け止めていたのだ！降ろしてもらった後、ポシエットと爆凰扇をそれぞれ受け取る朱里と孔明リ・ガズイ。

孔明リ・ガズイ

「お二人とも、どうしてここに…？」

鈴々

「どうしてって…た、たまたま通りかかったのだ、たまたま！／／／」

孔明リ・ガズイ

「たまたま…？？」

朱里

「あ！もしかして私たちの後を…」

張飛ガンダム

「んなことより！早いとこ紗論破草摘むぞ！／／／」

朱里

「は、はい…」

そういうと、鈴々と張飛ガンダムは軽々と崖を上って紗論破草を摘んできた。そして…若干顔を赤らめながら、朱里と孔明リ・ガズイに渡す。

鈴々

「ほらなのだ／／／」

朱里

「え？でもこれは張飛さんたちが…」

鈴々

「見つけたのはお前らなのだ。鈴々たちは手伝っただけだから、お前らが愛紗に渡すのだ…／／／」

張飛ガンダム

「そういうことだからよ、早く受け取りやがれってんだ…／／／」

孔明リ・ガズイ

「張飛さん…」

ちょっと不器用な鈴々と張飛ガンダムに、朱里と孔明リ・ガズイも自然と笑顔になっていた。

夕焼け空の帰り道を歩く鈴々と張飛ガンダムと朱里と孔明リ・ガズイ。つり橋を渡る時も、鈴々と張飛ガンダムは無言で先へ進もうとしたが…わざわざ一旦引き返して、朱里と孔明リ・ガズイの手を取った。相変わらず鈴々と張飛ガンダムはむっつりした表情だったが、朱里と孔明リ・ガズイは笑顔だった。

朱里

「…張飛さんたちって優しいんですね」

鈴々

「な、何言ってるのだ！／＼／」

張飛ガンダム

「お、お前らがノロノロしてるから手伝ってるだけで、別に優しくなんかねえよ！／＼／」

つり橋を渡り終えた後も握っていた手を離しつつ、未だに威張ったそぶりをする鈴々と張飛ガンダム。すると朱里と孔明リ・ガズイが駆け寄り…

朱里

「張飛さん！あの、張飛さんのこと…鈴々ちゃんって呼んでもいいでしょうか？」

孔明リ・ガズイ

「恥ずかしながら…私も鈴々さんと呼ばせてもらっていいですか？」

鈴々・張飛ガンダム

「「なっ…！」」

突然鈴々を“真名”で呼んでもいいかと声をかけてきたのだ。一瞬戸惑うも、鈴々と張飛ガンダムはそのまま先へ進む。

鈴々

「お…お前らがそうしたいならすればいいのだ！でも、鈴々はお前のこと“真名”でなんか呼んでやらないのだ！／／／」

張飛ガンダム

「お、おう！俺様だって呼ばねえよ！それでもいいなら勝手にしやがれ！／／／」

朱里・孔明リ・ガズイ

「はい！鈴々ちゃん（さん）、張飛さん！」

そして朱里と孔明リ・ガズイは素直に返事をするのだった。

やがて四人は無事、水鏡の屋敷へと帰りついた。すぐさま琥珀と水鏡ガンタンクが、四人を出迎える。

琥珀

「おかえり、まあ…ずいぶんと汚しちゃったのね」

孔明リ・ガズイ

「先生、これを…」

水鏡ガンタンク

「おお、良くやったのお。二人でちゃんと取って来れたんじゃない？」

紗論破草を受け取り、朱里と孔明リ・ガズイを褒める水鏡ガンタンク…と。

朱里

「いいえ、二人じゃなくて…私たちと鈴々ちゃんたちの、四人で摘んできたんです！」

笑顔でにつこり答える朱里に、水鏡も一瞬キョトンとするも笑顔で返し、

水鏡ガントク

「良きかな良きかな」

水鏡ガントクも笑っていた。

そしてその日の夜、ぐっすり眠る朱里と孔明リ・ガズイを見て…琥珀と水鏡ガントクは心に決めた。

翌日、愛紗の足の包帯を取ってみると…腫れは跡かたもなく消えていた。

琥珀

「まあ！すっかり良くなったわね。紗論破草が効いたんだわ」

関羽ガンダム

「それでは…！」

水鏡ガントク

「うむ。もう歩いてても大丈夫じゃ」

愛紗

「水鏡殿たちにはすっかり世話になってしまって、なんとお礼を言

「つたら良いか…」

治った足をさすりながら答える愛紗に、琥珀は包帯を洗いながら口を開く。

琥珀

「困った時はお互い様、お礼なんて別に…」

愛紗

「それでは私の気がすみません！私にできることがあれば、言っただけませんか？」

関羽ガンダム

「拙者からもお願いします！何かお礼をさせて下さい！」

愛紗と関羽ガンダムの言葉に対し…琥珀と水鏡ガンタンクは真剣なまなざしを向ける。

水鏡ガンタンク

「それでは…一つお願い出来ますかのお？」

愛紗・関羽ガンダム

「「はい！」」

琥珀

「ご迷惑とは思いますが、朱里と孔明さんを…一緒に旅に連れて行ってやってほしいのです」

関羽ガンダム

「えっ…？孔明殿たちを旅に…？」

驚く愛紗と関羽ガンダム、そして琥珀と水鏡ガンタンクが再び口を開く。

琥珀

「はい。あの子たちは以前から旅に出て、世の中を見て回りたいと言っていて… 私たちも若い頃は、あちこちを回って見聞を広め、多くを学びました。ですから、あの子たちにも同じようにさせたいと思うてはいたのですが…」

水鏡ガンタンク

「ご存知の通り、最近は物騒じゃし… いくらしっかりしていると言っても、あの年で二人旅というものお… じゃから、もし宜しければあの二人を旅のお仲間に加えていただきたいのですじゃ」

愛紗

「それは構いませんが… 水鏡殿たちはそれでよろしいのですか？」

ふと愛紗に指摘され、一瞬戸惑うも… 琥珀と水鏡ガンタンクの決意は揺るがなかった。

琥珀

「… そうですね。あの子たちがいなくなると、ここはさびしくなります。でも… 【旅に出たい】というのは、あの子たちが私たちに言った、たった一つのおねだり… その気持ち、叶えてあげたいと思います」

水鏡ガンタンク

「それにあの二人には、ここに留まっただけでは目覚めることのない才能があると信じておる。今でこそ地に伏す龍ではあるが、旅に出

ることで天を駈ける時が訪れるはずじゃ」

琥珀と水鏡ガンタンの決意を聞いた愛紗と関羽ガンダムは…了承を決めた。

愛紗

「わかりました。この関羽…責任を持って二人の諸葛孔明殿をお預かりします」

関羽ガンダム

「お二人のお言葉、決して無駄には致しません」

そして旅立ちの時……四兄妹と共に旅をすることになった朱里と孔明リ・ガズイが、水鏡の屋敷に向かって手を振る。

朱里

「水鏡先生、お元気でーっ！」

鈴々

「こっからじゃ聞こえるわけないのだ」

孔明リ・ガズイ

「でも、当分の間は会えなくなるだろうし…」

張飛ガンダム

「だったら旅に出なきゃいいだろ」

冗談をこぼす張飛ガンダムに軽くムツとしつつも、朱里と孔明リ・ガズイは屋敷を見つめていた

朱里

「先生、今までありがとうございました…」

孔明リ・ガズイ

「私たち、これから…」

朱里・孔明リ・ガズイ

「「頑張ります！」」

こうして、後に伏龍と謳われる二人の軍師の旅が始まるのだった。

第6話『張飛、鈴々・孔明、朱里と張り合うこと』C（後書き）

次回予告

四兄妹、朱里、孔明リ・ガズィ

「「「「「趙雲さん、作品、卒業、おめでとう!!」」「「「「「

星、趙雲ガンダム

「「え!!!?」」

愛紗

「いやぁー、長い間ご苦労だったな星!!」

関羽ガンダム

「趙雲もご苦労であつた」

星

「いや・・・卒業って・・・」

鈴々

「これでお別れなのはさみしいけど星と趙雲のことは忘れないのだ」

張飛ガンダム

「俺様も忘れないぜ!!」

朱里

「私達、趙雲さん達の後を引き継いで一生懸命がんばりますね」

孔明リ・ガズィ

「それでは趙雲さん、最後の一仕事、お願いしますね」

星

「次回、第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいのこと』

趙雲ガンダム

「って・・・これで最後なのか!？」

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』A（前書き）

最新話です

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』A

朱里と孔明リ・ガズイを旅仲間に加えた四兄妹は、再び先へと進んでいた。

愛紗

「こら鈴々、張飛。二人で勝手に先へ行くな、はぐれても知らんぞ」

朱里

「そう言えば霧の中ではぐれてしまったお仲間の方々…名前は確か…」

関羽ガンダム

「どちらも趙雲です」

朱里

「そう、その趙雲さんたちとは結局はぐれたままでちょっと心配ですね」

どんどん前へ進んでいく鈴々と張飛ガンダムを愛紗が注意する横で、ふと朱里が口を開く。そう…琥珀と水鏡ガンタンの屋敷から出た後も、前回霧の中ではぐれた星と趙雲ガンダムとは再会できず、結局それっきりになってしまったのだ。

愛紗

「…けど、あの二人も子供ではない。きっとこの空の下で、元気にやっているさ」

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』

ふと、鈴々と張飛ガンダムが立ち止まっていたため愛紗と関羽ガンダムと朱里と孔明リ・ガズイも足を止める。その前では…道が二手に分かれていた。

関羽ガンダム

「む…分かれ道か」

孔明リ・ガズイ

「どちらへ行けばいいでしょうか？」

関羽ガンダム

「そうですなあ…」

鈴々

「こんな時は鈴々におまかせなのだ！」

そういつて前に出た鈴々に、愛紗と関羽ガンダムは「またあれ（＝占い）をやるのか」と軽いため息。蛇矛を地面に軽く突き立てた後、鈴々が軽く念じると…カタンと音を立てて、蛇矛が右側へ倒れる。

張飛ガンダム

「おっ！右に倒れた！」

愛紗

「よし、じゃあ左に行くか」

関羽ガンダム

「そうですな」

しかし愛紗と関羽ガンダムは占いの結果をあつさり無視して左へ行こうとする。

鈴々

「つて、なんでそうなるのだ!!?」

愛紗

「この間お前の占い通りに行ったら、霧に捲かれるわ、崖からすべって怪我をするわで大変な目にあっただろう。お前の占いを信じない方が安全だ」

鈴々

「うう…!!で、でも今度はきつと大丈夫なのだ!」

関羽ガンダム

「どうだか。進んだところでまた厄介なことに巻き込まれるのは目に見えているがな」

張飛ガンダム

「何言つてんだよ!右に倒れたんだから右に決まってる!」

愛紗

「だから、その占いが信じられないというのだ!!」

関羽ガンダム

「そのとおりだ!!」

先日の経験から占いを信じようとしない愛紗と関羽ガンダムと、絶対に占いが正しいと言い切る鈴々と張飛ガンダム。にらみ合う四兄妹に対し、朱里と孔明リ・ガズイが戸惑いながらも助言する。

朱里

「あ、あの関羽さん…確かに鈴々ちゃんの占いに根拠はありませんが、いくら前に大変なことがあったからと言ってまた起きるとは限らないと思うんです」

孔明リ・ガズイ

「そ、そうですよ。だからここは鈴々さんの占い通りに進んでみるのはどうでしょうか？」

愛紗

「孔明殿が言うのなら・・・」

朱里

「それなら・・・」

朱里と孔明リ・ガズイの言葉を聞いて、愛紗と関羽ガンダムも顔を見合わせる。

一瞬安心した朱里と孔明リ・ガズイ…だったが

張飛ガンダム

「余計なこと言ってるじゃねえよ」

朱里・孔明リ・ガズイ

「「えっ……」」

鈴々

「これは鈴々たちと愛紗たちの問題なのだ。お前らには関係ないから引っこんでるのだ」

あろうことか、鈴々と張飛ガンダムが朱里と孔明リ・ガズイを邪魔

者扱いしたのである。

これには愛紗と関羽ガンダムも黙ってはられない。

関羽ガンダム

「二人ともなんてことを言うんだ！！孔明殿たちはお前たちのために思ってたなあ！！」

張飛ガンダム

「それが余計だっって言ってんだよ！！」

更に関羽ガンダムの言葉を切り捨て、鈴々と張飛ガンダムは右へ進もうとする。

愛紗

「おい、待て、鈴々！！張飛！！」

鈴々

「とにかく鈴々たちはこっちに行くのだ！！」

愛紗・関羽ガンダム

「っっ…勝手にしろ！！！！」

鈴々・張飛ガンダム

「勝手にするのだ（してやらあ）！！！！」

そのまま鈴々と張飛ガンダムは、勝手に右へと進んでしまった。

朱里

「鈴々ちゃん、張飛さん！」

孔明リ・ガズイ

「いいんですか関羽さん！？あのまま行かせてしまつて…！」

愛紗

「心配するな。どうせあの二人のことだからすぐ寂しくなつて『やっぱり一緒に行くのだー！』とか言つて戻つてくるさ」

朱里・孔明リ・ガズイ

「でも…」

関羽ガンダム

「愛紗殿の言う通りです。さあ、孔明殿たちも行きましょう」

朱里と孔明リ・ガズイが戸惑うのも構わず、愛紗と関羽ガンダムはそのまま左へと進んでいくのだった。

鈴々

「愛紗たちつたら孔明たちの味方ばかり…」

張飛ガンダム

「こつちの言い分は全然聞かねえ癖によお…」

別れてから数分後…占いの通りに進んでいく鈴々と張飛ガンダムは、朱里と孔明リ・ガズイにばかり味方する愛紗と関羽ガンダムにぶつぶつ言い続けていた。

しばらく歩いていくと…前方に街が見えてきた。

鈴々

「あー街なのだー！やっぱり鈴々の占いが当たつてたのだー！」

張飛ガンダム

「ひゃっほーい！ざまあみるヒゲー！！」

二人は街を歩いていたが……

グギュルルルル

張飛ガンダム

「腹減った……」

鈴々

「でもお財布は愛紗と関羽が持っているからご飯食べれないのだ」

と…看板の前に人だかりが出来ているのに気付いて近づいてみる。

鈴々

「うーん、難しい字はあんまりないけど…」

張飛ガンダム

「やっぱ読めねえなあ…」

相変わらず鈴々と張飛ガンダムは看板が読めないようだ。

???

「大食い大会本日開催、飛び入り歓迎！」

????2

「優勝者には賞金と、豪華副賞あり！」

と、二人の後ろで看板を読む者たちがいたので振り向いてみると…

鈴々・張飛ガンダム

「馬超!!!」

翠

「よ!久しぶりだな!」

そう、そこにいたのは以前袁紹の街で仲良くなった翠と馬超ブルーデイスティニーだった。

鈴々

「ど、どうしてここにいるのだ?故郷の西涼に帰ったんじゃ…」

馬超ブルーデイスティニー

「んー、一度は帰ったんだ。で、やることやって武者修行の旅に出たのは良いんだけど…ここに来て路銀が底をついちまってノノノ」

張飛ガンダム

「てことは…もしかして!」

翠

「おう!!あれに優勝して、賞金をいただくって寸法さ!」

張飛ガンダムの予想通り、翠と馬超ブルーデイスティニーが大食い大会に出場する気マンマンである。

やはり賞金が入るだけあって、意気込みも大きいようだ。

鈴々

「そうはいかないのだ!優勝は鈴々たちがいただくのだ!」

翠

「ほう、やっぱりお前らも優勝狙いか！相手がお前らなら不足はない！」

馬超ブルーデイスティニー

「俺たちの大食いっぷりを見て腰ぬかすなよ！！」

張飛ガンダム

「へっ、そりゃこっちのセリフだぜ！！」

翠、馬超ブルーデイスティニー

「勝負だ、張飛！！」

鈴々、張飛ガンダム

「望むところ（なのだ！！／だぜ！！）」

今ここに、宿命のライバル同士の火花が散った！！

ところ変わって、ここは大食い大会の会場。さまざまな勝負が繰り広げられたこの大会も、いよいよ決勝戦が始まるうとしていた。

司会進行の女の子

「さーあさあさあ！毎年恒例の大食い大会もいよいよ大詰め！決勝戦まで勝ち残った五人の勇者を紹介しましょう！まずははるばる西涼からやってきた馬超選手！！続いて、虎の髪飾りとイカツチ模様は伊達じゃない！猛虎もびっくりの食べっぷり、張飛選手！！」

勝ち残った五人のうち四人は鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超ブルーデイスティニー。そしてもうひとり…この決勝戦に勝ち上がった者

がいた。

司会進行の女の子

『最後に！！ちっちゃい体からは想像もできない脅威の食欲：“許
？”選手！！”』

それはピンクの髪をとがった形のおさげに結った小柄な少女、許緒
こと季衣であった。

許緒（真名・季衣）

「…ちっちゃいって言うな」

しかし、季衣は小柄なのを気にしているらしく、客席からも「ちっ
ちええー！！」「ちっちええなーおい！」と歓声（？）をあげられ
やや不服そうだった。

司会進行の女の子

『最後は、深すぎないほどの味が人気の銘菓「十万斤饅頭」を
制限時間内にどれだけ食べられるかを競ってもらいます！それでは
用意が出来たところで…勝負開始っ！！”』

始まりを告げる銅鑼が鳴り、五人同時に食べ始めた。一つ一つを確
実に食べていく翠、馬超ブルーディスティニー、容赦なく大量に頬
張る鈴々、張飛ガンダム、澄ました顔で口に放り込む季衣。全員が
優勝をかけて十万斤饅頭を食べつくしていった。

張飛ガンダム

（くっ…許？ってガキ、相変わらずすげえ勢いだ…！）

馬超ブルーディスティニー

（ここまでの勝負で誰よりも多く食べてるはずなのに、まだあんな底力が…！）

鈴々

（でも…鈴々たちだって負けられないのだ…！）

季衣にただならぬものを感じつつ少しでも数を稼ごうと、鈴々と張飛ガンダムも大量の十万金饅頭にがつく。

翠

（くそ、このままじゃあの三人に置いてかれる…）

このままでは三人に取り残されると、翠と馬超ブルーディスティニーも必死に食べていたが…

翠・馬超ブルーディスティニー

「うっ…！！！！？」

突然顔が青ざめてきた…どうやら流石に限界が近づいてきたようだ

馬超ブルーディスティニー

（まずい…そろそろ限界が来た…）

翠

（ああ…この大会で食べ来た料理が走馬灯のように目の前を…）

馬超ブルーディスティニー

（ここまでか…！俺たちはここまでなのか…！）

翠

（だがたとえ！…どぶの中でのたれ死にするとしても、あたしたちは前のめりに倒…れ……）

デー……ンッ……！！！！

そのまま翠と馬超ブルーディスティニーは前のめりに皿に顔を突っ伏し撃沈した。

張飛ガンダム

（馬超たちが脱落……！？）

鈴々

（ということは、あいつとの一騎打ち……！）「あ……？」

ここで一気に決着をつけようとする鈴々と張飛ガンダム。ふと鈴々が季衣の皿を見てみると…残り三個で手を止めているではないか！

鈴々

（残り三個で手が止まっているのだ。ここで鈴々たちが追い上げれば逆転なのだ……！）

張飛ガンダム

（このまま一気に蹴りをつけてやる……！）

必死に手に持つてる分をほおばる鈴々と張飛ガンダム。流石にこちらも限界が来ているようだが、なんとか震える手で残り三個を取ろうとする。

鈴々

（これを・・・これを食べれば・・・逆転なのだ！！）

張飛ガンダム

（俺達の・・・勝ちだ！！）

と、それまで目を閉じていた季衣が目を開けたかと思うと……

季衣

「……あゝ————（ザザ————）」「」

鈴々・張飛ガンダム

「「なん（なのだぁ／だつてえ）——————！！？？」」

なんと皿を持ちあげ、残り三個を一気に流し込んでしまったのだ。
そのまま全部食べ終えて、鈴々と張飛ガンダムに軽く笑うと……

季衣

「「おかわり」」

まさかのおかわりを注文した。

張飛ガンダム

「ま・・・負けた」

鈴々

「のだ……………」

流石の鈴々と張飛ガンダムも、これには完敗であった。

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』A（後書き）

Bパートへ続く

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』 B（前書き）

B
パートです

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』B

鈴々

「うう…賞金貰えなかったのだ…」

翠

「でもまあ、腹はいっぱいになったからよしとするか」

大食い大会が終わり、どこかさびしそうに帰っていく四人。と、ここで馬超ブルーディスティニーが気になったことを口にする。

馬超ブルーディスティニー

「あ、そう言えば関羽たちと趙雲たちはどうしたんだ？またどっかの店で働いてるのか？」

鈴々・張飛ガンダム

「…実は…」

一瞬戸惑う鈴々と張飛ガンダムだったが……やむを得ず自分たちの事情を打ち明けることにした。

翠

「ええっ！？趙雲たちとはぐれて関羽たちとも喧嘩別れした!？」

張飛ガンダム

「お、俺様たちは悪くねーよ！愛紗もヒゲも文句ばっか言うから…」

打ち明けた後も、決して自分たちは悪くないと言い張る鈴々と張飛ガンダム。その様子に翠と馬超ブルーディスティニーもどこか複雑

な面持ちになる……と。

季衣

「おーい!!」

と四人を呼ぶ声が聞こえ、現れたのは季衣だった。

馬超ブルーデイスティニー

「お前はさっきの……」

季衣

「ボクの名前は許？、字は仲康！全国を廻って大食い修行してるんだ！」

鈴々

「鈴々たちは張飛、字は翼徳なのだ！」

翠

「あたしたちは馬超、字は孟起。西涼の出だ」

季衣

「お前らなかなかやるじゃん!!大食いで僕にあそこまで挑む奴は初めてだよ!!」

鈴々

「鈴々たちもあんな化け物じみた大食いは初めて見たのだ……」

季衣

「いやあ、それほどでも」

鈴々

「別にほめてないのだ」

季衣

「え。そなの？ まあいいや。なあなあ！こうして出会ったのも何かの縁！親睦を深めるためにも、これから五人で何かウマイもんでも食べないか！？」

翠

「って、お前まだ食うつもりかよ……！？」

張飛ガンダム

「ホントに底なしの大食いだなあオイ……」

季衣

「あ、お金なら気にしなくていいよ。大食い大会の賞金で僕がおごるから」

馬超ブルーデイスティニー

「いやあそうじゃなくて……」

先ほど大食い大会が終わったばかりだというのに、今から更に何かを食べようと意気込む季衣に、微妙な表情になる四人……と。

少年

「何言ってるんだよ……！」

鈴々・張飛・翠・馬超・季衣

「……？」「……」

突然聞こえた声に一同が振り向くと、少年がガラの悪そうな三人組につっかかっていた。

少年

「借りた分はとっくに返したはずだろ!!」

チビ

「小僧、借金には利子つてもんがつくんだよ」

アニキ

「ほれ証文も…この通りだ」

少年

「くっ…よこせっ!!」

アニキ

「おっと危ねえ危ねえ…」

チビ

「おい、ちょっと痛い目見せてやれ」

会話を聞く限り、どうやら三人組はよくいる悪徳な借金取りらしい。筆頭の男が取り出した証文を少年が奪おうとするが、即座に図体がデカイ子分に抑えられてしまう。これは見過ごせない、一同は前が出る。

鈴々

「そこまでなのだ!!」

アニキ

「ああ？なんだオメエら」

季衣

「通りすがりの大食い修行者だ！（キリッ）」

翠

「…いや、それはお前だけだから…」

さりげなくドヤ顔で名乗る季衣（もちろん翠のツッコみつき）に対し、借金取りたちは横柄な態度をとる。

アニキ

「大食いだかアリクイだが知らねえが、首突っ込むとケガするぜ」

チビ

「そつだ！とつとと失せるチビどもが！」

張飛ガンダム

「ってチビって誰のことだよ！」

「チビ」と言われて黙ってられない張飛ガンダムに、デカイ子分が答える。

デク

「誰ってそりゃあ、オメエとオメエとオメエと……コレ」

……しかし、さりげなく最後に小さい子分を指差していた。

チビ

「…俺は入れなくていいんだよつ（怒）！…」

鈴々

「やーい！墓穴掘ったのだ！」

チビ

「うつせーよチビ（怒）！！」

季衣

「…チビ……」

と…それまで黙っていた季衣から得体の知れぬオーラが現われ始めた……

季衣

「またチビって言った……チビって言った……！！」

チビ

「い、言ったらなんだってんだよ？」

季衣

「ぶっ　　ぶす！！！！！！！！」

次の瞬間、季衣はどこからか巨大な鉄球『岩打無反魔』を取り出し、それを振りまわす！！

チビ

「どっからそんなもん出したー！！？」

季衣

「てえええええええええええい！！！！！」

鉄球は借金取りたちの目の前に落ち……その衝撃で近くの家屋が音を立てて崩れる。季衣の視線は、文字通り怒りに震えていた。

ア
ニ
キ

「ば……バケモンだぁー……!!!!」

鈴々

「明後日きやがれなのだー！！」

馬超ブルーディスティニー

「それを言うなら一昨日だろ。」

慌てて逃げ出した借金取りを小馬鹿にする鈴々であつた一同は少年の家へと向かつていた。先ほど助けてもらつたお礼をさせてほしいと、少年が直談判したからである。

少年

「あいつらホントにずるいんだ。借金は全部返したのに、いつの間にか変な証文を作って……まだ利子が残ってる。もしも返せないなら、姉ちゃんを借金の片に連れていく」って……」

馬超ブルーディスティニー

「なんと非道な……!!」

季衣

「くうー！！そうと知ってりやマジで潰してやったってのに！！」

張飛ガンダム

「全くだぜ!!」

借金取りたちの汚いやり口に憤る一同。道中でマントに身を包んだ二人組とすれ違うが、気にせず先へと進んだ。二人組が、ちらりと自分たちの方を向いたことにも気付かずに…

そして数分後、一同は少年の家へと到着した。

少年

「姉ちゃんただいまー!」

女性

「おかえりなさい…その方たちは?」

それまで薬を作っていた女性が顔をあげると、弟だけでなく見慣れぬ者たちがいた。

最初はキョトンとしたけれど、弟や一同から事情を聞いて納得する。

女性

「まあ、そうだったんですか…弟の危ないところを助けていただいたて、本当にありがとうございます」

少年

「姉ちゃん、この人たち旅の途中なんだって。まだ宿は決まっていって…ううから、お礼の代わりにうちに泊まってもらおうよ?」

女性

「そうね。そういうことです、是非…」

鈴々

「だったらお世話になるのだ！」

季衣

「じゃあ宿代にこれを…」

そう言つて季衣が大食い大会の賞金を取りですが、女性は断る。

女性

「いけません、そんなことをしていただいては…」

少年

「えー、なんでだよ？これがあつたら借金だつていくら返せるのに…」

女性

「何言つてるんですか！この方たちに泊まっていたくのは、あなたを助けてもらったお礼としてなのですよ？それなのにお金をいただいてしまつては意味がないでしょう？そもそも貴方が軽はずみなことをしなければ…」

少年に女性が説教する…よくある姉弟喧嘩の光景を見て、鈴々と張飛ガンダム顔はどこか複雑になっていた…

翠

「ん？どうした、お前ら？」

鈴々

「！な、なんでもないのだ！なんでも…」

張飛ガンダム

「そ、そうそう！なんでもねえよ…」

ふと翠が声をかけたのに対し、慌ててごまかすも…やはりどこか複雑なのは否めなかった。

その日の夜。

鈴々と張飛ガンダムと別れて左の道を進んだ愛紗と関羽ガンダムと朱里と孔明リ・ガズイは、森の中で野宿をしていた。未だ複雑な表情を浮かべる愛紗と関羽ガンダムに、朱里が声をかける。

朱里

「関羽さん…関羽さん」

愛紗・関羽ガンダム

「…！」

関羽ガンダム

「あ……な、なんですかな、孔明殿？」

朱里

「何を…考えてたんですか？」

愛紗

「いや、別に…何も…」

朱里

「嘘…本当は鈴々ちゃんと張飛さんのことを考えてたんじゃないですか？」

ごまかそうとする愛紗と関羽ガンダムだが、朱里に核心をつかれ言葉が出なくなる。と、次に口を開いたのは孔明リ・ガズイだった。

孔明リ・ガズイ

「関羽さん、やっぱり今から引き返しましょう！」

愛紗・関羽ガンダム

「「えっ？」」

孔明リ・ガズイ

「夜通し歩けば、どこかで鈴々さんたちに追いつけるかもしれないよ」

愛紗

「何をばかなことを…」

孔明リ・ガズイ

「でもこのままじゃ…！」

このままじゃもう会えないかもしれない…その孔明の言葉をさえぎるように愛紗と関羽ガンダムが口を開く。

愛紗

「孔明殿。もう夜も更けた…そろそろ寝た方がいい」

関羽ガンダム

「さよう…明日も早いですから」

そのまま横になる愛紗と関羽ガンダム…だが、二人の表情も未だ複雑なままだった。

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』 B（後書き）

Cパートへ続く

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいのこと』Cパート（前書き）

Cパートです

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』Cパート

翌朝、翠と馬超ブルーデISTIニーは泊めてもらってるお礼にと薪割りをしていた。一方屋根の上で寝転がってる鈴々と張飛ガンダムはというと…未だに愛紗と関羽ガンダムのことが頭から離れないようだ。

馬超ブルーデISTIニー

「こんなもんでいいか？」

女性

「ご苦労様です。ホントにすみません…こんなことまでしていただいて…」

翠

「いやあ…何もしないでいると飯がまずくなりますから／＼」

女性

「うふふ…」

少年

「姉ちゃん、ただいま」

と、季衣と一緒に食糧を集めに行った少年が戻ってきた。来てみれば、出かけた時は空だった籠の中にたくさんの山菜やきのこが詰まっているではないか。

女性

「まあ！こんなにたくさん…」

少年

「姉ちゃん、この人すごいんだ！初めて入った山なのに、山菜やきのこの場所もすぐにわかつちゃうんだ！」

季衣

「ふふーん、いかなる場所でも食材を見つけるのは大食い修行の基本だからな！」

馬超ブルーデイスティニー

「そ、そういうもんなのか…？」

ちよつと微妙な表情になる翠と馬超ブルーデイスティニー…と、鈴々と張飛ガンダムがいらないことに気づく。

翠

「そついや張飛達はどうした？一緒じゃなかったのか？」

季衣

「へ？俺らはてつきり馬超たちと一緒になのかと…」

どちらかと一緒だと三人が思っていた…次の瞬間！

張飛ガンダム

「テメエら何しにきやがった…！」

武器を携えとつさに屋根から下りてきた鈴々と張飛ガンダム。翠と馬超ブルーデイスティニーと季衣も来てみると…昨日の借金取られたちがいるではないか！

アニキ

「やっぱりここにいやがったか」

チビ

「昨日は世話になったなあ」

季衣

「なんだ？またぶちのめされにきたのか？言つとくけど今度は手加減しないぞ！」

アニキ

「おっと、今日の相手は俺たちじゃねえ……先生がた、おねげえしやす！」

そう言つて借金取りの筆頭が下がると……見慣れぬ二人組がいた。一人は紫の髪を束ねて後ろで止め、酒瓶片手にぐいっと酒を飲んでいた上半身サラシと上着だけの女性。もう一人は蒼い体に緑の鎧、そして蝙蝠の翼を思わせる黒いマントをはおった侠。二人の張遼と霞と張遼ゲルググである。両者がその手に携える得物は、明らかにそこいらのナマクラとは違う……一同を蹴散らすために雇った猛者だというのは一目でわかった。

張遼（真名・霞）

「なんや、ごつつ強い奴らと撃ちあわせてくれるゆうから小遣い銭で雇われたつてのに……相手はガキかいな」

鈴々

「ガキとはなんなのだガキとは！」

季衣

「そーだ！張飛たちはともかく僕はガキじゃないぞ！！」

鈴々

「って、どういう意味なのだ（怒）！！？」

張飛ガンダム

「つかお前も十分ガキだろーが（怒）！！？」

馬超ブルーデイスティニー

「今は仲間割れしてる場合じゃないだろ！！」

さりげなく馬鹿にされ怒る鈴々と張飛ガンダムに突っ込む馬超ブルーデイスティニー。一方で霞は張遼ゲルググに軽く叱られていた。

張遼ゲルググ

「霞、失礼だろう。いかなる者が相手だろうと、それ相応の礼儀を持って挑むのが常識だ」

霞

「はっはっは！ええやないの、あの子ら結構おもしろいし…楽しめればそれで十分や」

張遼ゲルググ

「全く…既に前金を受け取ってる以上、やらねばならぬのは事実だが…」

霞

「まだ残っているから大事に持っておとしなや！！」

会話を聞く限り張遼ゲルググの方はあまりこの勝負を快く思ってい

ないようだ（おそらく雇い主たちの汚い部分を見抜いているのだろう）が、相棒が進んで決めたことにこれ以上の口出しはしないらしく、その手に携えた武器を構える。

霞も再び一口飲んだ後、酒瓶を子分に預けてその手に携えた偃月刀を構え 形は違えど、愛紗と同じ青龍偃月刀であるのは明白だ 名乗りをあげる。

霞

「うちらん名は張遼！！昨日までは旅から旅への風来坊で、今日は出銭稼ぎの用心棒や。アンタらに恨みはないねんけど、ちよつくら痛い目見てもらうでえ」

張遼ゲルゲグ

「貴公らがかなりの腕前なのは承知の上。不本意ではあるが、成敗させていただく」

鈴々

「望むところなのだ！！」

張飛ガンダム

「返り討ちにしてやらあ！！」

名乗りに対し、絶対に負けないと言わんばかりの意気込みを見せる鈴々と張飛ガンダム。

その気迫を感じ目つきが鋭くなる張遼ゲルゲグに対し、霞はノリノリだ。

霞

「ええでええで、そう来なくっちゃおもろない……一人ひとり相手すんのは面倒や五人全員でかかって来い！！」

季衣

「てえええええええええええい！！！！！」

ノリノリな霞の挑発の直後に、季衣が鉄球を振りまわす！！

張遼ゲルゲグ

「こ・こんなもの・・いったいどこから・・・」

と困惑するが、直後に斬りかかる鈴々と張飛ガンダムの一撃を防ぐ。その後も五人の攻撃をよけては攻めよけては攻めを繰り返し、季衣の鉄球を宙返りでかわして距離をとる。

霞

「ほー、ええなあ！ガキかと思うとつたけどお前ら、十分強いやん！（酒代目当てで引き受けた仕事やけど、久々に楽しめそうやわ…！！）」

張遼ゲルゲグ

「五人とも見事な腕だ……敵として出会ったのが実に惜しいくらいにな（…また霞の悪い癖が出たと思ったが、これは本気を出せそうだ…！！）」

余裕な表情を見せる霞と張遼ゲルゲグ（霞は特に）に対し、五人は若干困惑している。

鈴々

「な、なんなのだこいつら…！」

季衣

「五人なのに…全然疲れてない…!!」

翠

「しかもあつちの奴、戦いを楽しんでる…!」

そう真つ当な武人として戦いに挑んでいる張遼ゲルググとは違い、霞の方は明らかに本気で戦いを楽しんでいるのだ。強い奴と撃ちあえればそれでいい…まさしく戦闘狂のごとく!

女性

「きゃーっ!!」

鈴々・張飛ガンダム・翠・馬超ブルーディスティニー・季衣

「くくくく!!」

霞・張遼ゲルググ

「くくく?」

しかし、そこに水を差す輩がいた…先ほどの季衣の鉄球攻撃にビビってひいたはずの借金取りたちが、姉弟を人質に取っていたのだ!

アニキ

「へへへ…勝負あつたなあ」

馬超ブルーディスティニー

「くっ…卑怯な!!」

チビ

「おい、武器を捨てる。さもないとこのガキの命はねえぞ」

少年に短剣を向けながら脅す小柄な子分……が、思わぬところから反論の声が出た。

霞

「おい！！何のつもりや！」

チビ

「何のつもり、って??」

霞

「これからおもしろなつてくるところに水差しおって、どういっつもりかて聞いとんや！」

張遼ゲルゲグ

「全くだ！そんなマネをするなど…聞いてないぞ！」

どうやら霞と張遼ゲルゲグは、人質を取る行為そのものに不服でないようだ。しかし……

アニキ

「先生方、アンタらにや悪いがこっちにはこっちの都合ってもんがあるんだよ。さあ、早く武器を…」

更に脅迫しようとした、その時だった

ピューー（口笛）……………プッ！ビシッ！！

チビ

「いつてえ！！！?」

突然どこからか枝が飛んできて、小柄な子分の短剣を弾き飛ばしたのだ！一同が驚く間もなく、先日通りすがったマントの二人組が現われ子分たちをふっ飛ばし、姉弟を屋根の上へ避難させた！

アニキ

「な、なんだデメエら！？」

チビ

「顔見せやがれー！！」

突然現われた二人組に邪魔され憤る借金取りたち。そして彼らに対し二人組は…

????・????2

「「乱世を正すため、地上に舞い降りた二匹の蝶……」」

マントを勢いよく取って、その姿を見せる！！

華蝶仮面（以下1号）

「美と正義の使者・華蝶仮面！！推参！！」

華蝶仮面V2（以下V2）

「同じく華蝶仮面・ブイツ！ツアアアアア！！」

そして二人して勇ましく（侠の方はポーズまで決めて）名乗りを上げた！！！！

アニキ

「か…;」

翠

「蝶仮面って…おい…;」

しかしはたから見れば蝶の仮面をつけたどっかの誰かさん×2ではないため、一同はポカーン状態である。

1号

「鈴々、張飛。馬超たちも…久しぶりだな」

季衣

「…何？あいつらお前らの知り合い…？」

馬超ブルーディスティニー

「いやあその…なんというか…;」

普通に声をかけられてるため、何とも言えない気持ちになる翠と馬超ブルーディスティニー。と、鈴々と張飛ガンダムからブーイングがかかる。

張飛ガンダム

「あんなヘンテコな奴らなんか知らねーよ…！」

鈴々

「おい！！鈴々の名前どこで聞いたか知らないけど、お前らみたいな奴らに知り合い扱いされたら迷惑なのだ…！」

「ヘンテコ」だの「迷惑」だの言われ、1号からは明らかに怒りのオーラが出ていた。

V 2

「はははは……」

馬超ブルーディスティニー

（怒ってる……）

翠

（一人は明らかに怒っているな……）

アニキ

「おい！！華蝶だかガチョーンだか知らねえが、降りてきやがれ！！」

V 2

「降りてもいいが、そうするとますます不利になるのはそちらだぞ？いいのか？」

アニキ

「え？？」

V 2の言葉にキョトンとしながら借金取りたちが後ろを向くと……

……霞と張遼ゲルググがめちやくちや怒っていた！！

霞

「人質取るなんてド汚いマネして……よくもうちの楽しみを台無しにしてくれよったなあ（怒）」

張遼ゲルググ

「最初から貴様らのような輩につくのは反対だったが……そこまで腐

れてるとは思わなかったぞ（怒）」

季衣

「今度こそペツチャンコにしてやるーっ！！！！！」

更に季衣が勢いよく鉄球を振りまわす！！怯える借金取り……が、張遼ゲルゲグがマント『鳳凰天舞』を盾に変形させて防いだ。

季衣

「なんで邪魔するんだよ！？」

霞

「金で雇われた身とはいえ、こちらはこいつらの身内や……身内の不始末は身内で蹴りつけなあかん。せやろ、張遼？」

張遼ゲルゲグ

「ああ……おい。借金の証文を出せ」

アニキ

「は……はい……」

張遼ゲルゲグ

「しっかり持っておくようにするんだぞ」

霞に促されるように、証文を出すよう告げる張遼ゲルゲグ。やがて頭目が証文を取りだすと、しっかり持って置くように忠告し……

張遼ゲルゲグ

「蒼紋猛瀑布！！！！！！！」

借金取りたちを巻き込むか巻き込まないかのところまで、必殺技を発動する！

当然ながら、証文は跡形もなくバラバラになった。かなりギリギリで食い止めてるところから見て、ある意味本気で斬るつもりだったのがうかがえる。

霞

「ええか、今後一切あの姉弟に近づくんやないで…わかったか!？」

アニキ・チビ・デブ

「…はっ、はいっ……………!!!!」

霞

「ほなら、とつとと行けっ!!」

アニキ・チビ・デブ

「…失礼しましたっ……………!!!!」

加えて霞の釘差しにビビりながら、借金取りたちは逃げて行った。落としていった酒瓶が空になったのを見て若干しよげながら、霞はその場を去ろうとする。

霞

「は…あ…ほんなら、うちらも消えるとしよか…」

馬超ブルーデイスティニー

「お前らはこれからどうするんだ？」

張遼ゲルグゲ

「さあな。風の向くまま気の向くまま…風来坊に逆戻りするだけだ」

そう言い残し、張遼も霞ゲルググの後に続く……こうして霞と張遼もまた、どこかへと去っていった。

張飛ガンダム

「なんか変わった奴らだったなあ」

季衣

「変わった奴と言えば、あの妙な仮面二人も……」

思い出したように季衣が顔を上げると……屋根の上には姉弟だけで、華蝶仮面二人組の姿はなかった。

鈴々

「うっん。最初から最後まで怪しい奴なのだ」

張飛ガンダム

「だなあ。なんだったんだあいつら」

のんきにそんなことを呟く鈴々と張飛ガンダムに、翠と馬超ブルーデイスティニーは「うわぁ」と言いたげな顔になってしまった。

翠・馬超ブルーデイスティニー

（（張飛たちの奴、ホントに気づいてないんだ……!!））

????

「……かっこいいと思うんだけどなあ……」

????2

「……なあ、どうしてもあれを言わなきゃ駄目なのか……?」

???

「いいだろう。やはりあれくらいの口上がないと面白くないしな」

????2

「恥ずかしいのは私の方なんだが……」

その日の夕方：湖のほとりで蝶の仮面を片手に悩ましい顔をする少女と侠がいたとかいなかったとか。

翌日、姉弟に別れを告げて五人は家を出た。

翠

「ところで許？、お前、この先どうするんだ？」

季衣

「とりあえず？陽かな。そこに行けばもっと大きな規模の大食い大会があるだろうし」

馬超ブルーディスティニー

「そっか、じゃあこの先でお別れか…張飛、お前らは？」

鈴々・張飛ガンダム

「うん……」

翠

「もし良かったらあたしたちと一緒に来ないか？どうせ二人だけで行くあてもないのなら……いや、今のは取り消しだ」

鈴々・張飛・季衣

「「「え?」「」」

一緒に同行しないかと話を持ちかける翠……だったが、突然取りやめる。そのまま馬超ブルーディステイナーも指差した方を見ると……

鈴々

「愛紗ーっ!」

張飛ガンダム

「ヒゲーっ!」

そう……道の先には、二日前に喧嘩別れした愛紗と関羽ガンダムがいたのだ。

鈴々と張飛ガンダムも思わず駆けより、飛びつく。

愛紗

「こ、こら!!なんだ急に!」

関羽ガンダム

「お、おい……!!やめんか……!!」

鈴々

「愛紗も関羽も……なんでここにいるのだ?」

張飛ガンダム

「そうだが……なんでここに?」

確かに気になることではある。別の道を言ったはずの義姉と義兄が、いつの間にかここに来ているとは思わなかったから。

愛紗

「昨日の朝引き返して、夕方街について…宿を探したけど二人がみつからなくて…したら孔明殿たちが、街の出口近くの街道で待っていていれば会えるかもしれないと…」

鈴々

「孔明たちはどうしたのだ？」

関羽ガンダム

「もしかしたらお前たちが引き返しているかもしれないと、街の反対側で待っている」

その答えを聞いた後…鈴々と張飛はある質問をした。

鈴々

「……なんで、愛紗と関羽は引き返しにきたのだ？」

関羽ガンダム

「なんでって、それは…」

愛紗

「お、お前たちのことを探すためだ…」

張飛ガンダム

「だから…なんで探しに来たんだよ？なんでそのまま孔明たちと一緒に行かなかったんだ？」

更に質問をされ、返答しにくい愛紗と関羽ガンダムだったが……

愛紗、関羽ガンダム

「あーもうめんどくさいっ……!!」

愛紗

「いいか二人とも！私たちは姉と兄で、お前たちは妹と弟なんだ！」

関羽ガンダム

「兄妹なのだから、ずっと一緒だ！いいな！」

鈴々・張飛ガンダム

「（パアアッ）……うん！（おう！）」

その答えがうれしくて、鈴々と張飛ガンダムも笑顔でうなづいた。その反応に、愛紗と関羽ガンダムも自然と笑みがこぼれる。

季衣

「あの黒髪の女とヒゲの侠誰なんだ？張飛たちの知り合いか？」

翠

「関羽は…あの者たちは張飛たちの姉と兄だ」

馬超ブルーディスティニー

「血は繋がってないが、本当に仲のいい兄妹なんだ」

季衣

「へえ……」

遠くから光景を見ていた季衣に、翠と馬超ブルーディスティニーが説明する。四兄妹の仲睦まじい光景は、確かに四人が絆で結ばれて

いることを証明していた。

第7話『張飛、鈴々、関羽と愛紗と仲たがいすること』Cパート（後書き）

次回予告

霞

「ぷっはー！！やっぱ本編終わった後の一杯は最高やな！！」

張遼ゲルゲグ

「霞、飲んでないで予告をやれ！！！！」

霞

「そっやった。次回 第7話『張飛、鈴々・・・』」

季衣

「おい！！それは前回のだろう！！」

1号

「次回！！」

V2

「第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』！！」

1号

「今回の予告はこの華蝶仮面達がいただいた！！」

V2

「ではさらば！！！！」

季衣

「なんなんだ・・・あいつら？」

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』A（前書き）

最新作の小説なのですが、アイデアが浮かばなくて、泣く泣く削除しました。すみませんでした。

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』A

関羽ガンダム達と合流した鈴々と張飛ガンダムは旅を続けていた

しかし、彼らが向かっている荊州では恐るべき野望が行われようとしていた

その野望を打ち砕くのは……

孫尚香ガーベラ

「あたし達」

孫尚香（真名・小蓮）

「二人の孫尚香よ」

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』

旅を続けている四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは山道を歩いていた。

鈴々

「うわぁー、いいお天気なのだ!!」

張飛ガンダム

「ああ、」

関羽ガンダム

「そうだな」

愛紗

「こんな晴れた日には何かいいことがあるかもしれない」

とその時

「???、???2

」「きゃあー!」

愛紗、関羽ガンダム

」「!!!!」

突然の悲鳴に驚く四兄妹と朱里と孔明リ・ガズィ。その視線の先には茶店でピンク色の髪の少女とピンクの鎧を着た三璃紗の少女（二人の孫尚香こと小蓮と孫尚香ガーベラ）が髭を生やした男に捕まっているのであった。

小蓮

「なにすんのよ!」

孫尚香ガーベラ

「離しなさいよ!」

その様子を見た愛紗と関羽ガンダムは男の前に立った。その後鈴々と張飛ガンダムと朱里と孔明リ・ガズィが現れた。

愛紗

「そこまでだ!! かよわき物を虐げんとする悪党め!!」

関羽ガンダム

「この場で成敗してくれる!」

男

「悪党つて、おらはただ・・・」

関羽ガンダム

「問答無用!!」

愛紗

「覚悟!!」

鈴々

「うりやりやりやゝ!!!!」

張飛ガンダム

「うおりやああああああ!!!!」

男

「ぎゃあああああああ!!!!」

そのまま、鈴々と張飛ガンダムと共に男を殴り飛ばしてしまった。
その隙を見た小蓮と孫尚香ガーベラは逃げ出したのであった。

そして、数分後

関羽ガンダム

「何、食い逃げですと!?!」

店主

「んだあ、さっきの娘っ子ら、飲み食いした後、金払わずに逃げようとしたから、それで・・・」

愛紗

「ああ、いやぁ・・・そうとは知らず、とんだ勘違いを・・・」

すると店主が愛紗関羽ガンダムに手を出した

店主

「代金、食い逃げの・・・」

関羽ガンダム

「あ、ああ。そっか・・・って何で拙者達が!？」

店主

「おめえらのせいで、あの娘っ子らが逃げちまったんだから。弁償してもらわんと・・・」

愛紗

「うつ・・・」

関羽ガンダム

「たしかに・・・」

結局逃げた小蓮と孫尚香ガーベラの食い逃げ代金を払うはめになった。

愛紗

「とほほ・・・とんだ災難だ・・・」

関羽ガンダム

「まったくですぞ・・・」

その後、愛紗と関羽ガンダムは落ち込んでいた。そんな二人を鈴々と張飛ガンダム朱里と孔明リ・ガズイが励ます

朱里

「あの元気出してください」

孔明リ・ガズイ

「過ぎたことですから」

張飛ガンダム

「孔明達の言うとおりだぜ」

鈴々

「そうなのだ!!」

すると・・

小蓮

「ちよつと、待ちなさいよ!!」

すると後ろから六人を呼びとめる声が聞こえてきた。後ろを振り向くと先ほど食い逃げした小蓮と孫尚香ガーベラの姿が見えた。それを見た愛紗と関羽ガンダムは二人に怒り出した

関羽ガンダム

「なっ!!??お主達は先ほどの食い逃げ娘!!」

愛紗

「今までどこへいったのだ!!??お主達のせいで私達は!!」

孫尚香ガーベラ

「あんた達、なかなか見込みがあるわね。気に入ったわ!!」

小蓮

「シャオと尚香の家来にしてあげる」

愛紗

「はあ?・・・」

突然、小蓮と孫尚香ガーベラが愛紗達を家来にする宣言したので疑問に思い恥じる

愛紗

「あの・・・シャオと尚香とやら。全然、話が見えないのだが・・・」

「

小蓮

「ちよつと、初対面なのにシャオだなんてなれなれしく呼ばないでよね!!」

孫尚香ガーベラ

「そうよ!!」

愛紗

「あ、いや。すまん」

朱里

「自分でシャオって言ったのに・・・」

孔明リ・ガズイ

「おそらく真名かと・・・」

孫尚香ガーベラ

「うるさいわよ。そのちびっこその三とその四」

呆れて喋る朱里と孔明リ・ガズイに孫尚香ガーベラは怒鳴りつける。
それをみた鈴々と張飛ガンダムは笑い出す

鈴々

「ぷぷぷ。孔明、ちびっこ扱いなのだ」

張飛ガンダム

「まったくだせえの」

孔明リ・ガズイ

「あの私達がちびっこその三とその四なら、その一とその二は、たぶん、鈴々さんと張飛さんじゃ・・・」

鈴々

「誰がちびっこなのだ（怒）！！！」

張飛ガンダム

「どういうことだコラ（怒）！！！」

朱里

「はわわ、私が言ったんじゃないですう！？」

孔明リ・ガズイが言ったにも関わらず、ちびっこ呼ばわりされた鈴々と張飛ガンダムが朱里に怒鳴りつける。すると小蓮と孫尚香ガーベラが・・・

小蓮

「と・に・か・く。あんだ達はこの江東に覇を唱える孫家の末娘、二人の孫尚香の家来になるのよ」

孫尚香ガーベラ

「良いわね？」

愛紗・関羽ガンダム、鈴々、張飛ガンダム、朱里、孔明リ・ガズイ
「『『『『『ええっ！！？』『』『』『』」

二人の発言に驚く、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは驚きを隠せなかった。

その後、八人は荊州の町にたどり着いた。

小蓮

「さーて、晩御飯はどこがいいかしらね、尚香」

孫尚香ガーベラ

「そーね、いろいろと迷っちゃうわね」

小蓮と孫尚香ガーベラは走り出した。そして、一軒の料理屋の前に立った。

小蓮

「ここがいわ、ここにしましょう」

愛紗

「飯は宿を決めてからだ」

小蓮

「えっー、いいじゃない！！シャオ、おなかすいた！！」

孫尚香ガーベラ

「あたしもよ！！ねえー、御飯！！」

宿を探す愛紗達に文句を言う小蓮と孫尚香ガーベラに関羽ガンダムが効いた

関羽ガンダム

「そもそも、貴公らは飯を食う金はあるのか？」

孫尚香ガーベラ

「何言っているのよ？そんなの家来のおんた達が払うにきまっているでしょー！！」

愛紗

「っ！？おい！！」

小蓮

「てゆかー、お金があつたら茶店で食い逃げなんかしないんじゃない？」

愛紗

「なるほど・・・」

朱里

「そこ、感心する所じゃないと思いますけど・・・」

納得する愛紗に朱里が突っ込む。すると関羽ガンダムが再び聞いた

関羽ガンダム

「しかし、それなら今までどうしていたのだ？まさかずっと一文無しで旅に出ていたわけではあるまい？」

孫尚香ガーベラ

「もちろん、それなりの路銀は持っていたわ。前の町までは・・・」

小蓮

「でもそこで・・・これ買っちゃって」

二人は頭についていた髪留めをとった。それは宝石が埋め込まれていたもので会った。

愛紗

「って、路銀全部はたいて、それらを買ったのか！？」

小蓮

「だってほしかったんだもん！！見てよ、これ。キラキラして綺麗でしょう。お店で見たとき、これだあって一目惚れしちゃったのよね。ああ、こうやって見てると、何かうっとりしちゃう」

孫尚香ガーベラ

「そうよね！！うっとりしちゃうわ！！」

髪留めを見て、うっとりする小蓮と孫尚香ガーベラを見てあきれる四兄妹と朱里と孔明リ・ガズィ。すると・・・

カラス

「カァー」

小蓮

「きゃあ！！？何するのよ！！」

孫尚香ガーベラ

「この泥棒！！」

カラスが突然、小蓮と孫尚香ガーベラの持っていた髪留めを奪い取ってしまった。小蓮と孫尚香ガーベラはカラスを追いかけ始めた。四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイも仕方なく追いかけ始めた、そしてカラスは上空へと飛んでいた

小蓮

「あ！？　こらあ、返せえーっ！！」

孫尚香ガーベラ

「あたしに任せて、必殺必中・華天楼！！」

関羽ガンダム

「辞めぬか！！他の人を巻き込んでしまう！！！！」

孫尚香ガーベラが必殺技を出そうとしているところを関羽ガンダムが必死に止めた。すると宿の窓から紫の髪の女性と龍を模した鎧を着た侠が弓を構えた。愛紗と関羽ガンダムはそれに気付いた

小蓮

「ちよつと、何よ！？」

ビュッ！！

そして、二人は矢をカラスに向かって放った。しかし、二つともカラスに当たることはなかった

愛紗

（外したか・・・？）

関羽ガンダム

（いや・・・）

すると、カラスが突然、落ちてきた。すぐ様に鈴々がカラスを捕まえる

鈴々

「すごい！！あたったのだ！！」

張飛ガンダム

「てつきり外したかと思っただぜ！！」

その後に小蓮と孫尚香ガーベラは髪留めを受け止める。壊れてないことに安心したその時・・・

カラス

「カー、カー！！」

小蓮

「ちよっ・・・痛たたたた・・・」

孫尚香ガーベラ

「やめなさいよね！！」

カラスが眼を覚まし、小蓮と孫尚香ガーベラに八つ当たりを始めた。
そして、そのまま飛び去った

孫尚香ガーベラ

「何、するのよ!! この馬鹿!!」

張飛ガンダム

「いつたい、どうなっているんだ?」

関羽ガンダム

「おそらく、矢が頭をかすめた時にできた空気の波に当たって、気を失ったのだろう?」

孔明リ・ガズイ

「しかし、そんなことができるでしょうか?」

愛紗

「出来るも何も。今、目の前で見た通りだ」

朱里

「偶然……じゃないんですか。狙いが逸れて、それで偶々」

愛紗

「そうかもしれない。だが…もし狙ってやっていたのならば、まさに神業」

愛紗と関羽ガンダムが目線を向けたが、そこにはすでに女性と侠の姿はなかった

愛紗、関羽ガンダム

（（恐ろしいほどの腕前だ））

その後、八人は宿を決めた後、先ほどの店で夕食をとっていた

鈴々

「おいしかったのだ!!」

小蓮

「でしょ？一目見たときからここはいけるとピンと来たからね」

孫尚香ガーベラ

「あたし達の目に狂いはなかったということよ」

張飛ガンダム

「へん!!俺様達は腹減っていればなんでもうまい体質だからお前らが威張ることはねえぞ!!」

孔明リ・ガズイ

「張飛さん、それって自慢にならないのでは……」

すると愛紗と関羽ガンダムが小蓮と孫尚香ガーベラに聞き出した

関羽ガンダム

「ところで尚香殿、貴公らが孫家の姫君だし言うのは本当なのですか？」

孫尚香ガーベラ

「もちろん!!」

愛紗

「別に疑うわけではないが、何か証明するものはないのか？」

小蓮

「証明もなにも、こうして本人が言ってるんだから間違いないわ」

そして、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは離れたところで話し合う

愛紗

「と、言っているが。どう思う？」

鈴々

「お姫様がお臍出して、一人でウロウロしてるなんてどう考えても可笑しいのだ」

張飛ガンダム

「それにどうどうとしすぎだしよー!!」

朱里

「そうですね。最近、陽気ですし、もしかしたら…」

孔明リ・ガズイ

「最近、暑くなってきたからそういう人が増えているのですよ」

ヒソヒソと話している六人に小蓮と孫尚香ガーベラは立ち上がって

孫尚香ガーベラ

「そこ!!聞こえるようにヒソヒソと言ってんじゃないわよ!!」

関羽ガンダム

「では、なぜ姫君達が供も連れずにこのようなところにいるのです？」

孫尚香ガーベラ

「うつ・・・それは・・・いろいろとあるのよ・・・」

小蓮

「そうよ・・・ね、念のため言っとくけど。堅苦しいお城暮らしにうんざりして、家出当然に飛び出して来たあ、とかじゃ無いんだからねええええッ!!」

二人の言い訳にあきれた四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは静かに席に戻った

小蓮

「何よ、その眼は・・・」

すると・・・

女将

「おやまあ。綺麗に平らげて暮れたもんだねえお茶のお代わりどうだい？」

愛紗

「あ、申し訳ない」

関羽ガンダム

「かたじけのうございます」

女将がお茶を注ぐと・・・

女将

「あんた達、旅の人みたいだけど。やっぱり明日の行列を見に来たのかい？」

愛紗

「は？ 行列？」

女将

「おや、違ったのかい。あたしゃ、てつきり……」

関羽ガンダム

「その行列とはいったいなんなのですか？」

女将

「実はね、ここの領主様である劉表様の姫さんに、隣の領主様ん所から三番目の息子が婿入りするんだけど。明日の昼過ぎ、その行列がこの前を通りを通るのさあ」

愛紗

「ほお」

女将

「噂によると、何でも大層豪華な行列のうえ。婿入りしてくる三番目の息子ってのが、とびっきりの美形らしいってんで。これはもう一目拝んとかなきやあって、近くの村からも人が集まってんだよ」

愛紗

「そうですか」

関羽ガンダム

「何にしても結婚はめでたいことですな。」

しかし、女将の顔が暗くなってきた

女将

「所が…近頃、妙な噂があつてね」

関羽ガンダム

「噂？」

愛紗

「と言うと？」

愛紗と関羽ガンダムが聞き返すと、女将は周りを見てから近づき、小声で話し出した

女将

「ここだけの話なんだけどね。領主様の身内だか側近だかで、今度の結婚に反対してる人がいるらしくて。で、その一味が婿入りしてくる息子の暗殺を企ててるんじゃないかって言う…」

愛紗

「それはまた物騒な」

女将

「本当だよ。せつかくの晴れの日だったのに、やんなっちゃう」

すると朱里と孔明リ・ガズイが・・・

朱里

「けど、これで理由が分かりましたね」

関羽ガンダム

「理由？」

孔明リ・ガズィ

「ほら。この町へ入るとき、関所で妙に調べられたじゃないですか」

朱里

「あれはきつと。怪しい者が入って来ないように警戒してたんですよ」

愛紗

「ならば、明日は領主も十分な警護を固めている筈だな」

孔明リ・ガズィ

「はい」

関羽ガンダム

「なに。事前に漏れた隠謀が成功するなど、早々ないものですぞ」

女将

「そうだと良いんだけど。とにかく。殺したり殺されたりは、もううんざり。早く穏やかな世の中になってくれないもんかね」

そう言つて、仕事に戻る女将。愛紗と関羽ガンダムは、女将の言葉に、やりきれない哀しみを感じていた

そして、離れた席では……

店員

「へいお待ち！ 特製ラーメン、ニンニク、チャーシュー抜きのみ
ンマ大盛りね」

そこにはマントを被った少女と侠が座っていた。そして、ラーメン
を見ると少女はよだれを流していた

その頃、荊州の領主である劉表ガンダム（白と黒の鎧を着た侠）
は悩んでいた

劉表ガンダム

「困ったものだ・・・どうすれば・・・このままではワシの娘婿殿
が・・・」

家臣

「劉表様・・・ここは延期をすべきでは・・・」

劉表ガンダム

「いや・・・このままではこの国に不信感を与えてしまう。それに
怪しいと思ったら・・・蔡瑁と黄祖じゃ。そ奴らを用意深く見ていれ
ば大丈夫じゃ」

そんな劉表ガンダムの様子を見ていた者たちがいたのであった。

翌日

四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイと小蓮と孫尚香ガーベラは街を歩い
ていた

小蓮、孫尚香ガーベラ

「ふあああああ」

小蓮

「まったくなんで二人部屋で八人で押し込めらなきゃならないのよ」

孫尚香ガーベラ

「そうよ。おかげで寝不足じゃない」

鈴々

「おなか丸出しでいびきかいていたのによく言っただけ!」

張飛ガンダム

「まったくだぜ!」

小蓮

「ちょっといい加減なことを言わないでよ!」

孫尚香ガーベラ

「あたし達がいびきなんてかくわけないでしょ!」

鈴々

「いや、かいていたのだ!」

朱里

「はわわ、喧嘩はだめですよ。」

喧嘩なりそんな鈴々と張飛ガンダムと小蓮と孫尚香ガーベラを朱里と孔明・ガズィは止めた

愛紗

「こら、こんなところでグズグズしないで早く来ぬか・・・」

愛紗が注意すると、太陽が出てきた。すると、愛紗と関羽ガンダム
の眼には女性と侠が矢を放った宿が見えた。そして、先日の女将の
言葉を思い出した

女将

『明日の昼過ぎ、その行列がこの前を通りを通るのさあ』

愛紗

『もし狙ってやっていたのならば、まさに神業』

関羽ガンダム

『恐るべき簿の腕前だ』

そして、何か不吉な予感を感じた愛紗と関羽ガンダムは先ほどの宿
へと向かった

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』A（後書き）

Bパートへ続く

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』B（前書き）

B
パートです

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』B

その頃宿では紫の髪的女性と龍を模した鎧を着た侠の下に宿主がやってきた

女性

「私達に客？」

主人

「はい、昨日の例をしたいと……………」

白い鎧の侠

「昨日の例じゃと？」

紫の髪的女性と龍を模した鎧を着た侠、二人の黄忠こと紫苑と黄忠ガンダムの下にやってきたのは愛紗と関羽ガンダムであった。

黄忠ガンダム

「そうか、お主らが昨日の……………」

愛紗

「私達は関羽と申します」

関羽ガンダム

「先日は、連れの者が世話になりました」

黄忠（真名・紫苑）

「そんな。礼を言われることは何も、根がお節介な者ですから。つい余計な事をしてしまって、申し遅れましたが、私は黄忠、字は漢

升と申します」

黄忠ガンダム

「ワシも彼女と同じ黄忠じゃ」

紫苑

「すみません、今、お茶を」

紫苑がお茶を入れようとすると、愛紗と関羽ガンダムが待ったをかける……

愛紗

「それにはおよびません、いい天気だ」

関羽ガンダム

「そうだな。大通りのほうまでよく見える」

紫苑、黄忠ガンダム

「！！！」

窓を開けて、大通りを見た。そして、その一言に紫苑と黄忠ガンダムが驚く。

愛紗

「とは言え。ここからだ、大通りを通る人の頭は、精々豆粒ほどだ。しかも、動いているとあつては、生半可な弓の腕では、まず当たらないだろう。警護の連中も、その可能性を考えなかったとしても……責めは出来ない」

紫苑

「関羽さん、貴方達は何を言いたいのかしら？」

関羽ガンダム

「なに、もし弓の神……曲張に匹敵する程の名手がいたら、不可能を可能にすることが出来るかも知れないと……」

黄忠ガンダム

「くっ……」

紫苑と黄忠ガンダムは堰月刀を手取るが、壁に飛かかってしまい、愛紗と関羽ガンダムに弓を突き付けられてしまった。

関羽ガンダム

「動くな！！どうやら女性のほうは長物の扱いは弓ほどうまくいかないようだ」

愛紗

「鈴々、張飛、入ってきていいぞ」

愛紗がそう言うのと鈴々と張飛ガンダムと朱里と孔明リ・ガズィと小蓮と孫尚香ガーベラが入ってきた。紫苑と黄忠ガンダムは観念したか……わけを話した

紫苑

「数年前に主人を亡くした私は黄忠さんと幼い娘の璃々と三人、この街から離れた村で静かに暮らしていたのですが……」

黄忠ガンダム

「ある日、隣町に用足しに戻って見ると。璃々が居なくなっていて、代わりに一通の置き手紙が」

『娘は預かっている。こちらの指示に従えば無傷で返す。そうであれば、命の保証はしない 蔡瑁』

黄忠ガンダム

「手紙を出したのは蔡瑁という劉表様に仕える提督じゃ」

関羽ガンダム

「なんと卑劣な!!」

張飛ガンダム

「許せねえぜ!!」

紫苑

「そして・・・待ち合わせの場所には・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

待ち合わせの場所には蔡瑁アツグガイと仮面をかぶった男（その腰には羽のついた剣と龍を模した赤い刀があった）と紫苑と黄忠ガンダムの姿があった

蔡瑁アツグガイ

「よく来たな、黄忠よ。お前達には劉表の娘婿を殺してもらっぞ」

紫苑

「娘は・・・娘は無事なんでしょうね？」

????

「全てはお前達次第だ」

黄忠ガンダム

「ワシらに何をしようというのだ……」

蔡瑁アツゲガイ

「ふふふふ……先も言った通り劉表の娘婿を殺してもらっぞ」

???

「ふっ……」

……

愛紗

「成る程。それで、止む無く暗殺を請け負ったのか」

紫苑

「はい、どんな理由であれ、人の命を影に隠れて奪うような行いが許されるとは思いません……でも、でも娘の鈴々は、私の全て何です！！ 璃々を救うためには……他にどうしようもなくて」

黄忠ガンダム

「ワシにとつても璃々は孫娘のようなものじゃ。なんとしても助けてやりたい……」

涙を流して泣くの堪える紫苑となんとか慰めている黄忠ガンダムを見て、八人は見守ることしかできなかった。すると小蓮と孫尚香がーベラは何かを発見した

小蓮

「ねえ、これって……？」

紫苑

「それは娘が監禁されている場所で描いた絵です。昨日、一味の者が娘が無事であること証として持ってきて……」

すると小蓮の持つ一枚の絵に朱里と孔明リ・ガズイが

朱里

「その絵は……」

孔明リ・ガズイ

「見せてください」

八人はその絵を見た。それは髭面の男の顔であった。

孫尚香ガーベラ

「なんでこんな絵を描いたかしらね」

紫苑

「さあ？」

愛紗

「孔明殿、この絵が何か？」

孔明リ・ガズイ

「この絵、どこかで見覚えありませんか？」

すると……孫尚香ガーベラが気付いた

孫尚香ガーベラ

「あつ！！茶店の髭親父！！」

関羽ガンダム

「ではあの茶店の主人が！？」

朱里

「いえ、それはないと思います。もしこれが蔡瑁一味の誰かを描いたとあればいくらなんでもこれを黄忠さん達に渡すようなへまはないはず」

孔明リ・ガズイ

「おそらくは誘拐された娘さんが監禁されている場所から見た者を描いたと思われます」

それを聞いた愛紗は・・・考えると・・・

愛紗

「あの茶店の向かいの・・・」

関羽ガンダム

「あの使われていないボロ屋敷に監禁されているのか？」

紫苑

「娘の居場所に心当たりがあるのですか！！？」

朱里

「え・・・ま・・・たぶん・・・」

黄忠ガンダム

「場所を教えてください！！すぐにワシらも」

立ち上がった紫苑と黄忠ガンダムを朱里と孔明リ・ガズイは止めた。

孔明リ・ガズイ

「まってください。監禁された場所は教えますが黄忠さん達はいかないほうがいいです」

紫苑

「どうして!？」

朱里

「顔を知られている黄忠さん達が監禁場所に近づいたら娘さんの身に危険が及ぶかもしれません。娘さんの命を最優先にするなら黄忠さん達は何も知らないふりをしてここに残ってください」

黄忠ガンダム

「しかし・・・」

関羽ガンダム

「黄忠殿、辛いでしょうか、ここは孔明殿達の言つとおりにしたほうがよいですぞ」

関羽ガンダムに言われて仕方なく座り込む紫苑と黄忠ガンダム

朱里

「黄忠さん・・・」

愛紗

「あの茶店までさほど時間はかからない・・・」

紫苑

「それでは・・・」

関羽ガンダム

「黄忠殿、お主の娘、我ら関羽が救うとしましょう」

紫苑

「関羽さん・・・」

愛紗と関羽ガンダムの言葉を聞いた紫苑と黄忠ガンダムは涙を流した。そして、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイと小蓮と孫尚香ガーベラは茶店へと向かった。それと入れ違いするかのように蔡瑁アッゲガイの配下である黄祖ゾゴックが入ってきた

黄祖ゾゴック

「入るぞ。」

黄忠ガンダム

「黄祖か、なんのようじゃ？」

黄祖ゾゴック

「そんなつれないことを言うな。蔡瑁様から首尾を見届けるように言われてな・・・」

紫苑

「そう、ご苦労なことね。（危なかったわ。もし私達があのまま飛び出していたら・・・）」

すると黄祖ゾゴックが何かに気付いた

黄祖ゾゴック

「!？」

黄忠ガンダム

「どうしたのじゃ？」

黄祖ゾゴック

「いや・・・気のせいだ・・・」

そして、宿の屋根の上ではマントを被った少女と侠がいた。そして、そのまま去った

その頃、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイと小蓮と孫尚香ガーベラは茶店につくと店主にわけを話した

店主

「え!？向かいのボロ屋にさらわれた子供が!？」

愛紗

「その子を救うためにお主の協力が必要なのだ!!」

店主

「え!？協力？」

そのころ、ボロ屋の中には三人の盗賊と一人の幼い少女がいた。その少女こそ紫苑の娘である璃々であるのだ。そこへ蔡瑁アツグガイがやってきた。

アニキ

「蔡瑁様」

蔡瑁アツグガイ

「おい、異常はないか？」

チビ

「なんにもつーかなさすぎて退屈で退屈で」

すると

小蓮

「ちよつと変ないいかかりはやめてよ!!」

孫尚香ガーベラ

「そうよ!!」

チビ

「????」

賊の小さいほうを覗くと、そこには店主と小蓮と孫尚香ガーベラが
みえた。

孫尚香ガーベラ

「あたし達がせこい盗みなんかするわけないでしょ!!」

店主

「この間食い逃げしといて何いっとなるんだ!!だから今回もおめえ
らにちげえね!!」

小蓮

「わかったわよ。そんな疑うなら盗んだものがあるかどうか裸にし

(3 . . .)

朱里、孔明リ・ガズイ

「「今です!!」」

朱里と孔明リ・ガズイの号令と同時に四兄妹は潜入した。そして、愛紗と関羽ガンダムは蔡瑁アツグガイの一行の前に立った。

蔡瑁アツグガイ

「なんじゃ、おのれら!!」

関羽ガンダム

「いつもなら名乗りを上げるところだが・・・」

愛紗

「貴様らのような卑劣な輩に聞かせる名などない!!」

チビ

「なんだと!!」

デク

「ふざけるな!!」

アニキ

「やっちまえ!!」

賊達が愛紗と関羽ガンダムに襲い掛かった。しかし簡単に片づけてしまった

蔡瑁アツグガイ

「くっ・・・こうなったらあの小娘を人質に・・・」

関羽ガンダム

「そうはさせぬ!!」

蔡瑁アツグガイ

「ぐお!!?」

璃々を人質にしようとして向かおうとした蔡瑁アツグガイであったが関羽ガンダムに殴り飛ばされてしまった。そこへ下にいた賊を退治した鈴々と張飛ガンダム駆けつけてきた

鈴々

「愛紗、関羽、下にいた奴らはみんな叩きのめしたのだ!!」

張飛ガンダム

「こっちのほうも片付けたらしいな!!」

関羽ガンダム

「うむ!! 璃々殿だな・・・」

璃々

「うん・・・」

愛紗

「私達と一緒に帰ろう。母上が待っているぞ。」

璃々

「お母さん!!」

そして、四兄妹と璃々が外へ出ると・・・

朱里

「関羽さん、こっちです!!」

そこには二頭の馬を連れた朱里と孔明リ・ガズイがいた

関羽ガンダム

「さすがは孔明殿、手回しが良いですね」

孔明リ・ガズイ

「いえこれは関羽さん達がすぐ飛びこんだ後に仮面をつけたお二人がもし急ぐならこれを使えと・・・」

愛紗

「仮面の!?!」

朱里

「とにかく今は時間がありません。急ぎましょう!!」

そして、愛紗と関羽ガンダムは璃々と共に荊州へと向かった。

関羽ガンダム

(頼む・・・)

愛紗

(間に合ってくれ!!)

その頃、荊州の町ではついに行列が始まってしまった。

黄祖ゾゴック

「おい、そろそろ始まるぞ」

紫苑

「わかったわ」

黄忠ガンダム

「任せておけ・・・」

紫苑と黄忠ガンダムは弓を構え始めた。紫苑と黄忠ガンダムは焦っていた

紫苑

（関羽さん・・・）

そして、愛紗と関羽ガンダムは何とかたどり着いたのだが・・・

門番兵

「馬はだめだ！！ここで降りろ！！」

まさかの足止めを食らってしまった。そして馬から降りると愛紗と関羽ガンダムは璃々を連れて、紫苑と黄忠ガンダムのいる宿へと向かうが、人混みのせいで進むことができなかった。

関羽ガンダム

「この人込みでは宿に向かうまでは間に合いませんぞ」

愛紗

「こうなったら・・・いちかばちか・・・」

そして、行列では劉表ガンダムと娘婿がついに来てしまった

黄祖ゾゴック

「おっ、来たか、頼むぞ!!」

紫苑

「ええ・・・」

紫苑と黄忠ガンダムは弓矢を構え、撃とうとしていた

黄祖ゾゴック

「おい、早くしろ!!」

黄忠ガンダム

（もうダメじゃ・・・）

紫苑

（これ以上は・・・）

紫苑と黄忠ガンダムは観念して矢を討とうとした。その時、紫苑と黄忠ガンダムは何かを見つけた。

それは愛紗に掲げられた、愛する紫苑の娘、璃々の姿であった。そして、璃々は何かを言っていた。紫苑と黄忠ガンダムはそれを理解していた

紫苑

「お・か・あ・さ・ん」

黄忠ガンダム

「お・じ・い・ちゃ・ん」

璃々の無事を確認した紫苑と黄忠ガンダムは矢を下げた

黄祖ゾゴック

「おい、何の真似だ！！？なぜ矢を・・・」

黄祖ゾゴックは紫苑の肩につかまろうとした。その時

紫苑、黄忠ガンダム

「「！！！！？？？」」

二人の怒りの一撃で黄祖ゾゴックを殴り飛ばした。安心した紫苑と黄忠ガンダムは腰を抜けて、座り込んだ。その後、蔡瑁アツグガイと黄祖ゾゴックは地下牢に閉じ込められた

そして、故郷の村へと戻る紫苑と黄忠ガンダムと璃々との別れが来た

黄忠ガンダム

「関羽殿、名残惜しいそうじゃが、ここで別れの様じゃ」

紫苑

「関羽さん、貴方達には何とお礼を言ったらよろしいでしょうか」

璃々

「ありがとう、お姉ちゃん、おじちゃん」

関羽ガンダム

「おじ・・・いえ・・・もう例は十分すぎるほど言ってもらったので、これ以上は・・・」

すると紫苑は愛紗の手をとった

紫苑

「関羽さん、これから小さな子供を持つ者同士、がんばっていきましょうね」

愛紗

「はっ？こども？」

紫苑

「あら、ごめんなさい。私、てっきり鈴々ちゃんと張飛さんを……
・／／／／」

愛紗

「何を言っておられる！！？鈴々と張飛は私の子供ではなく……
」

すると鈴々が

鈴々

「鈴々と張飛は愛紗と関羽と寢床で契りを交わした仲なのだ」

関羽ガンダム・張飛ガンダム

「／／／／／／／！？」

紫苑

「あらそれじゃ……」

愛紗

「違います！！契りというのは兄妹の契りです．．．それで．．．」

紫苑

「それで？」

愛紗

「いや．．．その．．．って誤解を招く言い方をするな！！！！」

こうして、荊州での暗殺騒動はおさまったのであった。

第8話『関羽・愛紗、黄忠、紫苑の企みを阻まんとすること』B（後書き）

次回予告

紫苑

「黄忠先生のカップリング講座!!」

黄忠ガンダム

「ではまず曹操殿と関羽殿の場合は金髪ドリル攻めのサイドテール受けとなる。では繰り返してみよう」

小蓮、孫尚香ガーベラ、璃々

「」「金髪ドリル攻めのサイドテール受け」「」

愛紗

「って子供に変なこと教えないでください!!」

紫苑

「次回 第9話『袁紹、麗羽・宝を掘り当てんとすること』。繰り返してみましよう」

愛紗

「そこはいい!!」

第9話『袁紹、麴羽・宝を掘り当てんとするのじ』(前書き)

今回の話はお色気と笑いありの話です

第9話『袁紹、麗羽・宝を掘り当てんとすること』

ここは冀州の町、業の都にある大きな屋敷。その大浴場では麗羽と袁紹バウは風呂に入ってくつろいでいた

麗羽

「うーん、やっぱりお風呂はいいわよね」

袁紹バウ

「まったくじゃ。こうやって静かに入っていると一日の疲れが取れるわい」

すると

猪々子、文醜ガズエル

「「麗羽様、袁紹様！！！」」

そこへ猪々子と文醜ガズエル（目隠しをしている）が慌ててやってきた

麗羽

「何よ、猪々子、文醜！！？どうしたの？まさか敵集！？」

猪々子

「そうじゃなくて見せたいものがあるんです！！」

袁紹バウ

「見せたいものじゃと？」

文醜ガズエル

「いいからとにかく来てください」

猪々子と文醜ガズエルは麗羽と袁紹バウを連れだした

麗羽

「ちょっと、私、裸!!」

猪々子

「大丈夫ですって文字のみですから見えませんって」

麗羽

「作者の気が変わったらどうしますの、猪々子!!?」

袁紹バウ

「というより文醜、眼隠しなどして前見えるのか!!」

文醜ガズエル

「見えないけど大丈夫です!!」

袁紹バウ

「大丈夫なわけなかるう!!」

考えもせずに動いている猪々子と文醜ガズエルに麗羽と袁翔バウは
キレた

麗羽

「もう・・・」

麗羽、袁紹バウ

「『いいかげんに（しなさい！！／せんか！！）』」

ゴツチーン！！

猪々子、文醜ガズエル

「『プギヤ！！？』」

猪々子と文醜ガズエルは殴られたのであった

第9話『袁紹、麗羽・宝を掘り当てんとすること』

そして、麗羽、袁紹バウは部屋に戻った。その前には頭にたんこぶができた猪々子と文醜ガズエルと斗詩と顔良ガズアルがいた。

麗羽

「んで、私達の憩いの場を邪魔してまで見せたいものはなんですか？」

斗詩

「はい、蔵の中の物を虫干したときにこれを見つけたんです！！」

斗詩が出したのはボロボロの地図であった。

袁紹バウ

「なんじゃこれ？」

麗羽

「汚い地図。おまけに虫食いだらけじゃない。」

顔良ガズアル

「それはそうですけど……とりあえずここを見てください」

顔良ガズアルが指差したところを麗羽と袁紹バウが見た

袁紹バウ

「なになに地図に記せし場所に我らが生涯かけし宝あり……宝・
・・」

麗羽

「はっ……これってもしかして……」

麗羽と袁紹バウはその地図がなんの地図か理解した

猪々子

「そうです、宝の地図です。掘れば金銀財宝がザクザク、これで麗羽様と袁紹様の無駄遣いが原因で苦しくなっている当家の台所も・
・・」

文醜ガズエル

「そして、お二人の無駄使いが原因で減っている俺達の給料も・
・・」

麗羽

「誰と誰の無駄遣いが原因ですって（怒）」

袁紹バウ

「貴様ら、どういふことじゃ（怒）」

猪々子

「あ……いやその……」

文醜ガズエル

「それは……」

猪々子と文醜ガズエルが余計な事を言い出したので怒りそうになっている麗羽と袁紹バウを斗詩と顔良ガズアルが宥めた

斗詩

「まあまあお金と赤ちゃんのおむつは困らないといえますし……」

猪々子、文醜ガズエル

「「そうそう……」」

麗羽

「そうね。たしかにお金はたくさんありすぎても困ることはありませんよね」

猪々子

「それなら……」

袁紹バウ

「うむ……明日の朝までには準備して、宝探しに出発じゃー!」

こうして麗羽一行は宝探しを行うことになった。

翌日、山岳では華琳、春蘭、桂花、曹操ガンダム、司馬懿サザビー、夏侯惇ギロス、姜維ガンダムF91は馬を連れて歩いていた。すると春蘭と夏侯惇ギロスが口を開いた

春蘭

桂花の発言に赤くなる一行（華琳、曹操ガンダム、司馬懿サザビーは除く）。

華琳

「春蘭、そんな怖い顔しないで貴方を仲間はずれにしないから・・・」

春蘭

「私は別にそういう意味で・・・」

華琳

「ふふ・・・」

夏侯惇ギロス

「そ・・・そんなことよりも秋蘭や淵にはかわいそうなことをしたな。二人だけ留守番とはな・・・」

曹操ガンダム

「そうだな。しかし、さすがに我が首脳部全員休暇を取るわけにはいかぬからな。念のために誰か残ってもらわねば・・・」

春蘭

「それはそうですけど・・・（二人とも・・・）」

夏侯惇ギロス

（すねてなんかいいえだろうな・・・？）

その頃、留守番をしている秋蘭と夏侯淵ダラスは・・・

春蘭

『いやあー、温泉っていいものだな』

華琳

『そうね、気持ちがゆったりするわね』

桂花

『本当、来てよかったですね』

華琳

『秋蘭、そんなところで一人でいて、貴方もこっちへいらっしやい』

秋蘭

『はい、ただちに・・・』

華琳一行は温泉入っているという・・・秋蘭の寂しさを紛らわすための指人形劇で会った。そこへ・・・夏侯淵ダラスがやってきた

夏侯淵ダラス

「秋蘭、そんなことしてしないで仕事でもやろうか・・・」

秋蘭

「そうだな・・・」

秋蘭と夏侯淵ダラスは温泉へ行けなかったことですねていたのてあった。

そのころ、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイと小蓮と孫尚香ガーベラは山道を歩いていた。すると鈴々と張飛ガンダムは何かを嗅いでいた

朱里

「二人とも、どうしたんですか？」

鈴々

「なんか臭いにおいがするのだ」

小蓮

「シャオ達じゃないわよ!!」

孫尚香ガーベラ

「そうよ。そりゃ、たしかにおやつで食べたお芋でちょっとおなか
が張っているなと思っていてけど……絶対あたしたちじゃない
わよ!!」

張飛ガンダム

「それじゃ……」

愛紗

「私達でもないぞ」

関羽ガンダム

「断じて違うからな」

すると孔明リ・ガズイがかすかに笑った

孔明リ・ガズイ

「違いますよ。これは硫黄の匂いです」

張飛ガンダム

「硫黄？」

関羽ガンダム

「それではもしかして・・・」

朱里

「はい、きっと近くに温泉があるんですよ」

こうして、八人は温泉に向かうことになった。

乙女サイド＋孫尚香ガーベラ

さっそく服脱いだ鈴々が飛び出した。その後を小蓮と孫尚香ガーベラが追いかけた

鈴々

「一番乗りなのだ!!」

小蓮

「ちよつと抜け駆けなんてずるいわよ」

鈴々

「何言っているのだぬけがけは戦場の花なのだ」

孫尚香ガーベラ

「ってここは温泉でしょ」

そういつて三人は温泉に飛び込んだのだが・・・

ゴッチーン!!

鈴々、小蓮、孫尚香ガーベラ
「「「痛い（のだ!!）」」「」

何かをぶつける音がした

愛紗

「どうしたのだ？」

鈴々

「お湯が入ってないのだ・・・」

小蓮

「どうなっているのよ!!!？」

なんと温泉は空になっていたのだ。

愛紗

「これでは湯につかれんな・・・」

朱里

「風邪ひいちゃいますよ」

すると・・・

華琳

「あら・・・」

愛紗

「お主は・・・」

そこへ華琳、春蘭、桂花がやってきた

愛紗

「どうしてこんなところへ……」

華琳

「どうしてって温泉に入りきたに決まっているじゃない」

愛紗

「あっ……そうか……」

華琳

「ところで関羽。相変わらず下もしつとりつやつやなのね」

愛紗

「／／／／／／／／！！？」

そのころ、侠組は女性陣が上がるのを待っていた

関羽ガンダム

「しかし、まさかここで曹操殿と会うとは思いませんでしたぞ」

曹操ガンダム

「余と華琳とて休息は必要なのだ。しかし、まさかお前達がいるとは思わなかったぞ」

張飛ガンダム

「それにしてもおっせえーな」

孔明リ・ガズィ

「そうですね」

すると女性達が戻ってきた。

夏侯惇ギロス

「あれ？ずいぶんとはやかっただじゃねえか」

張飛ガンダム

「待ってました！！」

すると張飛ガンダムが鎧を脱ぐとタオルを片手に温泉に向かった

愛紗

「あつ、おい張飛！！」

曹操ガンダム

「どうしたのだ、華琳？温泉につかっていたのではなかったのか・・・」

華琳

「実は・・・」

華琳がわけを話そうとしたその時・・・

ゴッチーン！！！！

張飛ガンダム

「いつてー！！！？？」

空の湯船に頭をぶつけた張飛ガンダムの悲鳴が聞こえたのでわけを

理解したのであった。そこへ頭にたんこぶを作った張飛ガンダムが戻ってきた

張飛ガンダム

「なんだよ！！お湯が入ってねえじゃねえか！？」

曹操ガンダム

「なるほど・・・」

その後一行は茶店でくつろいでいた

小蓮

「んもうー！！？何よ、温泉にお湯がないなんてどういうこと！！」

愛紗

「しょうがないだろ。地元の人の話では半月ほど前に起こった地震の影響でほとんど湯がわき出さなくなったから・・・」

孫尚香ガーベラ

「おかげでお尻にあざができちゃったわ」

鈴々

「鈴々のお尻も真っ赤なのだ！！」

張飛ガンダム

「俺様なんか頭が痛いぜ！！」

関羽ガンダム

「あれはお前が愛紗殿の話を聞かずに行くから悪いのだ！！」

一行は温泉のこと愚痴を言っていた

春蘭

「しかし、これではせっかくの慰安旅行も台無しです」

華琳

「そうね。久しぶりに温泉に入って疲れをいやそうと思ったのに」

曹操ガンダム

「うむ、残念だ」

鈴々

「鈴々も温泉に入りたかったのだ」

すると・・・朱里と孔明リ・ガズイが・・・

朱里

「あの・・・みなさん、それでしたらだったら新しい温泉をさがしてみるのはどうでしょう?」

愛紗

「新しい温泉を探す?」

孫尚香ガーベラ

「それってつまり他に温泉が湧き出る場所を探して掘ること?」

孔明リ・ガズイ

「はい、もちろん絶対見つかる可能性はないかもしれませんがやってみる価値はあると思います」

曹操ガンダム

「司馬懿、どう思う?」

司馬懿サザビー

「私も可能性はあるとおもいます」

張飛ガンダム

「それなら決まりだな」

鈴々

「それじゃ温泉さがしに出発なのだ!!」

鈴々が温泉さがしを出発をかけようとしたとき

小蓮、孫尚香ガーベラ

「ちよつと待ったー!!」

鈴々

「なんなのだ?」

突然、小蓮と孫尚香ガーベラが待ったをかけた

小蓮

「せっかく探すならシャオ達とあんた達、どっちが温泉掘り当てるか競争しない?」

小蓮の一言に驚く一行

華琳

「おもしろそうね」

孫尚香ガーベラ

「言っとくけどこれはただのお遊びじゃないわよ」

小蓮

「もし、この競争でシャオ達が勝ったら、あんた達はシャオ達の家来になってもらうわ」

孫尚香ガーベラ

「そういうことよ!!」

夏侯惇ギロス

「なっ、貴様ら!!」

小蓮と孫尚香ガーベラの一言に春蘭と夏侯惇ギロスは怒り出し、立ち上がるが……

曹操ガンダム

「二人とも落ち着け……」

華琳

「孫尚香とやら私達が負けたら家来になってあげるわ」

曹操ガンダム

「うむ、そうだな」

春蘭、桂花

「「華琳様!!?」」

夏侯惇ギロス、姜維ガンダムF91

「曹操（様）！！？」

華琳

「ただし、私達が勝てば関羽（愛紗）は私の物になってもらうわ。いいわね？」

愛紗

「え！！？」

孫尚香ガーベラ

「いいわよ」

関羽ガンダム

「つておい！！何を勝手に！！？」

華琳の一言に驚く愛紗と関羽ガンダム、さらに孫尚香ガーベラの承諾にも驚いてしまった。

曹操ガンダム

「うむ、ならば出発だ！！」

愛紗

「あ・・・いや・・・その・・・え・・・え・・・ええええええ！！！！？」

その一言を本気にした曹操一行に愛紗は驚きを隠せなかったのだった。

そして、曹操一行は温泉を探していたすると

春蘭

「華琳様、曹操様、あんな約束してよろしかったのですか？」

曹操ガンダム

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、関羽ほどの豪傑を手に入れるなら多少の危険もやむを得ない」

夏侯惇ギロス

「けどよ、もし負けたりしたら素性も知れない者の家臣になるなんてよ」

曹操ガンダム

「我らが勝てばいいという話だ」

春蘭

「それはそうですけど・・・」

それでも浮かない顔の春蘭に華琳が・・・

華琳

「どうしたの、春蘭、そんなに勝つ自信がない？」

春蘭

「いえ、そういうわけでは・・・」

華琳

「それともヤキモチ？」

春蘭

「なっ・・・／＼／＼。何を・・・」

華琳

「心配しなくてもいいわ。例え関羽が配下になっても貴方のことはいつもどおりかわいがってやるわ。私の寝台が広いのは貴方も知っているでしょ・・・」

春蘭

「華琳様・・・私は・・・その・・・」

華琳

「ふふ・・・かわいいわよ春蘭」

それでも赤くなっている春蘭をからかう華琳。それにつられて赤くなる夏侯惇ギロス。それを見て笑う曹操ガンダムと司馬懿サザビーであつた。

司馬懿サザビー

「ところで桂花、姜維。だいぶ歩いているが本当にそれで温泉が見つかるのか？」

桂花

「もちろんです、先生。疑似科学を集めた推移の方法は温泉はおるか土中に埋まっている土管でさえ見つけられる優れものなんです」

姜維ガンダムF91

「本当にこれで見つかるのかな??」

桂花の持っている温泉探索機を疑う姜維ガンダムF91であつた。

そのころ、離れた森の中では袁紹一行が宝探しをしていた。麗羽と

袁紹バウはかなり疲れている状態であった。

麗羽

「うー斗詩、なんだかさつきから同じところを歩いているような気がするけど……まさか道に迷っていないでしょうね」

斗詩

「迷ってはいないと思いますけど、この地図あちこち虫食いだらけで、どうすれば印の場所に行けるのかいまいち、わからなくて……」

袁紹バウ

「おい、それでは宝の在処に行けぬのではないか!!」

顔良ガズアル

「あゝでもこの辺で間違いない……はずですけど……」

斗詩と顔良ガズアルも言葉が小さくなっていると、猪々子と文醜ガズエルが何かを見つけた。

猪々子

「あつ、麗羽様、袁紹様、あれを……」

麗羽

「みつけたの？」

しかし、それは曹操一行であった

袁紹バウ

「なんじゃと!!??なぜあの生意気小娘と侠がこんなところにいる

のだ!!」

文醜ガズエル

「あつ、もしかして、あいつらも宝を狙っているんじゃない」

麗羽

「あの小娘に侠。またしても私達の邪魔を・・・」

華琳と曹操ガンダムを見て怒り心頭の麗羽と袁紹バウに猪々子が言った。

猪々子

「麗羽様、袁紹様。見たところあの中で腕が立ちそうなのは侠の曹操と夏侯惇二人」

文醜ガズエル

「いっそ、一か八か飛び出してあいつらをぶっ飛ばしてやりましょ」

顔良ガズアル

「二人とも待て!!こっちは麗羽様と袁紹様がいるのだぞ」

文醜ガズエル

「たしかに・・・」

袁紹バウ

「おい、待てお前ら!!その言い方だとそれではワシらが足手まといみたいではないか!!」

猪々子

「みたいというか・・・」

文醜ガズエル

「まんまというか……」

麗羽・袁紹バウ

「何（ですってえノじゃとお）（怒）！！！！？」

怒り心頭の麗羽と袁紹バウを斗詩が宥める

斗詩

「まあ、落ち着いてもう少し様子を見ましょう」

麗羽

「様子を見たところでなんになりますの？」

斗詩

「このまま曹操達の後を付けて、奴等が宝を見つけたら。隙を見て、横取りするんです！」

袁紹バウ

「なるほど……。それはいい考えじゃ」

猪々子

「さっすが、智力32」

斗詩

「むう。34よ」

こうして一行は曹操一行についていくことになった。

第9話『袁紹、麴羽・宝を掘り当てんとすること』（後書き）

後編へ続く

第9話『袁紹 麴羽・宝を掘り当てんとするの二』 B（前書き）

B
パートです

第9話『袁紹、麗羽・宝を掘り当てんとすること』B

曹操組は温泉をさがしあてると、一つの大きな石の前に反応した。

桂花

「あっここです。ここに間違いありません」

曹操ガンダム

「この岩の下に温泉があるというわけか……」

夏侯惇ギロス

「それじゃ早速岩をどけて……」

春蘭と夏侯惇ギロスと姜維ガンダムF91は岩をどけようとするが・
・・

華琳

「あっちよつと待つて、のどが渴いたわ。さっき通り過ぎた小川で
水を飲んでからにしましょう」

姜維ガンダムF91

「何も今でなくても……」

曹操ガンダム

「余も行くでしょう」

司馬懿サザビー

「お供します」

桂花

「私も行きますね」

夏侯惇ギロス

「俺達も行くとするか」

春蘭

「そうだな」

そして、曹操一行は岩から離れていたのであった。そして、その後を袁紹一行が見つけた

袁紹バウ

「どうやら見つけたようじゃな」

顔良ガズアル

「でも、あいつらいなくなってしまいましたよ」

麗羽

「ぞろぞろ連れだってどこへ行ったのかしら？」

猪々子

「厠じゃないっすか？あたい達もよく連れだって行くじゃないッスか」

斗詩

「とにかく今のうちに宝をいただいちゃいましょう」

麗羽

「そうですわね」

そして、袁紹一行は岩を持ちあげ始めた

文醜ガズエル

「この下にお宝が……」

袁紹バウ

「これをどかせば……」

せーので岩をどかすことができた。宝を確認するために見たが……
一同は絶句した。それは大量の虫であった。袁紹バウ、顔良ガズアル、文醜ガズエルが虫に纏わり疲れて全身虫だらけになった。

麗羽、斗詩、猪々子

「「「いやあああああああああ!!!!!!?」」」

袁紹バウ、顔良ガズアル、文醜ガズエル

「「「虫をとつてくれ!!」」」

そのころ、関羽組は

朱里、孔明リ・ガズイ

「「ん?」」

関羽ガンダム

「どうした?孔明殿」

朱里

「いえ、何か聞こえた気がして……」

四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは温泉を掘り続けるが・・・小蓮と孫尚香ガーベラはさぼっていた

小蓮

「ねえー、温泉まだでないの？」

孫尚香ガーベラ

「はやくしなさいよね。たいくつしているから」

張飛ガンダム

「だったら、お前らも少しは手伝えよ!!」

小蓮

「やだ、シャオ達はお姫様だからそんな汗臭いことはしないの」

孫尚香ガーベラ

「そつよ!!」

張飛ガンダムの一言を断る小蓮と孫尚香ガーベラは・・・

孫尚香ガーベラ

「そついえば孔明、出かける前に村の人たちにいろいろと聞いて、地図に何かを書き込んだけど、あれってなんだったの？」

朱里

「温泉って、地脈と水脈の交わる地点に湧くことが多いんですけど。そう言う所には、よく怪異が起こると言われてるんです」

孔明リ・ガズイ

「ええ、例えば、変な雲がその上に一日中かかっているとか。怪しい

光の柱が立ち上るとか、だから、村の人達にそついう言い伝えや体験談を聞いて、その場所に印を付けてたんです」

小蓮

「へえ。じゃあ、ここもそつ言う所の一つって、わけね」

朱里

「はい」

一行は温泉を掘り続けるがなかなか見つからない。小蓮と孫尚香ガーベラも退屈であくびをした。すると……

小蓮

「あつ、ウサギ」

孫尚香ガーベラ

「本当だ」

ウサギを見つけた二人はウサギを追いかけ始めた

関羽ガンダム

「おい、あんまり遠くいつていると危ないぞ。」

小蓮

「こらこら待ってたら、おーい!!」

関羽ガンダムの注意を聞かずに小蓮と孫尚香ガーベラは森の奥に入ってしまった。すると……

小蓮、孫尚香ガーベラ

「ひゃあああああああああああ！！！！！！」

何かから逃げるように戻ってきた。すると……

クマ

「グオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

出てきたのは大きなクマであった。そう二人はクマに追いかけられていたのであった

小蓮

「ヒィー、虎、虎！！？」

愛紗

「クマだ」

すると……

鈴々

「あつ、あれは蘭々！！」

全員

「え！？」

クマ

「グオ？」

一同は驚き、クマも足を止めた。鈴々はクマに近づいた

鈴々

「やっぱり、蘭々なのだ!!」

愛紗

「おい、鈴々、蘭々って?」

鈴々

「蘭々は昔、鈴々が飼っていたクマなのだ!!」

.....

コグマの時からずっと一緒なのだ

でもじっちゃんが大人になったらもうお山に返してやれというから・

泣く泣くお別れしたのだ

.....

鈴々

「まさかこんな所で会えるなんて、感動の再会なのだ」

張飛ガンダム

「俺様は初めてだけどな・・・」

愛紗

「いや、しかし、そのクマ、本当に昔飼っていたクマなのか?」

鈴々

「もちろんなのだ。その証拠に蘭々はこっちの足の脇の下に白い房

張飛ガンダム

「まったくだぜー!!」

鈴々

「よく似てたから・・・てつきり・・・」

小蓮、孫尚香ガーベラ

「「てつきりじゃないわよ!! てつきりじゃ!!」」

愛紗

「しかし、闇雲に逃げてきたから。場所が分からなくなってしまったな」

朱里

「それじゃあ、地図で調べて見ますね」

そう言つて、ポーチの中から地図を出して今の場所を確認する朱里

そのころ、袁紹一行は宝探しを続けていた

麗羽

「たく・・・いったい何なんでしたの!!」

猪々子

「きつと罠ですよ。荀?の罠」

袁紹バウ

「おのれ、あの猫耳軍師め。今度会ったただではすまんぞ!!!!」

文醜ガズエル

「腰ぬけるまでイカと玉ねぎを食べさせましょう」

麗羽

「鮑の肝もいいですね」

猪々子

「あと鼻先にミカンの皮を二つ折りというのも効きますよ」

斗詩

「あつ、麗羽様、袁紹様、猪々子、文醜。あれあれ……」

斗詩が指差した先には地図調べている関羽一行であった

袁紹バウ

「どうやら、あやつらも宝を探しているようじゃな」

顔良ガズアル

「麗羽様、袁紹様。あの者達の地図は虫食いだらけではありません」

斗詩

「あれなら宝の在処が分かるかも……」

文醜ガズエル

「いただきちゃいましょう!!」

麗羽

「そうね」

勘違いした袁紹一行は……

小蓮、孫尚香ガーベラ

「きゃあー!!」

小蓮と孫尚香ガーベラの悲鳴が聞こえた同時に六人が振り向くとそこには小蓮と孫尚香ガーベラを人質に取った袁紹一行の姿であった

麗羽

「おっほほー!!」

孫尚香ガーベラ

「何するのよ!!」

袁紹バウ

「ええい、うるさい!!」

張飛ガンダム

「あつ、お前はあの時の知力24!!」

斗詩

「34よ!!」

猪々子

「けっこうこだわるんだな・・・」

麗羽

「えええい、そんなことはどうでもいいですよ!!貴方達の持っているその地図を私達によこさない!!」

袁紹バウ

「そうじゃ、でないとこの小娘たちがどんな目にあつのか?」

もつとも悪党らしい言い方をする袁紹一行であるが……

鈴々

「べつにどうなってもいいのだ!」

張飛ガンダム

「そうだな、どうでもいいぜ」

鈴々と張飛ガンダムのズツバとした一言に愛紗と関羽ガンダムと朱里と孔明リ・ガズイはずっこけた。

小蓮

「ちょっと待ちなさいよ!!どうなってもいいってどういうことよ!!」

文醜ガズエル

「そうだぞ。そんなこと言ったらこいつらを人質に取っている俺達の立場はないだろ!!」

孫尚香ガーベラ

「立場がないのはこっちのほうよ!!」

愛紗

「そうだぞ、二人とも。気持ちはわからんでもないが相手にも立場が……」

朱里

「そうですよ。いくら本当のことでも面と向かって言うのはよくな

「と思います」

小蓮

「あんた達ね!!!」

一行に酷い言い方をされた小蓮と孫尚香ガーベラが怒りだそうとするが……

孫尚香ガーベラ

「あれ?どうしたのよ?」

関羽ガンダム

「あつ……いや……後ろ、後ろ」

顔を青ざめた四兄妹と朱里と孔明リ・ガズィは後ろへと下がり始めた

麗羽

「おっほほほ、後ろだなんてそう言っで、こちらが振り向いた隙に人質を取り返そうという作戦なんですけど、そんな手に引っ掛かると思いでしょうか?」

袁紹バウ

「わっはははは、まったくじゃ!!!」

麗羽と袁紹バウは高笑いをしながら人質を確認するが、何かを見て硬直する。そして、四枚看板と小蓮と孫尚香ガーベラが後ろを振り向いた。そこには……

クマ

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!」

麗羽

「まあ、あれは私が幼い時に亡くなったお婆様」

袁紹バウ

「それに若くして亡くなったワシの家内までいるではないか……」

L

麗羽

「お婆様が私を迎えに・・・」

袁紹バウ

「ワシもそちらにいくぞ、お前」

麗羽と袁紹バウは川を渡ろうとするが何かに引っ張られてしまった。何とか渡ろうとする麗羽と袁紹バウであったが、結局、引っ張られてしまった。

[illegible]

麗羽と袁紹バウが目覚めると涙目になっている四枚看板の姿があった。

斗詩

「よかった」

顔良ガズアル

「気がつかれたんですね」

猪々子

「麗羽様、袁紹様！！」

麗羽

「ここは・・・」

そこは川辺であつた。そう二人は生死の境までいつてしまったのであつた。

猪々子

「麗羽様、袁紹様！！つねつてもひつぱ叩いてもうんともすんとも言わないから死んじやったと思いましたよ！！びええええええええええええええええ！！！！！！！！」

文醜ガズエル

「お二人が死んじやつたら俺達は・・・うわああああああああああん！！！！！！」

麗羽と袁紹バウに泣きじゃくる猪々子と文醜ガズエル。それにつられて泣きだす斗詩と顔良ガズアル。

麗羽

「猪々子、斗詩・・・」

袁紹バウ

「文醜、顔良・・・」

麗羽

（四人とも私達のことをこんなに心配して）

袁紹バウ

（わざわざこんなところまで探しに行かなくても本当の宝は近くに
あったかもしれぬ・）

その後

袁紹バウ

「では四人とも帰るとするかろう」

斗詩

「え！？でも宝は・・・」

麗羽

「もういいんですよ」

麗羽

（だって私達にとって宝なんかより素晴らしいものがあつたんです
のよ）

袁紹バウ

（とは言ったもののやはりあきらめきれぬわ・・・）

しかし、次の瞬間、麗羽は岩で足を滑らせてしまった。その際に支
えになった岩が崩れた。その岩は袁紹バウに落ちてきた

袁紹バウ

「うおおおおおおお！！！！あぶないではないか！！！！？」

麗羽

「わざとではありませんわ！！！！」

一行は苦笑いをするが、次の瞬間、袁紹バウの足元から大量のお湯が出てきたのであった。

袁紹バウ

「のわああああああああああ！！！！！！」

一行は驚き、尻もちをついた

麗羽

「暖かい」

斗詩

「これって……温泉？」

猪々子

「あれ？袁紹様は？」

袁紹バウはというと・・・

袁紹バウ

「助けてくれー!!!?」

吹き出る温泉の上にいたのであった。

そう、見事温泉を掘り当てたのであった

その後、関羽一行、曹操一行、袁紹一行は温泉に入っていた

麗羽

「いいですこと？この温泉は私達が見つけたんですからね。ちゃん

と感謝してはいってくださいましね」

袁紹一行は自信まんまに温泉につかっていると

華琳

「ふん、見つけたといつても偶然でしょ」

曹操ガンダム

「そのようだな」

袁紹バウ

「ふん、その貧乳小娘よ。なんか言ったか？」

麗羽

「斗詩、聞こえまして？」

斗詩

「ええ、何かひがみつぽいこと言いましたけど、胸が小さいと心もせまくなるでしょうかね？」

麗羽と斗詩に嫌みを言われて、そっぽを向く華琳

麗羽

「それにしても服を脱いで勝負は我々の圧倒の様ね」

華琳

「むむ（怒）」

斗詩

「はい、まあ猪々子はおまけみたいですけど・・・」

猪々子

「え!？」

斗詩

「物量なら圧倒的かと……」

と胸を自信まんまにしている袁紹一行（文醜ガズエルと顔良ガズアルは赤くなつてうずくまっている）だが……

桂花

「量だけで質を問わないとは……。いかにも、いくさベタな袁紹軍らしいこと」

麗羽

「何ですってえ!？」

桂花

「本当の事を言つたままですわ。それとも無駄な胸の脂肪に栄養を取られて、回転の悪くなった頭では理解出来ないのかしらあゝ。ねえ、先生」

司馬懿サザビー

「確かにもう一人の袁紹殿も同じかと」

袁紹バウ

「なっ!!!? 貴様ら!!!」

麗羽と袁紹バウが切れて、立ち上がり、口論となる

麗羽

「胸が大きいと頭が悪いなんてとんでもない俗説ですわ!!」

春蘭

「そうだぞ。それでは私も頭が悪いということになってしまつてはないか!!」

夏侯惇ギロス

「お前も維持になるなよ!!」

桂花

「って春蘭と夏侯惇殿はどっちの味方なんですか？」

曹操ガンダム

「三人とも仲間割れはよせ!!」

桂花

「そもそも胸の優劣を大きさでつけること自体間違ひなんです!!
もつと色とか形とか・・・感度とか・・・／／／／／」

姜維ガンダムF91

「桂花さん・・・／／／／／」

すると小蓮と孫尚香ガーベラが

小蓮

「あら、感度ならシャオ達のほうが上よ」

孫尚香ガーベラ

「そのとおり!!」

猪々子

「それならあたいだって!!」

桂花

「いえ、感度なら華琳様が一番です。そうですね、華琳様？」

華琳

「そ・・・それは・・・その・・・」

小蓮

「だったら誰が一番か試してみましよう!」

そういうと曹操一行と袁紹一行の乙女達＋は胸のことで大騒ぎとなった。愛紗は鈴々と朱里の眼を隠していた。すると・・・

関羽ガンダム

「そういえば張飛は？」

孔明リ・ガズィ

「いったいどこへ行かれたのでしょうか？」

そのころ張飛ガンダムは・・・

張飛ガンダム

「へへへへ、ここから覗いてやるぞ。」

張飛ガンダムが覗いたが・・・そこにいたのは・・・

筋肉質の漢女、貂蟬であつた・・・

張飛ガンダム

「なんじゃこりゃああああ!!?」

貂蟬

「あらん、イイ男ね、キスして」

張飛ガンダム

「えゝ!!!!?」

貂蟬

「ぶちゅっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつ!!」

張飛ガンダム

「ぎゃああああああああああああああああ!!!!」

その後、張飛ガンダムを見た者はいない（噓）

そのころ

???&????

「「そこまでだ!!」」

一同は振り向くとそこには全裸の華蝶仮面一号と華蝶仮面V2の姿が見えた

一号

「乱世の中で力を合わせなければならぬ者たちがこのことで仲間割れするとは・・・嘆かしい」

袁紹バウ

「そついう貴様らは何者じゃ？」

一号

「我らは……」

鈴々

「変態仮面一号と二号なのだ！！！」

鈴々に変態仮面扱いされてしまった

一号

「変態仮面ではない！！華蝶仮面だ！！」

V2

「ちなみに私はV2。つて前を隠してくれ！！」

そついうとV2は一号の前をタオルで隠した

愛紗

「いや……それでは変態仮面にしか見えないのでは……」

愛紗に指摘された変態……華蝶仮面達は……

一号

「諸君……さらばだ！！」

V2

「し……失礼する……」

バツと去って行った。

鈴々

「なんなのだ？あいつら」

華蝶仮面達の登場に驚く一行であった。くだらない争いをやめて温泉にくつろぐのであった

全員

「あゝ極楽、極楽」

ところで肝心の宝は……

クマ

「グオ？」

クマの洞窟にあったのであった

第9話『袁紹、麗羽・宝を掘り当てんとすること』B（後書き）

次回予告

秋蘭

「ども夏侯淵です。今回の真・恋姫三国伝BBSは面白かったですか？メインで出ていた人たち、楽しそうでしたね。私も温泉行きたかったな・・・自慢じゃないけど私は脱いだらすごいんですよ」

夏侯淵ダラス

「秋蘭、無駄口はその辺にして次回 第10話『孫策・雪蓮、命を狙われるのこと』。俺達の扱いって・・・」

秋蘭

「・・・言っな」

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われるの』A（前書き）

最新話です

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われること』A

ここは小蓮と孫尚香ガーベラの故郷である江東

その城の中で二人の人物が走っていた。一人はピンク色の髪をした褐色肌の少女、もうひとりとは青と白を強調とした鎧を着た侠。二人の孫権こと蓮華と孫権ガンダムである。二人は自分達の父と姉と兄が怪我をしたことを聞いて、走り出していた。そして……

孫権（真名・蓮華）

「お父様、姉様、兄様……！」

蓮華と孫権ガンダムが王室に入ると、そこには無事な姿を見せており、玉座に座っている二人の父である孫堅ゼフィランサス（白と黒を強調とした白虎をイメージした鎧を着た侠）と二人の姉と兄である二人の孫策こと雪蓮（ピンク色の長い髪をした派手なドレスを着た女性）と孫策サイリス（白と赤を強調とした鎧と両肩に双虎旋混を装備した侠）。その両サイドには二人の周瑜こと冥琳（黒い髪と褐色肌の眼鏡をかけた女性）と周瑜ヒヤクシキ（黄金に輝く鎧をした侠）と二人の叔母である孫静がいた。三人が無事だとした蓮華と孫権ガンダムは顔を赤くして、頭を下げた

蓮華

「……無事のご帰還、なによりです……！」

孫策（真名・雪蓮）

「蓮華、孫権、今更かしこまることはないわ」

孫権ガンダム

「ごめん、父上達が戦場で怪我したと聞いたから、慌ててしまって・・・」

孫策サイサリス

「怪我といってもかすり傷だ」

蓮華

「ならよろしいのですが・・・」

孫堅ゼフィランサス

「二人とも、どうした？何か言いたそうだな？」

孫堅ゼフィランサスに聞かれた二人は覚悟を決めて・・・

蓮華

「お父様、姉様、兄様、お父様達はどうして、戦いを好まれるのですか！！？」

権ガンダム

「蓮華の言つとおりだよ」

孫静

「孫権、何言い出すのです！！孫策達と義兄上は我が孫家の名を高めんとして・・・」

孫権ガンダム

「たしかに戦いを重ねることで領地は増え、孫家の名を近隣まで響くまでになったよ」

蓮華

「しかし、国の礎である民は疲弊して、けして遠からず・・・」

雪蓮、孫策サイサリス、孫堅ゼフィランサス

「滅びるか？」

蓮華

「いえ・・・そんなことは・・・」

場が静かになっていくと・・・そこへ冥琳と周喻ヒヤクシキの弟子である二人の陸遜こと隠と陸遜ゼータプラスがやってきた

陸遜（真名・隠）

「みなさん、お待たせしました。宴会の用意ができ・・・・・・たんですけど？」

陸遜ゼータプラス

「隠さん、場違いですよ・・・」

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われるのこと』

そして、場所は変わって宴会場では・・・

小喬

「はい、江東一の美少女・双子の・・・」

大喬

「大喬と・・・」

小喬

「小喬が・・・」

二喬

「歌いまーす!!」

孫堅ゼフィランサス

「うむ、楽しくなりそうだ。しかし・・・雪蓮と孫策はどこへ行ったのだ？」

宴会場では華やかに始まっていた。外では冥琳と周瑜ヒヤクシキが夜空を眺めていた。すると・・・

雪蓮

「なんだ、二人ともこんなところにいたのね」

雪蓮と孫策サイサリスが二人の所にやってきた。

周瑜（真名・冥琳）

「孫策様・・・」

周瑜ヒヤクシキ

「若殿様も・・・」

雪蓮

「冥琳、キンキン。四人の時は真名で呼び合うつて約束でしょ？」

孫策サイサリス

「それにそんな堅いやり取りもなしだといったはずだぞ」

冥琳

「そうだったわね、雪蓮」

周喻ヒヤクシキ

「すまないな、孫策」

孫策サイサリス

「二人ともあまり浮かない顔してどうしたんだ？孫家の名軍師であるお前達が何に頭を悩ませているんだ……」

すると冥琳と周喻ヒヤクシキは……

冥琳

「孫権様達のことを考えていて……」

雪蓮

「蓮華と孫権のこと？」

周喻ヒヤクシキ

「孫権様達はあまりに眼の前のことが見られておられない。たしかにここ数年、戦続きで領民たちは疲弊している。だからここで立ち止まっていれば、江東に覇を唱えることができても……ここで止まってしまふ……」

冥琳

「とうてい天下へは届かない。どれだけ苦しくても明日のために戦わなければならない。なのに孫権様達は……」

孫策サイサリス

「たしかにな……だがそれがあいつらのいいところだ」

孫策サイサリスの言葉に冥琳と周喻ヒヤクシキは疑問に思った

雪蓮

「江東の虎と呼ばれた今は亡き母様、おなじく江東の虎と呼ばれた父様、二人の孫堅の意思を継いで私達が血まみれになって奪い取ったものをあの子達なら受け継いで、守り育ててくれる。そんな気がするの……」

冥琳

「何を不吉な!？」

雪蓮

「不吉？」

周瑜ヒヤクシキ

「そうだ!! それでは二人が志半ばで倒れるような言い方ではないか!」

孫策サイサリス

「ははは、二人とも。それは考えすぎだぞ」

周瑜ヒヤクシキ

「しかし、孫策!？」

雪蓮

「まったく、頭がよすぎるのも考えものね」

それでも浮かない顔を見せる冥琳と周瑜ヒヤクシキに孫策サイサリスは……

孫策サイサリス

「心配するな。俺達は必ずこの手で天下をつかんで見せる！蓮華と孫権に渡すのはその後だ」

冥琳

「雪蓮……」

周喻ヒヤクシキ

「孫策……」

雪蓮

「冥琳、キンキン。志遂げるその時まで私とさっくんと共に歩んでくれるわよね？」

そんな二人に冥琳と周喻ヒヤクシキもうなづいたのであった。

そのころ、ここは重役達が集まっている場所。ここでは重役達が会議を行っていた

重役A

「えーい、戦、戦、戦。これで今年何度目だ！！？」

重役B

「まったく！！これでは民が田を耕す暇もないぞ！！」

重役C

「張昭殿、貴方は我らの中では一番の長老。なんとかお諫めさせることはできぬのか？」

そして、中央に座っている張昭は……

張昭

「なんども申し上げておる。だが、孫堅様と孫策様達は今では周瑜達のほうを重く持ち上げられて、私の甘言など耳を貸さぬ!」

重役A

「周瑜か、あの嘴黄色い軍師達め!」

重役B

「我ら普代な重臣を差し置いて、政事を左右するとはおごがましい!」

重役C

「張昭殿、かくなるうへは一刻もあの計画を……」

張昭

「うむ、すでに手はずは整っておる……」

重役A

「おお、それではついに……」

重役B

「戦狂いの孫堅と孫策達を倒し、あの方が孫家の舵取りなれば、必ずは我らが表部隊に立つ時が来る」

重役C

「事がなつた時の周瑜供の泣き面を早く見たいものですな」

重役達は笑いが止まらなかった。それをみた張昭はニヤリと静かに笑った

翌日

関羽一行は小蓮と孫尚香ガーベラのふるさとである長江へとやってきた

鈴々

「うわぁー、これが長江か!!」

張飛ガンダム

「でっけえーな!!」

長江の大きさに感激した鈴々と張飛ガンダム

孫尚香ガーベラ

「驚いた？」

小蓮

「すごいでしょう!!」

鈴々

「たしかにすごいけど・・・別にお前らが威張ることはないのだ」

小蓮

「うーん、この景色を見ると『帰ってきたー!!』って気になるわね」

愛紗

「『帰ってきたー!!』はいいが大丈夫か？尚香」

孫尚香ガーベラ

「何が？」

愛紗の問いに小蓮と孫尚香ガーベラが首をかしげる。と関羽ガンダムが答えた

関羽ガンダム

「お主達、家出したのであろう？旅に飽きて、戻るになったのは結構だが家族から大目玉を食らうのではないか？」

小蓮

「何言っているのよ？シャオ達は孫家で一番、愛されている姫たちなのよ！..」

孫尚香ガーベラ

「帰ってきて泣いて喜ばはしても、怒られることなんて絶対にないわよ」

しかし.....

孫静

「まったく！！貴方達は何を考えているのですか！！孫家の姫達が供を連れずにいなくなるなんて、皆がどれほど心配したかと..」

孫尚香ガーベラ

「あの...孫静叔母さま...」

小蓮

「それについてはシャオ達に言い分が...」

孫静

「そんなものではありません！！だいたい貴方達は・・・」

二人は見事に怒られているのであった。そして孫家をみた関羽一行は円をつくって話した

鈴々

「皆、おへそを出しているのだ」

張飛ガンダム

「それに真っ白い鎧を着けている奴らも多いぜ」

愛紗

「うむ、どうやらこの家の家風であろう」

関羽ガンダム

「何か意味があるのではないだろうか？」

朱里

「別に尚香さん達が残念な子ではなかったというわけですね」

孔明リ・ガズィ

「そうですね・・・」

すると・・・

孫堅ゼフィランサス

「孫静、そのくらいにしておけ」

孫静

「ですけど、義兄上」

孫堅ゼフィランサス

「これ以上叱りつけたらまた家出をしてしまうぞ」

孫堅ゼフィランサスの説得で孫静は説教を辞める

孫堅ゼフィランサス

「関羽とやら、娘達がずいぶんと迷惑をかけたようだな」

鈴々

「大迷惑なのだ!!」

張飛ガンダム

「そうだ、大迷惑だぜ!!」

関羽ガンダム

「こら、鈴々、張飛!!」

関羽ガンダムは鈴々と張飛ガンダムを叱りつけるのだが・・・

孫策サイサリス

「そうだろうな・・・」

雪蓮

「同情するわ」

小蓮

「雪蓮お姉様、孫策お兄様、ひどーい!!」

孫尚香ガーベラ

長生

「楼蘭．．．う．．．ううう．．．うおおおおおおおっ！
」

長生は愛人を失った悲しみに叫んでいたのであった。

そのころ、愛紗も蔵の外から出ると．．．

愛紗

「そんな．．．村が．．．」

そして、愛紗が見たものは．．．

愛紗

「兄様！！？」

賊によって殺された兄、愛閃の姿であった。

愛紗

「兄様．．．嘘．．．いや．．．いや．．．いやああああああ
あああ！！！！！！」

愛紗も兄を失った悲しみに耐えきれず、悲鳴を上げたのであった。

．．．．．

そして、目覚めた

愛紗

「夢か・・・しかし今になってあんな夢・・・」

関羽ガンダム

「しかも胸が苦しい・・・」

愛紗と関羽ガンダムは自分達の上を見ると寝ぼけた鈴々と張飛ガンダムがいた

愛紗、関羽ガンダム

「・・・って・・・お前らが原因か!!? (怒)」

そして、翌日

雪蓮と孫策サイサリスはテラスでくつろいでいた

雪蓮

「うーん!!」

そこへ冥琳と周瑜ヒヤクシキがやってきた

冥琳

「まだ、寝むそうね」

雪蓮

「昨夜はちょっと飲みすぎたから」

孫策サイサリス

「お前の場合はかなりだぞ。父上はどうしている?」

周瑜ヒヤクシキ

「昨日は飲みすぎたから今日一日は寝ていると言っている。しかし、関羽殿達とかなり話が弾んでいたそうだな」

孫策サイサリス

「ああ、二人とも、かなり腕も立つようだし、あのまま野においていくのは惜しいな」

雪蓮

「それにあとあの張飛達も面白い子達ね。もしあれ以上、大きくならなかったら庭で飼いたいくらい・・・」

雪蓮の頭の中には庭で飼われている鈴々と張飛ガンダムがいた

冥琳

「ふふ・・・お戯れを・・・」

孫策サイサリス

「ところでその客人達は起きているのか？」

周瑜ヒヤクシキ

「ああ、今朝、朝食をすんで、関羽殿達と張飛殿達は姫様達と山の狩り場へ・・・」

そして、四人は山のほうを見た

孫策サイサリス

「誰かつけているのか？」

冥琳

「案内役として思春と大史慈と陸遜を・・・」

雪蓮

「ならいいわ」

冥琳

「孔明殿達は書庫を見たいと言ってたから、隠が案内役をやっているわ」

書庫では朱里と孔明リ・ガズイと隠がいたのであった

朱里

「うわぁー、こんなにたくさんの書物、始めてみました」

隠

「政や軍略に関する物はもちろん、農工、天文、史書、暦、あらゆる書物がここに集められているのです」

孔明リ・ガズイ

「もしかして陸孫さんはこれを全部読まれたのですか？」

隠

「ええ、私、書物が大好きなんです。狩り場に行っている陸遜さんも同じなんですよ」

朱里

「私達もです」

すると隠の様子がおかしくなった。

隠

「書物っていいものですね。読むと新しい知識が波のように押し寄せてきて、それが体の一番、深い所に体を喜ばす魅力ときたら、あつは〜ん！！陸遜さんも来ればよかったですね」

隠は興奮状態となつて、モジモジしていた。（陸遜ゼータプラスはこれがトラウマとなつて、隠と一緒に書庫へ行きたがらないのである。）

朱里

「いえ、私達、そういうのとはちよつと違ふんですけど・・・」

そのころ、山の狩り場では愛紗と鈴々と関羽ガンダムと張飛ガンダムが小蓮と孫尚香ガーベラと一緒に狩りに出かけていた。護衛役及び案内よくとして、甘寧こと思春と大史慈ドムと陸遜ゼータプラスも一緒である。すると小蓮と孫尚香ガーベラがシィと一行を止めた。そして、二人は弓を構え始めた。すると茂みから二羽の山鳥が現れた。そして、二人は矢を放つと山鳥に当たり、墜落した

愛紗、関羽ガンダム

「「おお・・・」」

甘寧（真名・思春）

「お見事です。姫様」

大史慈ドム

「獲物は私と思春が取ってきますので」

そういうと思春と大史慈ドムは獲物が落ちたほうへ行つた

孫尚香ガーベラ

「頼むわ。思春、大史慈」

小蓮

「この前会った黄忠ほどじゃないけど弓にはちょっと自信があるのよね」

すると鈴々が・・・

鈴々

「ふん、薄い胸張って威張っても全然かっこがつかないのだ!!」

小蓮

「ちよっと、薄い胸とはなによ!!アンタのほうがよっぽどのつるぺったんのお子ちゃま体型じゃない!!」

鈴々

「温泉の時見たけど、お前のだって鈴々とたいして変わらないのだ!!」

張飛ガンダム

「そうだな、全然変わらねえぜ!!」

孫尚香ガーベラ

「言ったわね!!」

小蓮

「変わるかわらないか勝負しようじゃない!!」

鈴々

「望むところなのだ!!」

鈴々と張飛ガンダムと小蓮と孫尚香ガーベラは睨み始めた

陸遜ゼータプラス

「ちよっと、姫様!!」

愛紗

「何をくだらないことを・・・」

鈴々

「くだらないのだ!!」

小蓮

「そつよ!!おっぱい勝ち組は黙ってて!!」

関羽ガンダム

「いや・・・勝ち組って・・・／／／／／／／」

愛紗は自分の胸を隠した。すると・・・

小蓮

「張飛、あそこで乳比べよ!!」

鈴々

「わかったのだ!!」

張飛ガンダム

「やってやろつぜ!!」

孫尚香ガーベラ

「陸遜、アンタも来なさい!!」

陸遜ゼータプラス

「ええええ／／／／なんで僕もなんですか!!?」

そして、五人は茂みに入ると・・・

小蓮

「大きさ、形、感度の三番勝負だからね!!」

鈴々と小蓮は服を脱ぎ始めた。それを見た陸遜ゼータプラスは顔が真っ赤になった

陸遜ゼータプラス

「お二人とも、なんでお脱ぎになるのですか!!?／／／／／／／／／／／／／／／／」

おいてかれた愛紗と関羽ガンダムはため息をした

愛紗

「山鳥でも探すか・・・」

関羽ガンダム

「そうしますか・・・」

と歩くと、城のテラスでくつろいでいる雪蓮と孫策サイサリスと冥琳と周瑜ヒャクシキがいた。しかしこれがとんでもない事件を起こすことは誰も知らなかった

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われること』A（後書き）

B
パートへ続く

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われること』B（前書き）

Bパートです。本日からゲキレンジャーとのコラボ小説を連載します

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われること』B

その後のテラスでは事件が起こっていた。冥琳と周瑜ヒヤクシキが兵達に指示を出している

蓮華

「冥琳!!」

孫権ガンダム

「周瑜!!」

周瑜ヒヤクシキ

「若、蓮華様も」

蓮華と孫権ガンダムがやってきた。その事件とは……

蓮華

「姉様と兄様が襲われたって本当なの!？」

冥琳

「残念ながら……昼前、ここでくつろいでいられたときに、矢を射かけられて……」

孫権ガンダム

「矢を……!!?」

蓮華と孫権ガンダムは先ほど愛紗と関羽ガンダムがいた山のほうをみた

孫権ガンダム

「それで姉さんと兄さんの容態は？」

周瑜ヒヤクシキ

「矢傷は浅いのですが矢じりに毒が塗ってあって、傷口を毒を吸い取って、何とか一命を取り留めました。が・・・意識は戻らず・・・」

蓮華

「そんな・・・姉様・・・」

孫権ガンダム

「兄さん・・・」

時は昇って、朱里と孔明リ・ガズイが慌てて、走り出していた。そして・・・王間の中に入ると、手枷をかけられた愛紗と関羽ガンダムがいた

朱里

「関羽さん！！何があつたんですか！！？」

そして、今までのことを聞いた朱里と孔明リ・ガズイは驚いた

孔明リ・ガズイ

「関羽さん達が孫策さん達を暗殺しようとした！！？」

朱里

「何かの間違いです！！関羽さん達がそんな事をするなんて、絶対あり得ません！！証拠は・・・証拠はあるのですか？」

朱里の問いに蓮華は答えた

蓮華

「証拠はない・・・」

孔明リ・ガズイ

「それならなぜ！！？」

蓮華

「確たる証拠はないが、姉様達がいたところに矢を射かけるにはあの山の狩り場が絶好の場所なのだ！！姉様達が矢を受けた正にその時、そんなところ素性も知らない旅の武芸者がいたのだ。疑われるのは当然である」

孫権ガンダム

「俺も納得いかないけど蓮華の言うとおりだよ」

蓮華の推理に朱里と孔明リ・ガズイは納得しなかった

朱里

「当たり前じゃありません！！」

孔明リ・ガズイ

「たしか狩り場には御家中の方と一緒にではありませんか？」

孫権ガンダム

「ついていたけど、ずっと一緒だったのではないと思春も大史慈も言っている」

大史慈ドム

「孫策様達が矢を受けられたと思しき頃、私と思春は姫様達が射か

けた獲物を捕りに、関羽殿の下から離れました」

朱里

「それなら尚香さん達や陸遜さんが近くに・・・」

孫尚香ガーベラ

「その時に私達も関羽達の近くにはいなくて・・・」

小蓮と孫尚香ガーベラと陸遜ゼータプラスも申し訳なさそうに言った

鈴々

「けどだからって愛紗と関羽を疑うのはおかしいのだ!!」

朱里

「そうです。おかしいです!!甘寧さん、大史慈さん、貴方達は獲物を拾いに行くために関羽さん達のもとを離れたといいましたよね？」

思春

「いかにも」

大史慈ドム

「そのとおりだが・・・」

孔明リ・ガズイ

「なら孫策さん達が射られたとき、お二人も山の狩り場にはお二人しかいなかったということですね」

それを聞いた思春と大史慈ドムの表情が変わった

思春

「貴様ら、何が言いたい？」

朱里

「狩り場で関羽さんが怪しいなら、同じくらい二人しかいなかった甘寧さんや大史慈さんも怪しいということです」

思春

「なっ、ふざけるな！！！！私と大史慈は孫家に仕える身だぞ！！そんな私達が孫策様達の暗殺をすると思うのか！！！」

大史慈ドム

「いかに客人とはいえ、今の言葉、聞きずてならんぞ！！！」

孔明リ・ガズイ

「孫家に仕える身だからこそではありませんか？毎日のように顔を合わせる主君と臣下であればこそ、日々の軋轢、考えの違い、利害の不一致……。相手を殺してやりたいと思う可能性は、孫家とは何の関わりの無い旅の武芸者より、ずっと高い筈。違いますか？」

思春

「言わせておけば……」

大史慈ドム

「もう勘弁ならん！！！！！！！！！」

朱里と孔明リ・ガズイの問いに完全に切れ、思春は兵士から剣を奪い取り、大史慈ドムも自身の武器である棍棒を取り、それらを朱里と孔明リ・ガズイに向けた。それをみた孫権ガンダムは慌て始めた

孫権ガンダム

「二人ともそれじゃ話がこじれるだけだよ!!!」

思春

「お止にならないでください!!!孫権様!!!」

大史慈ドム

「武人をそこまで辱めておいたこの者達を許しておくわけには・・・」

朱里

「甘寧さん、大史慈さん!!!貴方達が誇り高き武人なら関羽さん達だつて同じです!!!それを確たる証拠もなく疑つて、こんな恥辱を与えることなど、それこそただではすまないことですよ!!!」

朱里の言葉に同様しつつも武器を治めようとはしない二人。すると・・・

孫堅ゼフィランサス

「やめぬか!!!」

そこへ王間に孫堅ゼフィランサスがやってきた

孫権ガンダム

「父上・・・」

孫堅ゼフィランサス

「まったく、何かと騒がしいと思って、来てみれば。とにかく話は聞いた。二人とも武器を下げる!!!」

思春

「大殿様、しかし……」

孫堅ゼフィランサス

「下げると言っている!!」

思春と大史慈ドムは武器を治めた。すると……

孫堅ゼフィランサス

「蓮華、孫権、どうやらいささか勇み足だったようだな。雪蓮と孫策が倒れて動揺しているのはワシにもわかる。だが、こんな時だからこそ冷静に物事を判断して、皆を率いるのが上に立つ者としての務め。そうではないか？」

それを聞いた蓮華と孫権ガンダムは……

孫権ガンダム

「父上の言うとおりで」

愛紗と関羽ガンダムの手枷を外したのであった。

蓮華

「関羽殿、すまなかった」

愛紗

「いえ、わかっていただければ……それで……」

すると……

フラフラ

突然、朱里が目を回して倒れてしまった。孔明リ・ガズイと隠も慌て始めた

隠

「うわああ!!? 大丈夫ですか? 孔明さん」

孔明リ・ガズイ

「朱里さん、やっぱり無理をしていましたね」

朱里

「はわわ〜ちょっと頑張りすぎちゃいました」

そして、その夜、蓮華と孫権ガンダムは雪蓮と孫策サイサリスの無事を祈っていた

蓮華

「姉様・・・」

孫権ガンダム

「兄さん・・・」

すると二人の部屋に孫静が入ってきた。

孫静

「孫権、まだ起きていたのですか?」

孫権ガンダム

「叔母上」

孫静

「孫策達の容態が気になるのはわかりますが、そんなことでは貴方達の砲が参ってしまうのですよ」

すると二蕎が慌てて、部屋へ入ってきた。

二蕎

「「孫権様、あつ・・・孫静様！！？」」

孫静

「どうしたのです？こんな夜更けに」

蓮華

「まさか、姉様と兄様が！！？」

小蕎

「いえ、その逆です。孫策様達のご容体は持ち直しました」

大蕎

「まだ意識がもうろうとしていますが。医者は峠を越したと・・・」

蓮華

「よかった・・・姉様、兄様・・・本当によかった・・・」

孫権ガンダム

「無事で・・・本当によかった」

大蕎

「しばらくは絶対安静ですが、熱が引けば会って話してもいいと・・・」

・
」

二人の無事を知った蓮華と孫権ガンダムは泣き崩れた

そのころ、ここは雪蓮と孫策サイサリスの部屋である。そんな・
中で何者が侵入してきた。そして、二人に近づくと針を取り出した。
すると・・・

雪蓮

「なるほど、その針の先端に毒が塗ってあるというわけですか・・・

」

孫策サイサリス

「ようやつと尻尾を出しましたね。・・・・・・叔母上」

雪蓮と孫策サイサリスが目覚めた。そして、その暗殺者の正体は・
・孫静であった

雪蓮

「私達の容態が回復したと聞いて、お忘れになられたのかしら？」

孫静

「孫策・・・そなたら・・・」

孫策サイサリス

「死にかけていたのではなかったのか！！？と言いたいのですか？」

雪蓮

「叔母上が私達と父様のことを快く思われていないのはわかりましたが、まさか、命まで取ろうとするとは・・・乱世とはいえ嘆かわ

しい限りです」

さらにそこへ冥琳と周瑜ヒヤクシキと兵達がやってきた

冥琳

「孫静様、恐れながら反逆の罪でお身柄を拘束させていただきます」

孫静

「周瑜、これは全て貴様らの企みか！！？それとも義兄上のか！！？」

周瑜ヒヤクシキ

「ご想像にお任せします」

兵に拘束された孫静は・・・

孫静

「孫策、そなたらのやっていることは間違っておる！！どれだけ多くの物を得ようと、そのために流されたおびただしい血が孫家に襲い掛かるであろう！！」

孫策サイサリス

「二人の孫堅の意思を継ぐと決めた時から、それは承知の上だ！！しかし、叔母上！！」

雪蓮

「たとえどれだけ血を流そうとも私達には手に入れたいものがあるのです！！」

孫策サイサリス

「連れて行け」

そのころ、孫堅ゼフィランサスとはある部屋に来ていた。それは重役の一人である張昭の部屋であった。実は張昭は反逆者側にわざと入っているのである。

張昭

「そうですか、終わりましたか」

孫堅ゼフィランサス

「ああ、全て滞りなく」

張昭

「あとはこれに名を連ねた者たちの始末ですな。こたびに際し作った連判状です。反逆の揺るがぬ証拠となりますぞ」

孫堅ゼフィランサス

「張昭よ。礼を言うぞ」

張昭

「しかし、関羽達には悪いことをしてしまいましたな」

孫堅ゼフィランサス

「あの時、偶然いた時から身の不運だが、まさか蓮華と孫権が本当はいもしない暗殺の下手人を捕まえるとは……冥琳と周瑜も驚いておったぞ」

張昭

「名軍師殿達も知能も豊富であっても、全てを見通すことはできぬということですね」

こうして反逆者達は全員逮捕されたのであった。

そして、翌日、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイが江東を出発しようとしていた。蓮華と孫権ガンダムと小蓮と孫尚香ガーベラと隠と陸遜ゼータプラスが見送りをしていた

隠

「もっと、書物の話がしたかったのに」

朱里

「陸遜さん、私達もです」

隠

「気が向いたら、お手紙下さいね」

孔明リ・ガズイ

「はい、かならず!!」

小蓮

「この間は決着つかなかったけれど、今度は大きさ・形、色、つや、感度、弾力、味の名番勝負だからね!!」

鈴々

「望むところなのだ!!」

張飛ガンダム

「受けて立つぜ!!」

孫尚香ガーベラ

「陸遜、今度は逃げないでよね!!」

陸遜ゼータプラス

「なんで僕なんですか!!!!? / / / / /」

愛紗

「ってお主らまだそんなことを・・・」

蓮華

「関羽殿・・・」

すると、蓮華と孫権ガンダムが愛紗と関羽ガンダムに語りかけた

蓮華

「こたびのこと、そなた達には何とお詫びしてよい事やら・・・」

「

関羽ガンダム

「何度も申しあげましたように、そのことはもう・・・」

孫権ガンダム

「あの時、俺達はどうかしていたんだ。すっかり気が動転して、何の罪もないそなた達を疑いをかけてしまった」

蓮華

「まったく、人の上に立つ者としてあるまじき行為だ」

暗い顔をしている蓮華と孫権ガンダムに愛紗と関羽ガンダムはこう言った

関羽ガンダム

「過ちを改めらず、すなわちこれを過ちという。人間だれしも過ちを起こすことがあるものなのです」

愛紗

「過ちを犯した後、それに気づいて謝罪して、反省して、同じ過ちを繰り返すまいとする。それができる貴方達は人の上に立つ者としての資質はあると私達は思います」

蓮華

「関羽殿……」

二人の言葉に涙ぐむ、蓮華と孫権ガンダム

関羽ガンダム

「さあ、我らの旅立ち、笑顔で見送って差し上げますよな？」

しかし、関羽ガンダムの言葉で笑顔になる二人で会った。そして、船は出発した

愛紗

「いやー、船旅はいいものだな」

関羽ガンダム

「こうやってのんびりしているだけで目的地に着くとは思議なものです」

張飛ガンダム

「本当だぜ……」

鈴々

「陸の上もこれでいけば楽なのだ」

すると朱里と孔明リ・ガズイの顔が険しかった。

関羽ガンダム

「どうしたのです、孔明殿？船酔いですか？」

朱里

「あつ、いえ、ちょっと気になることがあつて……」

愛紗

「気になること？」

孔明リ・ガズイ

「はい、今回のことつて、単なる暗殺未遂事件でしょうか？何かあらゆることがあまりも出来すぎるような気がして、まるでお芝居のように、何か筋書きをしている者がいるということなのです。そんな気がするのです」

朱里と孔明リ・ガズイの言葉に疑問を思う四兄妹であった。

そのころ、隠と陸遜ゼータプラスが書簡で仕事をやっている冥琳と周喻ヒヤクシキの元へとやってきた

陸遜ゼータプラス

「お師匠様」

冥琳

「隠と陸孫か。見送りは済んだの？」

隠

「はい」

周瑜ヒヤクシキ

「隠、陸遜。お前達、孔明達の事をどう思う？」

隠

「そうですね。あの年にして利と正論と演説」

陸遜ゼータプラス

「剣を鼻先に突きつけられても一歩もひかなかった胆力。この先、どのくらい、のびるか楽しみかと・・・」

冥琳

「楽しみか・・・私達には恐ろしいと思ったのだが」

周瑜ヒヤクシキ

「なぜだが、分らぬのだが、あの者達が、いつか我らの前に立ちはかかるような気がする。時が来たら、あの際にふさわしい立場を得たらな・・・」

こうして、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは江東を出発したのであった。

第10話『孫策・雪蓮、命を狙われること』B（後書き）

次回予告

大蕎

「周瑜様、お茶が入りましたよ」

周瑜ヒヤクシキ

「すまぬな大蕎。」

一号

「そこまでだ！！確たる証拠がないまま武將にあんな恥辱を与えるとは天が許してもこの華蝶仮面が・・・」

冥琳

「おい、華蝶だか時超だか知らんが本編は終わったぞ。」

一号

「しまった・・・おそかったか・・・ならばせめて予告だけでも・・・」

小蕎

「次回 第11話『関羽、愛紗・劉備と出会ったこと』」

一号

「くっ・・・ならば代わりに一曲・・・」

冥琳、周瑜ヒヤクシキ

「「歌わなくていいから、とっと帰れ！！」」

第11話『関羽、愛紗・劉備と出会うこと』A（前書き）

最新話です。あと偽劉備が持っているのは龍帝剣と龍神剣（恋姫三国伝参考）に変更します

第11話『関羽、愛紗・劉備と会うこと』A

ここは四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイが野宿している洞窟である。
愛紗と関羽ガンダムはまたうなされていた。あの時の夢を再び見始めていたのであった。そして……

愛紗

「はっ……夢か……」

関羽ガンダム

「まったく……鈴々、張飛。お前達のせいでまた変な夢を……」

とみるが……鈴々と張飛ガンダムは朱里と孔明リ・ガズイと眠っていたのであった。

愛紗

「顔洗ってくるか」

関羽ガンダム

「拙者も行くでしょう」

あくびをしながら愛紗と関羽ガンダムは洞窟から出ると……そこには

たくさんの賊と戦っている兵士達の姿が見えた……

第11話『関羽、愛紗・劉備と会うこと』

あまりのできごとに呆然と見てしまう愛紗と関羽ガンダムであった。

すると・・・二人の賊が兵士を斬ろうとしていた

愛紗

「やめろ!!」

賊 A

「なんだ!?! てめえらも義勇軍の仲間か!?!」

関羽ガンダム

「あつ・・・いや・・・」

賊 B

「覚悟しやがれ!!」

賊二人が斬りかかろうとするが、愛紗と関羽ガンダムが剣を受け止めた。すると朱里と孔明リ・ガズイが洞窟から出てきた

朱里

「関羽さん・・・どうしたんですか?」

孔明リ・ガズイ

「なんか騒がしいですけど」

愛紗

「孔明殿、戻れ!! 鈴々と張飛を起こしてくれ!!」

関羽ガンダム

「それから我らの堰月刀を・・・」

朱里と孔明リ・ガズイは慌てて、洞窟に引き返した。そして、愛紗

と関羽ガンダムも抑え込まれそうになってきた。しかし、蹴り飛ばすことに成功した。賊二人は愛紗と関羽ガンダムに斬りかかろうとするが……鈴々と張飛ガンダムが受け止めたのであった

愛紗

「鈴々!!」

関羽ガンダム

「張飛!!」

鈴々、張飛ガンダム

「「うりゃああああああああ!!」」

朱里

「関羽さん!!」って……はわわわわ……」

愛紗

「すまぬ!!」

関羽ガンダム

「かたじけない」

そこへ二人の武器である堰月刀を持った朱里と孔明リ・ガズイがやってきた。朱里が転んでしまい、青龍堰月刀を投げ出してしまったが、愛紗はそれを受け取った。そして、関羽ガンダムもまた孔明リ・ガズイから鬼牙堰月刀を受け取ると……

愛紗

「なんだかよくわからぬがひと暴れするぞ!!」

鈴々

「わかったのだ!!」

関羽ガンダム

「行くぞ!!」

張飛ガンダム

「よっしゃー!!」

そして、四兄妹は戦い始めた。愛紗と鈴々はそれぞれの武勇で敵を倒していき・

関羽ガンダム

「鬼牙百烈撃!!」

張飛ガンダム

「爆裂大雷蛇!!」

関羽ガンダムと張飛ガンダムの必殺技で賊の数を次次へと減らしていくのであった

賊C

「なんだ・・・こいつら・・・」

賊D

「こんなのとやりあってたら命がいくつあっても足りないぜ」

賊達は敵わないと思い、逃げ出したのであった。それをみた馬に乗っている義勇軍の大将は・・・

義勇軍大将

「おい、何をしている！！敵は崩れてたぞ！！押し返せ！！」

そして、義勇軍の勝利に終わったのであった。戦いが終わると先ほどの義勇軍の大将が四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイの元へとやってきた

義勇軍の大将

「いやー、どこのどなたか存じませぬが加勢いただき、かたじけない。私は火の義勇軍を率いている劉備、字を玄德といいます。以後お見知りおきを」

愛紗は劉備の顔に見とれていた

愛紗

「私達は関羽、字を雲長と申します。これらは妹分と弟分の張飛。こちらは……」

朱里

「共に孔明と申します」

孔明リ・ガズイ

「よろしく願います」

劉備

「関羽殿に張飛殿に、そして、孔明殿か」

すると劉備が愛紗と関羽ガンダムを見て気付いた

劉備

「もしや、先ほどのお手並み、そしてその髪と髭。もしかして貴方達はもしやあの黒髪と鬼髭の山賊狩りでは……」

愛紗

「あつ……いや……一応……」

関羽ガンダム

「そのように言われておりますが……」

どうせ噂とは違うといわれると思い、落ち込み始める愛紗であった。

劉備

「おおそうでしたか、絶世の美女と言われる美しさと鬼髭と呼ばれる屈強の侠と……」

愛紗

「あつ……あの……!? 今、私のことをなんと……!?」

劉備

「噂に違わず、お美しいと……」

劉備の一言で愛紗は顔を赤らめた

関羽ガンダム

（愛紗殿をそのように思われる人は始めてみましたぞ）

愛紗

「あ……え……それはどうも……その……」

そして、六人が義勇軍と共にやってきたのが徐州の桃花村であった。

すると・・・

民

「どうしたね？義勇軍の大將さん、まるで勝って帰って来た様子じゃが」

劉備

「勝って帰ってきたのだ！！」

民

「おっー、そうか、そうか勝って帰ってきたのか・・・えええ！！！？」

勝って帰ってきたことに驚きを隠せない民。そして、四兄妹と朱里と孔明り・ガズイは劉備と共に桃花村の屋敷へとやってきた。その当主である陶謙ジムも加えて話を始めた

陶謙ジム

「いやはやー、劉備殿が勝って戻られるとは長生きもするものな・・・」

劉備

「陶謙殿・・・」

愛紗

「あの劉備殿の義勇軍。それほど負け続けたのですか？」

陶謙ジム

「ええ、それはもう・・・はあー」

ざ出陣……となつたのですが……七度出陣して、七度負けるというありさまで、さすがに今回負けて帰ってきたら村を出て行ってもらおうと思いましたが……」

劉備

「まあ、いいではないかこれまでのことは……とにかく勝つたのだから……」

そして、劉備は愛紗と関羽ガンダムに視線を向けた

劉備

「関羽殿、お聞きの通りのありさまで真に恥ずかしい限りなのだが、暴虐非道な賊共を討ち、この村の平和を取り戻すため、私に力を貸してもらえないだろうか？」

こうして、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは義勇軍に加わつたのであつた

その日の夜、愛紗は風呂につかっていた

愛紗

「劉備殿か……あの人……どこか兄様に似ていたな……」

そのころ、関羽ガンダムは屋根の上にいた

関羽ガンダム

「劉備殿……あの人が拙者の求めていた当主なのか……どう思う、楼蘭？」

そして、翌日、義勇軍は賊と戦っていた。そして、朱里と孔明リ・

ガズイが作戦を説明していた

朱里

「いいですか？まず小人数の部隊を出して、砦の賊達を挑発します」
孔明リ・ガズイ

「挑発に乗った賊達が砦から出てきたら少しだけ戦って、囷の部隊はすぐに後退させてください」

そして、戦いは激化していく。そして・・・

義勇兵

「よし、退け！！退け、退け！！」

囷部隊は後退したのであった。そして、砦から賊達の頭である馬元義ザクが出てきた

馬元義ザク

「者ども！！腰ぬけの義勇軍など蹴散らしてやれ！！」

賊

「おおおおおっー！！！！」

賊達は囷部隊を追いかけ始めた

朱里

「そして、賊達をこの谷に誘い込みます」

朱里の示した谷へとやってきた賊達であったが、銅鑼の音に足を止めた

馬元義ザク

「な・・・なんだ!!?」

そして、左右からは関羽部隊と張飛部隊の義勇軍が現れた

馬元義ザク

「し・・・しまった!!? 罠か!?」

愛紗

「乱世の常時、善良な民達を苦しめる賊達め!!」

関羽ガンダム

「その命運、ここで尽きたとしれ!!」

鈴々

「けちよんけちよんにしてやるのだ!!」

張飛ガンダム

「覚悟しやがれ!!」

そして、義勇軍は賊達に追撃を始めたのであった

孔明リ・ガズイ

「敵が谷の中ほどまで来たら、谷の両側に待機している関羽さん達と張飛さん達の部隊で一斉に攻撃します」

朱里

「そして、劉備さんは別の一体を率いて・・・」

義勇軍の攻撃から馬元義ザクは逃げて、砦へと向かっていた

馬元義ザク

「くそ、義勇軍の奴らめ、こざかしいことを……一旦、皆に戻って、出直しだ」

馬元義ザクは皆へと戻ってきた

馬元義ザク

「おい、門を開ける!!」

次の瞬間、皆から劉備軍の旗が揚げた。そうすでに劉備の部隊によって皆は落ちたのである

劉備

「一足、遅かったな。この皆は我ら義勇軍がいただいたぞ!!」

馬元義ザク

「なっ……」

そして、義勇軍と賊達の戦いは激化していた

愛紗と関羽ガンダムの部隊は韓遂デザートザクと周倉トーベンウルフの部隊と戦っていた

愛紗

「はああああああああああ!!!!」

関羽ガンダム

「うおおおおおおおお!!!!!!!!」

愛紗と関羽ガンダムの攻撃を受け止め続けていた周倉ドーベンウルフは・・・

周倉ドーベンウルフ

「バカな・・・この俺様が押されている。なぜだ！！？この女と侠、こんなに大きく見える！！」

それをみた韓遂デザートザクは・・・

韓遂デザートザク

「どけ！！そいつらはワシがやる！！」

韓遂デザートザクは愛紗と関羽ガンダムに襲いかかるうとしたが・・・

愛紗

「はああああああああああ！！！！！！」

韓遂デザートザク

「ぎゃああああああああああ、ワシの腕が！！？」

韓遂デザートザクの左腕を切り落として、勝利したのであった

鈴々と張飛ガンダムの部隊は厳白虎ドワッジと厳興ドム・トロープと戦っていた

鈴々

「うりやりやりやりやり！！！！！！」

張飛ガンダム

「どりゃあああああああああああ！！！！」

敵白虎ドワッジ、敵興ドム・トローパーン

「ぎゃあああああああああああ！！！！」

こちらも快勝であつた

こうして、義勇軍は連戦連勝続きで会つた

そして、桃花村の屋敷では宴会が行われていた。鈴々と張飛ガンダムと朱里と孔明リ・ガズイは御馳走を堪能していた。そこへ陶謙ジムがやってきた

陶謙ジム

「いやいや、関羽殿達が義勇軍に加わってから、連戦連勝。この辺りもすっかり平和になりました。しかし、関羽殿達の武勇もさながら、孔明殿達の知略には恐れ入りました。まさに天翔龍の名を受け継ぐかもしれぬ名軍師です！！」

陶謙ジムの一言に恥ずかしがる朱里であつたが、孔明リ・ガズイは冷静であつた

朱里

「はわわ、名軍師だなんて／＼／＼／＼」

孔明リ・ガズイ

「私達はちよつとした助言を皆さんにしていただけで・・・」

鈴々

「そうなのだ！！」

そんな中で輪に入っただのが骨付き肉を食らいつく鈴々と酒を飲んでいる張飛ガンダムであつた

張飛ガンダム

「俺様達と愛紗とヒゲがいれば、小難しい策なんか立てなくても、賊退治なんかちよいちよいのぷーだぜ!!」

陶謙ジム

「さすがは張飛殿、勇ましいことすな!!」

大いに笑い始める鈴々と張飛ガンダムと陶謙ジム。ムツとした表情になる朱里と孔明リ・ガズイであつた

そのころ、愛紗と関羽ガンダムは夜空を眺めていた。すると・・・

劉備

「関羽殿」

そこへ劉備がやってきた

愛紗

「劉備殿」

劉備

「どうしました？何か宴で気に入らぬことでも？」

関羽ガンダム

「あつ、いえただ・・・月があまりにもきれいなものでしたから・・・」

劉備

「月？」

劉備は月のほうを見た

劉備

「これは美しい。もっとも女性である関羽殿、貴方の美しさには及びませんが……」

関羽ガンダム

「なっ!!?」

愛紗

「何を言って……からかつては困ります」

関羽ガンダム

「そうですぞ」

劉備の発言に驚いて恥ずかしくなってしまう愛紗

劉備

「女性の関羽殿、いきなりこんなこと言って迷惑かもしれぬが、この先、私とずっと一緒にいていただけないだろうか？もちろん侠の関羽殿も含めて」

愛紗

「それって……もしかして……// // //」

劉備

「私のようなものが貴方達のような豪傑の主とっていない。しかし、私とていつまでもこのまゐるつもりはない。賊を退治することとで名声を上げて、より多くの兵を養い、いずれは人過度の将として身を立てるつもりだ。そのためにはあなた達の力が必要なのだ」

愛紗

「あついや……（いつしよにいてって……そういうこと……）」

劉備の言葉の真意にがっかりする愛紗。

劉備

「どうだ？ 関羽殿、私に仕えてはくれぬだろうか？」

関羽ガンダム

「え……いや……」

愛紗

「そういうことでしたら……」

そついうと劉備は愛紗の手を握った

劉備

「おお、承知してくれるのですか？」

愛紗

「いや……その……」

すると……

鈴々

「あつー、こんなところにいたのだ!!」

張飛ガンダム

「ようやくみつけたぜ!!」

鈴々と張飛ガンダムがやってきたのであった。愛紗は慌てて、劉備を押し倒した。関羽ガンダムも劉備に近づく

鈴々

「ごちそう、あと少ししかないから早く来ないと……」

張飛ガンダム

「酒も早くしないとなくなるぜ!!」

二人が来ると……愛紗と関羽ガンダムは柱にしがみついていたのであった

鈴々

「何しているのだ？」

第11話『関羽、愛紗・劉備と出会うこと』A（後書き）

Bパートへ続く

第11話『関羽、愛紗・劉備と出会ったこと』 B（前書き）

まさかの連続投稿です

第11話『関羽、愛紗・劉備と会うこと』B

翌日、四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイは薬草探しをしていた

関羽ガンダム

「孔明殿、薬草積みはこれくらいでよいのでは？」

朱里

「はい、もうすこしだけ・・・」

愛紗

「だが、もうそろそろ日も暮れるだろう」

孔明リ・ガズイ

「すみません。あと少しだけ、こここのところ戦続きだけが人が増えていますから、すこしでも手持ちの薬草を増やしたくて・・・
ああ、朱里さん、あれを！！」

朱里

「え！？・・・あっ！！」

突然、朱里と孔明リ・ガズイが走り出した。その先には二厘の薬草があつた。

愛紗

「どうした？」

朱里

「見てください。これは三日草と言って、熱を下げるのにすごく効

「果がある薬草なんです」

関羽ガンダム

「ほおー。珍しい形の花なんだな」

孔明リ・ガズイ

「動物の死骸に寄生して、一日で目が出て、二日で葉を茂らせて、三日で花を咲かせることから、三日草というんですけど、四日で枯れてしまふからめつたに見つかからない貴重なものなんです」

そして、朱里と孔明リ・ガズイは三日草を抜いた。すると突然、四兄妹が青ざめた顔となつて、指をさした。

朱里、孔明リ・ガズイ

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

朱里と孔明リ・ガズイが三日草を見ると……そこにはやつれた顔となった翠と馬超ブルーディスティニーがあった

朱里

「はわわわわわわわわわわわわ!!!!?」

孔明リ・ガズイ

「うわあああああああああ！！！！！」

朱里と孔明リ・ガズイは驚いて、翠と馬超ブルーディステイナーを投げ飛ばした。ご丁寧には三日草が握られていた

その後、屋敷では翠と馬超ブルーディステニーは食事をとった

愛紗

「それにしても馬超。あんなところに生き倒れになっているとはいったい何があったのだ？」

翠

「ひつはむひゃひゅぎょうのひょひゅうでろぎんがそこをついてしまつて……」

翠はわけを話すが、食べながらなので訳がわからなかったのであった

鈴々

「何を言っているのか全然わからないのだ」

そういうと鈴々と張飛ガンダムは骨付き肉とおにぎりを取ろうとしたが、翠と馬超ブルーデイスティニーに取られてしまった。そして二人はそれを一口で食べ、ラーメンのスープを飲みほした

翠

「いやー、だからさ。武者修行の途中で路銀が底について、腹ペコになって困っていたとき、ほら、あの許緒という大食いのチビ。山で野草をたくさん撮ったことを思い出してさ」

馬超ブルーデイスティニー

「俺達も探してみたんだけど、どれが食えるのか分らなくなてな。とりあえず適当に生えている茸を焼いて食ってみたら、これが大当たりで……」

翠

「すぐに眼の前がぐるぐるして、しばらくすると耳のでっかいネズミや、くわくわうるさいアヒルが現れて、気がついたらそいつらと

一晩中、高笑いしながら山の中を走り回って、その挙句、力つきて、朝までばったりと・・・・・・・・」

翠の訳わからない言葉に孔明リ・ガズイは・・・

孔明リ・ガズイ

「馬超さん達が食べたのはサイケ茸だと思います。幻覚作用があつて、並の神経をしている人なら笑い死にしていたかもしれませんが・・・・・・・・」

関羽ガンダム

「まあ、こいつらは並の神経をしていないかもしれぬな・・・・・・・・」

愛紗と関羽ガンダムは寝ている翠と馬超ブルーディスティニーを見て、そう思ったのであった。

その夜、部屋で寝ていた翠と馬超ブルーディスティニーは目を覚ました

翠

「うゝ、おしっこ。馬超、一緒に来てくれ・・・・・・・・」

馬超ブルーディスティニー

「わ・・・わかった」

翠と馬超ブルーディスティニーは厠と向かった

翠

「やばい、やばい、厠はどこなんだ？早くしないと・・・もれちゃう・・・・・・・・」

すると、翠と馬超ブルーディステイニーは何かを見つけた。それは見張りの兵士達であつたが……

翠

「て……………」

馬超ブルーディステイニー

「て……………」

翠、馬超ブルーディステイニー

「敵襲だ！！！！！！」

二人は勘違いをしてしまったのであつた。

翠

「皆、起きろ！！」

馬超ブルーディステイニー

「敵襲だ！！敵襲！！！！」

翠と馬超ブルーディステイニーは走り出した。

その後、場は大広間に移つた。一同は大笑いであつた。

翠

「そんなに笑わなくてもいいだろ……………」

馬超ブルーディステイニー

「まったくだぜ……………」

鈴々

「けどけど、見張りの兵士を敵襲と間違えるなんておっちょこちょいにもほどがあるのだ」

張飛ガンダム

「だっせーの!!」

馬超ブルーデイスティニー

「しょうがねえだろ。まさかここが義勇軍の本拠地になっているなんて知らなかったから」

翠

「武器を持った奴がうろろしていたら、勘違いするに決まっているだろ」

鈴々

「あの時の馬超達の慌てぶりの顔ときたら・・・プププ・・・」

笑いをこらえる鈴々と張飛ガンダムにムツとなる翠と馬超ブルーデイスティニー。すると愛紗と関羽ガンダムが・・・

愛紗

「鈴々、張飛。いつまでも人の失敗を笑うのはよくないぞ・・・
くくく」

関羽ガンダム

「そうだぞ・・・くくくくくく」

翠

「って自分達も笑ってるじゃん。こっちはちびっちゃたのに」

馬超ブルーディスティニー

「あつ、翠！！！！？」

愛紗、関羽ガンダム

「「え！？」」

翠

「／／／／／／／／／！！！！？」

関羽ガンダム

「今、なんと？」

翠

「なんでもない、なんでもないってば」

顔を赤くする翠。すると朱里と孔明リ・ガズイが……………

朱里

「でもこれはいい機会かもしれませんね。今回は寝ぼけた馬超さん達の勘違いでしたけれど、本当に敵が攻めてきたことも考えたほうがいいと思います」

劉備

「一応、それりに兵達に見回りをさせているのだが」

孔明リ・ガズイ

「いえ、それだけでは不十分です。村の何箇所かに見張りのためのやぐらを設け、いざという時はこの屋敷にこもって戦えるよう、堀

を掘ったり、坪を高くすべきでしょう」

劉備

「孔明殿達の考えもわからんでもないが、何もそこまですることはないと」

朱里

「劉備さん、備えあれば憂いなしです」

翌日、兵士達は朱里と孔明リ・ガズイの言うとおり、堀を掘ったり、坪を立てていた。しかし、鈴々と張飛ガンダムは座っていて、何かを見ていた。そこへ翠と馬超ブルーディスティニーがやってきた

翠

「あと少しで完成だな。ん・・・どうしたんだよ？ぶっちょ面なんかして」

張飛ガンダム

「気にいらねえな」

馬超ブルーディスティニー

「気に入らねえって、孔明達のことか？」

鈴々

「そうじゃなくってあいつのほうなのだー!!」

翠

「あいつって劉備殿のことか？」

どうやら、鈴々と張飛ガンダムは劉備のことが気に入らなかったら

しい

鈴々

「あいつ、戦いの時は後ろにいて、全然、前に出てこないのだ。大将のくせにとんだ臆病ものなのだ!!」

翠

「戦は大将がやられたら、それまでだからな」

馬超ブルーデイスティニー

「そういう戦い方もあるさ。ま、そういうの俺達はある限り好きじゃねえけど・・・」

張飛ガンダム

「それによ。賊のアジトから取り戻した宝。全部の個々の倉に閉じ込めて、独り占めしているんだぜ!!」

翠

「独り占めって・・・それは軍資金にするためであって、別に自分の物にしているわけではないだろ」

張飛ガンダム

「馬超達も愛紗やヒゲと同じこと言うのかよ!!」

馬超ブルーデイスティニー

「え!?! まあそりゃ、普通に考えたらそうだろうって・・・」

鈴々

「もついいのだ!!」

翠

「なっ、おい、張飛!!」

そついうと鈴々と張飛ガンダムは走り出した。翠と馬超ブルーデイスティニーは呆然と見ていた

翠

「やれやれ、大好きなお姉ちゃんやお兄ちゃんを取られた妹と弟のやきもちか」

馬超ブルーデイスティニー

「そつだな」

翠と馬超ブルーデイスティニーがやれやれと嘆くと……空から雪が降ってきた

翠

「雪か……」

翌日、雪が積もっていた。鈴々と張飛ガンダムは外へ出た

鈴々

「うわぁー、真っ白……ぶへえ!!?」

張飛ガンダム

「どうしたん……ぶへえ!!?」

突然、二人の顔に雪玉が当たった。

張飛ガンダム

「何しやがるんだ！！この野郎！！！」

そこへ三人の子供達が出てきた

少年

「べえー」

少女A

「悔しかったらここまでおいで」

少女B

「おいで」

鈴々

「むつきー！！！！今すぐ行ってやるから覚悟するのだ！！」

張飛ガンダム

「お前ら、覚悟しやがれ！！」

・ 鈴々と張飛ガンダムが怒って、子供達の所に向かった。すると・・・

ズボ！！

鈴々

「うわ！！」

張飛ガンダム

「どわ！！？」

案の定、落とし穴にはまってしまった。そこへ子供達が向かった

少年

「やーい、引っ掛かった、引っ掛かった」

少女A

「義勇軍なのに大したことねえーの」

少女B

「ねえーの」

鈴々

「ぐぐぐ……一生の不覚なのだ」

張飛ガンダム

「まんまとやられたぜ」

見事はまってしまった落とし穴の中で、二人はひっかかった己を恥じていた（ちなみに張飛ガンダムの上に鈴々が落ちてきた状態である）。

その後、部屋に戻った二人は……

鈴々

「へっくち」

張飛ガンダム

「ぶへえくよん!!」

盛大なくしゃみをしていた。そこへタオルを持ってきた愛紗と関羽

ガンダムがやってきた

張飛ガンダム

「まったくんでもない悪ガキだぜ!!」

愛紗

「そうか、とんでもない悪ガキどもか」

関羽ガンダム

「まったくですな」

愛紗と関羽ガンダムはなぜか笑っていた

鈴々

「何がおかしいのだ？」

関羽ガンダム

「いやいたずら好きの悪ガキどもと聞いて、お前達と初めて会った時のことを思い出してな」

鈴々

「ん？」

愛紗

「『鈴々・張飛・山賊団のお通りなのだ!!』」

鈴々

「鈴々・張飛・山賊団はあんなへなちよこなのとは違っのだ」

張飛ガンダム

「一緒にすじゃねえーの!!」

愛紗

「まーそういうな。あの子達がいたずらしたのは案外、お前達と仲良くなりたいと思うぞ」

鈴々

「仲良くしたいからいたずらするなんて訳わからないのだ。例え、もしそうだとして鈴々はある奴らと絶対仲良くしないのだ!!!」

張飛ガンダム

「俺様だって仲良くしないぜ!!」

そういう鈴々と張飛ガンダムであった。しかし・・・

翌日

鈴々

「にやつはー!!!『鈴々・張飛・義勇軍』のお通りなのだー!!!」

張飛ガンダム

「おらおらどけどけー!!!邪魔するとブタにはねられるぞー!!!」

少女B

「なのだ!!!」

すっかり仲良くなっていたのであった。そのあと鈴々・張飛・義勇軍は枯れ木がたくさんある広場に集まった

少女 A

「ねえ、おやびん」

鈴々

「おやびんじゃなくって大将なのだ」

張飛ガンダム

「俺様のこともそう呼んでくれ」

少女 A

「じゃあ大将。次は何して遊ぶ？」

鈴々と張飛ガンダムは考えると……

少女 B

「お花見」

少年

「バカだな。まだ花が咲いていないのにお花見なんてできるかよ！」

張飛ガンダム

「この村、花見ができるところがあるのか？」

少年

「ここだよ。ここ」

少女 A

「満開になったらすごいんだよ。ぶわーと桃の花がいっぱいになって」

少年

「だからこの村、桃の花の村と書いて桃花村というんだ」

鈴々

「ふうーん、よしここの桃の花が咲いたら皆でお花見するのだ！
！」

義勇軍

「「「「おつー！！」「」「」

そのころ、離れたところの茶店では紫苑・璃々親子と黄忠ガンダム
がくつろいでいた

紫苑

「璃々、そろそろ行きましょうか」

璃々

「うん！！」

黄忠ガンダム

「口の周りがべたべたじゃな。紫苑」

紫苑

「はい、きれい、きれいしましょうね」

紫苑は璃々の口の周りをハンカチで拭いた。そして、お勘定をすま
せると

主人

「へい、確かに」

黄忠ガンダム

「主人よ。桃花村まではどのくらいかかるかのう？」

主人

「桃花村？あつー、最近、義勇軍が旗揚げして、近くの賊達を成敗しているという」

紫苑

「ええ、そうです。その村です」

店主

「そうだな。ここからまだ山を二つ三つ越さんとならんから、子連れと老人の足だと四五日、かかるかもしれんな。もしかしてあんたら義勇軍に参加するつもりかね？」

黄忠ガンダム

「うむ、以前ワシらが世話になった関羽殿達が義勇軍で將軍をやっているという噂で聞いたからのう」

紫苑

「それで力を貸そうと思って」

紫苑と璃々と黄忠ガンダムが去り、店主が店の中に戻ると、先ほどの話を聞いたマントを着た少女と侠が……

???

「主人」

店主

「へい、なんでしょ？」

????2

「桃花村の義勇軍の話、詳しく聞かせてもらえませんか？」

二人が振り向いた。それは行方不明となっていたはずの星と趙雲ガ
ンダムであった

こうして、新たな豪傑と英傑が集まろうとしていた

第11話『関羽、愛紗・劉備と会うこと』B（後書き）

次回予告

愛紗

「ねえ、長生殿、どうすれば長生殿や兄様のように大きくなれるの？」

長生

「よく食べて、よく寝て、よく遊べばすぐに大きくなれるさ」

愛紗

「本当に！！？本当にそれでおおきくなれる？」

長生

「あとはそつだな。志を胸に抱くんだ。そうすればすぐに大きくなれる」

愛紗

「わかった。私ね志を胸に抱くね。それで長生殿や兄様のように大きくなる」

??? ?

「次回 第12話『関羽、愛紗・志を貫くこと』」

第12話『関羽、愛紗・志を貫くこと』A（前書き）

無印編の最終話です

第12話『関羽、愛紗・志を貫くこと』A

朱里と孔明リ・ガズイのおかげで更に頑強となった桃花村の砦。そんなある日のこと

関羽ガンダム

「官軍から参陣要請？」

劉備

「ああ、なんでも州境で領民が大規模な反乱を起こしたらしい」

愛紗

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

劉備

「討伐隊を出したのだが、一向に乱を鎮める様子がなく。結局、大將軍の何進と朱儁自らが兵を率いることになったのだが、我らの活躍がその耳に届いたらしく、朝邸に忠誠を誓う個々ざしがあれば、我が軍に参加せよと・・・」

鈴々

「漢王朝の偉い人もやつと鈴々達のすごさに気付いたってことなのだ！！」

張飛ガンダム

「そうだな！！」

馬超ブルーディスティニー

「成り上がり者の何進とへたれの朱儁の下につくというのは気に入

らないが……」

翠

「この際、大暴れしてふぬけた官軍共の目を覚ましてやろうぜ!!」

鈴々

「おめめ、ばつちりなのだ!!」

鈴々と張飛ガンダムと翠と馬超ブルーディスティニーはそんなやりとりを続けていると朱里と孔明リ・ガズイはなぜか難しい顔をしていた

愛紗

「孔明殿達はどう思う?」

朱里

「そうですね。聞くところによると各地で反乱が続発して官軍はネコの手も借りたい状況ですので」

孔明リ・ガズイ

「大將軍の自らの出陣といってもさほどの兵力ではないかと……」

関羽ガンダム

「なるほど、それで我らに声をかけてきたというわけか……」

劉備

「理由はどうであれ、これはまたとない機会だ!!ここで華々しい手柄を立てれば我らの名はさらに高まるだろう。そうすれば義勇軍に参ずる者は増え、そうすればより強く、より大きくなれるのだ!

！」

劉備の態度に呆然と見つめる四兄妹と朱里と孔明リ・ガズイと翠と馬超ブルーディスティニー。

劉備

「あつ……。そして、それがより多くの人を救える。それでは出発は明朝！―皆、早速準備にかかってくれ」

こうして義勇軍は賊討伐に向かうことになった。その夜、愛紗は風呂に入っていた。愛紗は以前の劉備の言葉を考えていた

愛紗

「そして、それがより多くの人を救うことになるか……………」

その頃、関羽ガンダムも月を眺めていた

関羽ガンダム

「そして、それがより多くの人を救うことになるか……………」

第12話『関羽、愛紗・志を貫くのこと』

そして、翌日、義勇軍は出発に取りかかっていた。愛紗、関羽ガンダム、張飛ガンダム、翠、馬超ブルーディスティニーは今まさに出陣しようとしていた。しかし……

鈴々

「う……………」

朱里

「はわわ、鈴々ちゃん!!」

孔明リ・ガズイ

「風邪ひいていますからちゃんと寝ていなきゃだめですよ!!」

なんと鈴々は風邪をひいてしまったのであった。朱里と孔明リ・ガズイは止めていたが言うことを聞かなかった

張飛ガンダム

「あいつ、無茶するぜ」

関羽ガンダム

「やれやれ・・・」

鈴々

「鈴々は風邪なんかひてないのだ!!」

孔明リ・ガズイ

「熱が出て、咳が出て、鼻水を垂らしているから、風邪に決まっているじゃないですか」

鈴々

「熱が出て、咳が出て、鼻水を垂らしていても・・・（ズズッ）
なんとかは風邪ひかないからこれは風邪じゃないのだ!!」

翠

「なんとかつてお前・・・」

朱里

「何言っているんですか!!馬鹿は風邪ひかないなんて迷信です!
!馬鹿だって風邪ひくときあるのですから、鈴々ちゃんは風邪ひい

ています!!」

朱里は明らかにひどいことを言っていた

愛紗

「孔明殿、間違ってはいないがお手柔らかに・・・」

朱里

「でも関羽さん」

鈴々

「鈴々はずっと愛紗と関羽と張飛とずっと一緒に戦ってきたのだ!!
!　なのに三人が出陣して、鈴々だけが置いてきぼりなんていやなのだ!!」

愛紗

「鈴々、お前の気持ちはわかるが、その体では出陣するわけにはいかぬだろ」

馬超ブルーデイスティニー

「そうだぞ。かえって足を引っ張ることになるからな・・・」

張飛ガンダム

「心配するな。お前の分まで、俺様がキッチリ暴れて来てやるぜ!!」

愛紗、張飛ガンダムもそう言うのだが

鈴々

「行きたら行くなのだ!!! 絶対に愛紗達と一緒に出陣するのだ!!」

「！」

鈴々はどうしても行きたがっていた。無理したか、鈴々はフラツとした

朱里

「ほら熱があるのに無理するから戦に行くのは無理ですよ」

鈴々

「そんなことないのだ・・・鈴々は三人と一緒に・・・」

愛紗

「張翼徳、お主に任務を与える！！」

関羽ガンダム

「我らが出陣している間、ここに残って村を守ってくれ！！」

張飛ガンダム

「そうだな。これはお前にしかできねえからな」

鈴々

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

朱里

「私達も残ります。戦が長引いたときは兵糧を準備しつつ、鈴々ちやん達と一緒に村の守備につきます」

孔明リ・ガズイ

「それに鈴々さんの看病もしなきゃいけませんしね」

鈴々

「孔明・・・」

張飛ガンダム

「鈴々の事を頼むぜ。朱里、孔明」

ちなみに張飛ガンダムは二人のことを認め、朱里のことを真名で呼ぶようになった

関羽ガンダム

「うむ、劉備殿には拙者が伝えてくる」

馬超ブルーデイスティニー

「村を守るなんて張飛には荷が重いんじゃない・・・」

鈴々

「馬超は黙っているのだ!!」

愛紗

「どうだ。留守を頼めるか・・・」

鈴々

「わかったのだ・・・三人がそこまで言うなら鈴々は村に残るのだ」

やっと事が済んだ

愛紗

「よし、それで我らの妹だ!!村を任せたぞ!!」

鈴々

「合点なのだ!!」

そして、愛紗は鈴々の耳元に……

愛紗

「早く元気になれ……」

とつぶやいた。すると安心したか鈴々は崩れ落ちてしまった。鈴々と朱里と孔明リ・ガズイは留守を任せることになった。そして、義勇軍は出発したのであった

劉備

「しかたありませんね。張飛殿と孔明殿抜きで戦いましょう」

愛紗

「申し訳ない……」

劉備

「ちっ……」

愛紗と関羽ガンダムと張飛ガンダムは視線を村のほうを振り返った

翠

「どうした、関羽、張飛」

関羽ガンダム

「いや……」

張飛ガンダム

「なんでもねえ」

すると何者かが義勇軍の移動を見ていた

アニキ

「ん……？遠征か？」

そして、義勇軍は討伐隊の本陣へとたどり着いた。その天幕の一つには大將軍・何進と將軍・朱儁ザクキャノンがいた

何進

「皆、集まったようじゃな、朱儁よ」

朱儁ザクキャノン

「うむ、ではこれより軍議を始める。曹操よ」

華琳、曹操ガンダム

「はっ！！」

集まった諸侯の中には華琳と曹操ガンダムの姿があった。

曹操ガンダム

「反乱軍のこもる山はまさに天然の要塞。正面突破すればいたずらに犠牲を増やすばかり」

華琳

「まずは山を囲んで、糧道を断ち、兵糧攻めにするのがよいかと……」

何進

「うむ……」

曹操ガンダム

「そもそもこたびの反乱は両者の華憐中継が原因とか、兵糧攻めして相手の指揮が崩れたところで、これまでしさくの誤りを認め、降伏したものは罪は問わぬと言えば、夕反は山を下るはず」

華琳

「うまくいけば、戦わずして乱を治めることが可能かと……」

華琳と曹操ガンダムは自身ありで言ったが……

何進

「手ぬるいな!!」

華琳

「手ぬるいとは……」

朱儁ザクキヤノン

「朝廷に盾突いた賊共の罪を許すなど手ぬるいにもほどがある!!それにこれ以上時をかけては朝廷の威信にも関わる!!」

何進

「悠長に兵糧攻めなどせず、一気に攻めつぶせ!!」

華琳

「しかし、正面からの攻撃はあまりにも無謀!!」

何進

「賊軍など所詮はつごうの集。首謀者さえ打ちとれば、後はなんともなるう」

朱儁ザクキャノン

「どうじゃ、明日の先陣を務め、敵將の頸を上げようとするものはおらぬか？」

朱儁ザクキャノンはそう言ったのであるが、一行は黙ってしまった

何進

「功名を立てるまたとない機会じゃぞ！！」

すると……

劉備

「閣下！！恐れながらこの役目、この劉備めにお任せください！！」

何進

「お主はたしか義勇軍の……」

突然、劉備が名乗り出た

劉備

「この劉玄德、身も心も朝廷に捧げる巨心！！その朝廷に弓引くて気が何万あるうとけして恐れるものではありません！！」

朱儁ザクキャノン

「おお、よくぞ申した。明日の先陣、貴様に申し渡す！！」

劉備

「はっ、閣下と朱儁將軍のご期待にこたえて、賊將の首を取ってごらんにいれてあげましょう！！」

何進

「うむ、見事、賊將の首を取った暁には貴様を官軍の将として、わらわの側近としよう。期待しておるぞ」

劉備は快く引き受けた。しかし、愛紗と関羽ガンダムは浮かない顔をしていた

第12話『関羽、愛紗・志を貫くのこと』A（後書き）

B
パートへ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4995u/>

真・恋姫†三国伝 Brave Battle Story

2011年11月20日03時51分発行